イーストタンプ

☆リノさん☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イーストタンプ

【Ｎコード】
Ｎ０７７６Ｘ

【作者名】
☆リノさん☆

【あらすじ】
ここはどこだろうか。なぜここに来てしまったのだろうか。それすらもわからず、優衣はひたずらに逃げる。とあるコンクリートの街の中を走る。体力の限界も近づいてきた頃、なぜか瞬間移動をしてしまった。「へぇ。ここってやっぱり異世界なんだ」
毒舌家の騎士・二重人格の隣国王子・それぞれの秘書・お茶目な色魔狂、などなど……。個性豊かな美形たちが次々と現れる、一種の逆ハーものでございます。
◆◆◆残酷・流血シーンが出てきます。それに複雑な逆ハーですの

で◆◆◆初投稿である作者◆◆◆お心の広い読者様をお待ちしております。

＊登場人物＊（前書き）

血液型は何となく、です。

＊登場人物＊

飛佐木（ひさぎ）　優衣（ゆい）　１５歳

趣味　特に無し

身長　１５６センチ

特技　国語の成績の低さと数学の成績の高さ

容姿　先生によく指摘される天然のくり色の髪
（本人はあまり好きではない）赤茶の大きめな瞳

その他　動物好き

血液型　Ａ型

ルカ　２４歳

趣味　読書
身長　１８２センチ
特技　剣技と頭脳戦
容姿　黒に近い濃い茶髪　蠱惑的（こわくてき）な蒼の双眸
整った顔立ちをしているが、本人は嫌っている
その他　いろいろと訳あり
血液型　Ｏ型

ユマキスカル・マユ・フムル・バイトン　２１歳

趣味　訓練＆散歩
身長　１５９センチ
特技　身体能力

容姿　蜂蜜色の髪と瞳を持っている

その他　身長が低いため子どもに見間違われることが多々
本人はあまり負い目に感じていない
騎士団長五位

血液型　B型

ユエ・サヴァンナ　19歳

趣味　料理

身長　179センチ

特技　真面目さ

容姿　黒銀に光るくせのない髪に空のような水色の瞳

その他　ヴィアム王国の伯爵家所属　無意識だが

腹黒い

実はというと口調は荒め　よく熱弁をする
オウリの教師役&秘書

血液型　ＡＢ型

ルーク・アヴァン　２０歳

趣味　実験（？）&読書&紅茶

身長　１７８センチ

特技　解剖

容姿　肩の前に出し　軽く結った銀髪
（結ばなければ背中より長いくらい）
色々な色の混じった翡翠の瞳

その他　公爵家当主&コウリの秘書
超甘党

血液型　Ａ型

オウリ・赤眼　　コウリ・青眼　　1

9歳

趣味　オウリ・落書きや悪戯
　　コウリ・「えっ？　趣味？　ユイと一緒なら何でも」

身長　172センチ

特技　オウリ・狙撃
　　コウリ・双六（すごろく）

容姿　流れるような金髪に、オウリは鮮やかな赤、
　　コウリは海のような深い青の瞳

その他　二つの人格、性格の違い
　　オウリはユエに「クソ餓鬼」と呼ばれ、
　　コウリは「変態」か「変態妄想狂」と固有名詞で呼ばれている
　　（ユエは気分次第で「殿下」と「様」が抜ける）
　　コウリは対人恐怖症＆人間不信

血液型　Ｏ型

バイアム・ダ・ジェスワ　２７歳

趣味　お酒と女

身長　１９３センチ

特技　？

容姿　猫科肉食獣の顔立ちと金色の目
赤褐色の髪

その他　バロン王国の第一王子であるが
街を徘徊するひねくれ者

血液型　Ｏ型

？？｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜†§†§アレシュワンド大陸§†§†
｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜？？

大陸の東端・バロン王国
である。
大陸の中央・ヴィアム王国
国。
大陸の西端・西ヴィアム
を作っている。
大陸の最南・フムユスト皇国（こうこく）
ている国。
われている。

山脈に囲まれ、
大陸のなかで一番小さな国
時代設定・２０世紀フランス
大陸一の面積と富を誇る巨
時代設定・２１世紀イタリア
すべてが砂漠で、
唯一のオアシスに巨大な都
時代設定・１９世紀エジプト
すべてが謎に包まれ
存在しないとも言

序章

「いったい……何なのよ。あいつら…」

はぁはぁと肩で息をしながら、優衣はコンクリートの壁に手をついた。

肩にかかる程度のクセのあるくり色の髪。チェック柄ブレザーの制服。赤茶の瞳というごく普通の顔立ちをした優衣は、なぜか見慣れないコンクリートの街並みの中を逃げていた。

昼のはずなのにコンクリートの家から子どもが出てくることはなく、街は静まり返っている。

ただ、赤い制服を羽織った集団が、自分を追いかけているということだけ。

体力には少しばかり自信がある優衣でも、集団の男たちに追いかけられるというのはさすがにキツかった。

（しかも……、ここにくる前の記憶が全く無いって、どういうこと……？）

「――――いたぞっ！　必ず『空の城（ユスリム）』へ連れ戻せ！」

（はっ？　もう見つかった？）

外人のような顔立ちをする男たちの声に、優衣は痛む足を気にせ

ず走り出す。

コンクリートの家の角から出てきた、赤い制服の男たち。兵士のような甲冑をしていない代わりに、その手には様々な武器が握られていた。一人は大剣、一人は斧、一人は鬼の金棒と、まるでどこぞかの小説の世界に入ってしまったようだ。

「傷は付けるな。我が主君が殺すより先に価値があると仰られている」

（――――どう考えても味方って雰囲気じゃないわよ）

追いかける男たち。逃げる自分。

国語の成績よりは体力の方が自信はあっても、地理に関して無知な優衣の方がどう考えても不利だ。

前の角から五人の男たちが見える。これでは完全にサンドイッチ状態だ。

『――――抵抗すると思うので眠らせてください』

大剣を持った男にそんな通信が入る。男は少し考えた末、主君の考えには逆らえないとばかりに大剣を構えるのを止める。

（な……、に……）

大剣を持った男の行動に、何も知らない優衣は疑問を覚えずにはいられない。思わず身を硬くすると、けたたましい音とともに視界が赤色に染まった。

?緊急避難警報！　緊急避難警報！　『第6赤蜘蛛（シックス・レッドラウ）』、第三区域から南西に進行中！　第五区域のみなさまは、ただちに指定の地下シャッターへ避難してください？

（――――――――――っ！？）

その瞬間、幾何学模様の光の帯が、優衣の周りをぐるぐると回る。メビウスの輪のように八の字を描いてまわる紫の光に、すいこまれるように優衣は意識を手放した。

◆◇＊＊＊◇◆

「――なっ……！　消えた……っ！？」

まだ耳元で、機械音声が人民のいない第五区域に警報を伝えるなか。

大剣を持った男は、驚きのあまり目を剥いた。

その場にいる誰もが、さきほど娘がいた場所を見て、瞠目する。

「瞬間移動を、したというのか……！？　まさか、ありえない……！」

自尊心の高い男が、悲痛な叫びを上げた瞬間だ。

序章（後書き）

初心者です。これからよろしくお願いします。

1

（――――――っ）

空中に浮いたような感覚がして、優衣はとっさに身を丸めた。一瞬の間もないほどの間で絨毯に肩が当たり、少しのあいだ痛みに耐える。

しばらくしてから、立ち上がろうとして手を突いた瞬間、優衣の目にそれが映った。

（……いつのまにこんなものが）

右手薬指にピッタリと嵌る、ひんやりとした赤と黒の指輪。二色の指輪を交錯させたように嵌められるそれは、見るからにすべすべそうで独特の光沢を放っている。

真紅のような赤い指輪には、規則的な方陣が連なるように彫られ。闇のような漆黒の指輪には、筆記体のように流麗な文字が刻み込まれていた。

しばし見入っていると、ふと目の前に人がいたのに気がつく。

「……え……っ」

一人用のソファに腰をかけ、足を組んであまつさえ頬杖をする青年。

黒に近い濃い茶髪。長い睫毛からは蠱惑的な蒼の双眸が覗き、右耳につけた紫のピアスがそれを際立たせる。
長身というほどではないものの、立てば１８０はある体躯は男性にしては細身。
黒い騎士服と黒い手袋という、黒に尽くされた茶髪の青年は、切れ長の瞳で優衣を見下ろしていた。

「だ、だれですか……？」

深くて、長い沈黙のあと、呆れため息が青年から発せられた。

「貴様の頭には、警戒するという文字はないのか？　私の記憶からでは、普通なら泣き叫ぶが良いところだ」

「いやいや、さすがに初対面で泣き叫ぶは失礼だって……っ」

言いながら、思わず優衣は床に正座した。
茶髪の青年は頬杖を止めて、しげしげと優衣を上から下まで眺める。

「床に座る習慣。見慣れぬ服装。……やはりか――――」

冷たさを宿した深みのある声が、抑揚も無く発せられた。
そのことに疑問を覚え、優衣は「やっぱりって？」と問い返す。

「……好奇心旺盛なのは、あまり良くないことだ」

「っ！」

冷たい声が、優衣の耳を打つ。

「とりあえず名前がないのは不具合だろう。私はルカ。バロン王国王城護衛騎士団に所属している、――――」

優衣は、ゆっくりと頭を降下させた。

（そうだもんね。ここは、わたしの知らない場所なんだから……、わたしを警戒しないはずが無い…。職業柄、というのもそうだろうし……――）

まして戦争をしない日本など、相手を異常に警戒することはない。せいぜい、怪しい、変質者、程度に警戒するのが妥当だ。

自分が警戒したことはあるが、警戒されたことは一度も無い。

（そうか……やっぱり一人なんだ…）

一人は慣れっこだ。いや、一人の方が自分にとって楽だった。

他人と合わせるのは得意。でも嫌い。

他人に恨まれるのはいい。でも傷つくのは嫌。

他人と一緒に居るのは不得意。でもアレ以外ならば嫌いじゃない。

「……」

優衣はすっと立ち上がった。それを見た茶髪の青年が、眉を寄せる。

自分が大きな両扉に向かって歩き出したのを見て、彼も立ち上がった。

「どこへ行くんだ」

「……あなただって尋ねてるじゃない。それって理不尽って言うのよ。……そんなことどうだっていいでしょ。とりあえずここから出て行くの」

「ふぅん」と、あまり興味無さそうにルカが言ってくれる。

そのまま両扉を引こうとした、その時――――

「！」

「まぁ待てよ。そう急ぐことはないだろ？」

黒い手が、両扉を元の場所に押し戻した。優衣は、彼を横目で睨みつける。

「なに？　何か用？」

性格上、優衣は男っぽい喋り方をすることがある。いまは特に冷めているため、目も据わっていた。

「一つ教えてやる」と、ルカは唇を美しく歪ませる。

「この世界は貴様の常識が通じないことが多々ある。貴様をこの屋敷に連れてきたのは、この私だ」

「へえ。それで？」

わざとらしく挑戦的な笑みを刻んでおく。我ながら良い演技だ。

「貴様は、どうしたい？」

整った顔が、優衣に近づく。

「どうって、ただ一人で静かに暮らしたい」

「ほぅ……？」

それは確かに純粋な考えだった。

一人で、静かに暮らしたいと、いつも願う。

「だが、一人暮らしは無理だな———」

しかしこの男は、あっさりとそれを玉砕してみせた。「どういうこと」と、優衣は絶えずルカを睨む。

「成人するまで、親または後見の許可無しに独立を認めず。生活状況に至っては例外である。また貴様は身元不明の娘。何かに巻き込まれたとしても、騎士団は貴様を見捨てるだろう」

「……っ」

優衣は思わず押し黙った。切れ長い蒼の双眸が、試すように自分を射抜く。

「……やってみなきゃ、わかんないでしょ……」

優衣のつぶやきに、ルカは眉根を寄せた。

「……仕事やって……。だから、やってみなきゃわからないでしょ。わたしはもう１５歳。子どもといえる年齢じゃない……」

「私にとっては、まだ１５歳だが」

「この世界でも、１５歳で働く人だっているでしょ。それと同じよ。安全な場所でぬくぬくと育ってるほど、わたしの家は裕福じゃない」

対照的に、さほど貧乏な家でもなかった。旅行にも行けるほど余裕はある。

「だから、わたしも仕事をして、一人で――――――」

「――――――現実は、そう甘くじゃない」

「……！　……わかってる！　わたしだって現実を知ってる！」

「何を知ってるって言うのさ」

「他人とは違う現実よ！　他人には当たり前にあって、わたしには当たり前じゃない現実！！」

ルカが、一瞬だけ目を見開いた。

「それは……、自分自身の理論的現実だろ……――――？」

「そうよ。自分だけの理論的現実よっ。そんなことより、何か仕事を――――――」

「――――なら」

ひどく挑発的な表情でありながら、冷めた言葉を発している彼が。

「親のいない現実を、私が教えてやる――――――」

冷徹にまでも、優衣に言ってのけた。優衣は、ただ「ええ」と、力強く頷くだけ。

◆◇＊＊＊◇◆

自尊心の高い大剣使いが、青年の目の前で申し訳無さそうに頭を垂れた。

「申し訳ございません。目標を見失いました。……こたびの罰は、重じんで受け入れさせていただきます…」

部屋は薄暗いため、大剣使いの主君の表情を窺う事は出来ない。当たり前だ。この部屋は主君の研究室でもあり、それに主君の顔を直接見ることは決して叶わない。

「頭を上げてください。私は貴方よりは上の立場ですが、貴方の主君ではありません。本来忠誠を尽くすのは、この国唯一の皇太子殿下だけですよ」

自ら主君ではないと否定する青年は、同性でもうっとりとするような美声で尋ねる。

「それよりも、私の自作したクリームたっぷりのケーキ。いつのまにか半分が無くなっていたのですが、貴方知りませんか？」

……大剣使いから嫌な汗が噴出したのは言うまでも無い。

確固たる決心を持って、大剣使いはおずおずと口を開く。

「申し訳ございません。止めるまもなく、サイル皇太子殿下が味見をなされ……ただ今療養中でございます……」

「……。つまりは「つまみ食い」をしたと？」

青年が「療養中」という言葉に反応しなかったのは、あれを食べたらどうなるか知っていたからだ。

……しかし国のトップたるお方がケーキをつまみ食いし、挙句療養中とは笑えない話だ。

「効果は抜群だったようですね。実はというと、まだお会いしたことが無いエフェム殿に食べてもらいたかったのですが……残念です」

残念じゃねぇ！　という言葉が喉元まで出かけたが、男は自制心と神経を使ってそれを飲み込んだ。

2

「疲れたぁ」

仕事と言うものの、ほとんどが荷物運びという雑用であった。優衣は腰を伸ばしつつ、周りを見渡す。

古い小屋のような店。カウンター席にはまだ人はおらず、静か過ぎてガランとしていた。

ここは簡単なお酒が飲める居酒屋だ。さほど危ない職業でもなく、店主も気の良さそうなおじさんだった。

「樽に入ったワイン運び。……これ一つどれくらいするかな……」

いまさっき運んできた木箱や樽を見下ろし、優衣は思う。

（……まさか、本当に許してくれるとは…）

『居酒屋か果物屋。私が後見人として話をつけておいた。どちらか好きなほうを選べ』

ルカの冷たい言葉を思い出し、優衣はぶるぶると頭を振る。

居酒屋にした理由は、この国の通貨である『ミン』の給料が良かったからである。子どもで贅沢をしなければ、一日５０ミンである程度生活できるらしい。この居酒屋は労働で一日６８ミン稼げるので、いいくらいの楽しみもできた。

（この店は安定しているらしいし、わたしも　ある程度体力あるし……万々歳ね）

思わず心の中でガッツポーズ。

と。

「――あれ？　あの、まだ、開店時間じゃないんですけど……」

チャりんと子鈴を鳴らして入ってきたのは、自分よりは体つきのいい少女だった。

動きやすそうなハーフパンツ。胸のなど完全に無視した白シャツに上着。サラサラストレートの蜂蜜の髪は短く、少し切れている髪と同色の瞳。

桃色の唇は一文字で硬く結ばれ、少年のような格好をした少女だった。

「……ちょっとどいてくれる？」

「え？　えぇはい」

自分より高いソプラノ声の少女は、優衣がそこを退くとさっさと奥へ入ってしまった。近づくと、自分とさほど変わらない身長だ。少女の方が1～2センチ高いくらいだろう。

「あの、開店時間まだですよ？　それに勝手に奥へ入っちゃいけないっておじさんが言ってましたよ」

そんな声も空しく虚空へ消え、しばらくしてから少女が出てきた。

優衣のところへ近寄り、ギロリと睨んだ。
「あんた、……だれ？　見たところ、変な格好してるけど――――それで、油断でも誘ってるつもり？」
「油断って……別にそういうんじゃないけど、わたしは優衣だよ。ここに雇ってもらってるの」
「ふぅん。そういうんじゃないかと思ってた。武器もないし、無警戒だし、見た目からしてそうね」
（図星なんだからいいけどさ……）
頬をポリポリ指で掻く。その右手を見て、少女が一瞬だけ息を呑んだ。
「……。あなたも大変そうね。そうだ、私の名前、教えてあげる」
「あげる……？」と目を剥いた優衣など気にもせず、少女はにこりとも笑わず告げる。
「私はユマキスカル・マユ・フムル・バイトン――――――――、ちょっと、どうして背中を向けるの」
「……。だって名前が長すぎるんだもん！　もうマキャんでいい？」
「今の全部よ。母と父の名前を複製させて出来たのがこの名前。普通では、ユマキスカル・バイトン。
……そうね。初対面のあなたにいきなり愛称で呼ばれるのもあれだ

けど、いいわ。あなたなら、オッケーにしてあげる」
「は、はぁ……」
マキという少女は、つかつかと優衣の横を素通りした。
「———またお会いしましょう。そのうち必ず、ね」
ちゃりんと、扉を開る。そして、最後にこう言い残した。
「あとこの居酒屋、いいと思うけど、あとできっと後悔するわよ」
マキは、さっさと出て行った。

◆◇＊＊＊◇◆

優衣は68ミンを貰いうけ、ヨーロッパの街並みを歩いていた。
レンガ造りの家々。真ん中には整備された馬車道があり、大通りは現代ヨーロッパと見間違われてもおかしくないほど活気だっていた。
それは馬車道を占領するほどだ。もう歩行者天国と化している。
（それにしても、デッカイ王城よね）
メイルという街のほぼ中央に君臨する、白亜のお城。それはまるでノイシュヴァンシュタイン城のようで、高さにしてみれば高層ビ

ルだ。

と、そんなことを思っているうちに、宿屋についた。

レンガ造りの宿屋のなかは意外に広くて、カウンターで眼鏡をかけるおばあちゃんに近づく、

「この宿で一番安い部屋はありますか？」

「……安い部屋かえ。ちょいお待ち」

壁にひっかけている部屋の番号を見やって、白髪混じりのおばあちゃんは「お嬢ちゃん一人？」と虚もないことを尋ねてきた。

「え、ええまぁ。――――安い部屋はありましたか？」

「そりゃ大変だろうね。――――安い部屋はここから一番奥の部屋。料金は前払えだよ。そういや何日泊るんか？」

「……住み込みってできますか……？」

「住み込みかえ。……ここは最高でも一週間が決まりゆえ、住み込みは無理んだ」

妙ななまりかたをするおばあちゃんに、優衣は「やっぱり」と少し肩を落とした。少し考えた末、口を開く。

「……あの、いまあまりお金がないんです。一週間泊るんですか、その日その日に支払ってもいいですか？」

「それじゃ商売あがったりじゃ。でもあんさん、一人じゃろ。特別

にその日その日に支払ってもええで」

「本当！？」

明らかに目を輝かせた優衣に、おばあちゃんは「今日は６ミル頂こうかえ」と、要求する。優衣は銭を６枚出し、ほっと一息ついた。

「まいどあり。……そういやあの部屋のシャワー、お湯がでないえ大丈夫かえ？」

「あぁそうですか。でもそれはご心配なく、です」

いったいどこから湯を引いているのか疑問だが、優衣は歩き出す。

（そういや、……おのおばあさんシャワーって言ってたよね。……年長の方なのによく横文字覚えたね……）

一番奥の木扉を開けると、狭いが綺麗な部屋であることが判明した。

そばにある木製のベット。その横にある木の机よ椅子に花瓶。もう横の壁に一つ扉がついてあったが、それがシャワールームだろう。

木製の机に鞄を置き、優衣は（そういえば）と、今さら気付いたことがあった。

（わたし、この制服しか持ってない……）

今から買いに行こうにも、外は真っ暗で店じまいをしている。

理由は知らないが、夜の１０時を超えたら指定の店以外は店じま

いをしなければならないらしい。

（どっかにコンビニ無いかな……）

この世界に、あるわけないのである。

◆◇＊＊＊◇◆

昨日は水のシャワーだけ浴び、しょうがないから制服を着た。朝起きてすぐに手ごろな服を買い、さっそく宿に戻って服を試着。

（意外にピッタリサイズ。お値段も合計8ミルとお得だし……♪）

社会の歴史からすると、この国は結構な近世ヨーロッパだと思われる。

ある程度の進んだ科学。（一昔前のシャワーを見て）

膝が見える程度のスカート。（今着てます）

これぞ自由を愛する文化と言えよう。

（よしそれでは、仕事に行って参るのであります！）

勝手に敬礼をし、勝手に部屋を飛び出す。もちろん皮の鞄を持って、だ。たくさんの貴重品が入っているし。大通りを抜け、路地の奥にある馬小屋のような店に入る。

「おじさん、おませた――――――……しました…？」

玄関から勢いよく入ったと思ったら、居酒屋にあるはずの物がすべて無くなっていた。

（うそ……。どうなってるの…、これ……）

木の椅子と机。そしてカウンター、まではいいのだが。カウンターの棚に置いてあるボトルも、昨日置いていた木箱も、何もかもが、無くなっていた。

人の気配すら……ない。

「……誰も、いない……」

「――――誰もいないと思ったら、なんだ娘が居たのか。ヘッ」

思わず中に入ってつぶやいたら、背後で酒のにおいとともに男の声が聞こえた。

ズカズカと、居酒屋に入ってくる、酒の臭いをさせた男二人組。酔っ払っているのか酔っ払っていないのか、という最中で、先にしゃべった大男がしゃべり始める。

「おれらぁな、ここんとこの店主に金貸してんのよ。わかる？　そんでさぁ、今日返してもらおうと思っとたんけど、ここのクソ爺が金も返さず出て行ったって。いくら騎士団が捕まえてくれるっと言っても、虫の居所が悪いってわけ」

「……いわゆる、性質の悪い借金取りってやつね」

「そういうコト」

にやりと、不気味に口角を吊り上げる大男。その隣にいた細身の男は「だから」と付け足した。

「あんたに、それを払ってほしいわけ」

「……お金、持ってませんが」

「違う違う！　お金は後でいいから、体で売ってくれる？」

「つぎゃほごっ！」

「「つぎゃほごっ？」」

大男が奇妙な声を出して倒れ、優衣と男の声が不本意にも重なる。気絶してるのか動かない大男に、細身の男が「おい」と肩を揺らす。

（……見た目とは違いタフじゃないんだ）

てっきり、どんな攻撃にも屈しない鋼の肉体、的なことを想像していたのに、と、優衣が場違いな感想を抱く。

「おい。誰にやられた？　おれには何にもわからねぇぞ」

「――――それって、私のこと？」

「へ？」

男が振り返った先には、蜂蜜色の髪と瞳を持った少女が立っている。ただし、彼女は白い軍装を上からはおり、不敵な笑みを浮かべていた。

「ちょっと蹴りを入れただけで昏倒するんだから、こっちが焦っちゃたわ」

マキの横で、白い軍装を羽織った男たちが、槍を構える。細身の男の顔が、徐々に蒼白になっていくのを、優衣は知らず。

「いいわ。改めて自己紹介。私はバロン王国王城護衛騎士団（おうじょうごえいきしだん）、騎士団長第五位・ユマキスカル・バイトン――」

「金融関係は私専門外だから後はよろしく」と、後ろにいる騎士たちにマキは告げる。

優衣はしばらく、その場を動けなかった。

3（前書き）

読んでくれた方に感謝！

3

屋敷はまではマキに送ってもらった。断ったのだが、彼女はなぜか屋敷の場所を知っていたのだ。

とりあえず床に正座して、優衣は王様のように椅子に座る茶髪の青年を見上げた。

昨日着ていた騎士服ではなく、白シャツに黒い上着というシンプルな服装だ。

「――言いたいことはあるか」

「……。言うコトは無いです。ただ、一応謝ります。ごめんなさい」

謝罪の気持ちはあったのは確かだ。だが、それ以上言うことはない。

「――ここはな、行き場を失った子どもの集う場所だ」

（……え……？）

思いのほか穏やかな声が、優衣の耳を打つ。ルカは遠くを見る目で、独り言のようにつぶやいた。

「孤児院とはまた違うが、親がいるいないに関わらず、ここの屋敷の主人は子どもを受け入れている。精神的・肉体的外傷を受けた子どもだ」

（――精神、的……外傷）

優衣の目が、徐々に虚ろになる。記憶が、フラッシュバックしそうだ。

「…こんな話をしてもどうせ無駄だな。やつが来るまで、ここにいてもいなくてもかまわん。どうせ秘書殿は、今日来るだろう」

（ひ、秘書って誰よ）

◆◇＊＊＊◇◆

改めて思うが、この屋敷は広すぎじゃないか。そして、使用人に連れられて入ったのは、自分の自室と言われる部屋だった。

応接室。白いテーブルに緑のソファ。左の部屋は大きな天然石の脱衣所。右の部屋は大きなベットがある寝室だ。

（……一人で三部屋も使うとか……、リッチ過ぎる……）

そう思って優衣は廊下の外に出る。すると向こうから、使用人と思われる服装をした女性がこっちに来た。

「ユイ様に会いたいと仰られる方がいますが、どうなされますか？」

「へ？　あぁはい。いいですけど」

（……わたしに客？　この世界で友達なんか作った覚えないんだけど）

「部屋でお待ちください」

部屋で待てと。しかしいったい誰だろう。思い当たる人物なんていないのに。

しばらくしてから、両扉がノックされた。

「はい」と返事する。

部屋に入ってきたのは、美形優男だった。

（ここって……、美形しかいない世界ですか？　乙女が夢見る……）

ストレートのサラリとした黒銀の髪。水色の双眸の奥には、野生的な光を放つ何かが垣間見える。

濃い青を基調とした燕尾服と、顔に貼り付けた穏やかな微笑は、まさしく執事に相応しい。

「執事なひと！」

「……。違います。何であんなクソ餓鬼の世話なんてしなきゃならないんですか。わたしはただの秘書です！　決して執事ではありません……！」

超猛烈否定された。しかも若干固有名詞が入っていたのは気のせいだろうか。

「そういえば自己紹介がまだですね。わたしはユエ・サヴァンナ。お迎えが遅くなって申し訳ありません。すぐにでも王宮に戻りましょう。ユイさん」

黒髪の青年が優雅に一礼――――――って。

「なんでわたしの名前を！？　ってかお迎えって……！」

「今からでも馬車に乗っちゃいますか？」

「うん、……ってかとりあえず人の話を聞けぇぇぇぇぇ！」

ユエはきょとんと目を瞬かせた。

……意外にそれが可愛かったりする……。

「ユイさん……。やっぱり記憶が消えてしまってるようですね……」

「えっ？　てかその前にあなた自己紹介したっしょ」

「わたしはその場所にいなかったんです。惜しいことに」

「そうなの？　それに記憶がっっっ」

……舌噛んだ。

「大丈夫ですか？」

痛くて引きつった笑みを見せる。ユエは近づき、優衣の顔を下か

ら覗き込んだ。

（無駄に美形の人は顔を覗き込むな……って言えたらどんだけ嬉しいか）

心の中で白旗を振る。駄目だ。美形に勝てる気がしない。優衣はそう思いながら、うさんくささ倍増の目でユエと視線を合わせた。

「王宮に行きましょう」

「話がぶっ飛びすぎてる気がするんだけどっ？」

しかしユエは、あくまで朗らかな微笑を湛えている。

（ずるい。すごくすっごく、ずるい）

目の付け所がないほどの美形っぷりに、優衣はいっそ呆然としてしまう。

「あのね、王宮に行くとか意味わかんな――――――」

「――――後見人の私を差し置いて、勝手に国外へ出て行ってもらうのは困るな」

バンと、乱暴に扉を押し開いたのは思ったとおりルカだ。ユエは反射的に優衣を背中に回し、ルカを睨みつける。氷のような澄んだ蒼い視線と、空のように澄んだ水色の視線が、探り合うように交錯した。

「……何者だ。名を名乗れ」

「さすがは貴族のご身分。命令口調はお手の物のようだな」

けなすように、ルカは鼻で笑う。右耳に付けた紫のピアスが、小さく揺れた。

「第一発見者であり後見でもある男さ。初めまして、ヴィアム王国の秘書殿」

「……」

意味ありげに視線を送ったルカに、ユエは複雑な心境で口を閉じる。優衣は美形の青年二人を交互に見比べ、ただただ疑問符を浮かべるしかない。

「秘書殿。正式な後見人は貴様の王子だろうが、この国においては私が後見人だ。少しはわきまえてもらおうか」

「……。申し訳ありません……」

（こんな奴に謝らなくてもいいんだよ？）

真面目なユエは几帳面に頭を下げた。ルカは自身の前髪をくしげする。

「…それで、正式な署名はもらってきたのだろうな」

「はい。変態妄想狂――失礼、コウリ殿下からユイさんを引き取り

たいと、正式に署名を」

「……なるほどな。本人の意思さえあれば、すぐに王宮に行けるわけだ」

ユエがルカに近づき、彼に書類を渡す。一通り読み通したルカは、唇を笑みのかたちに歪ました。

「貴様はどうしたい。王宮で暮らしたいか？」

ルカの冷たい視線と、ユエの期待こもった視線が、自分に注がれる。

王宮で暮らす？

いきなり説明もなしに王宮とか、意味わかんない。

「王宮に、行きたくありません」

「ほぉ？」「！　ユイさんっ！」

ユエの悲痛な叫びが、部屋を木霊する。

「それは、理不尽だと思います。わたしは王宮に行きたくありません」

「ユイさん、落ち着いてください。王宮ならあなたの味方となる人がたくさんいます。この国よりは、王宮の方が安全なんです。どうかわかってください」

「それはかなり独断の偏見だな若造。それを決めるのは貴様じゃないだろ」

ルカが黒い手袋の皺を伸ばしながら言う。

「全てを決めるのは本人だ。それに行かないとは言ってないだろう。そのような庇護欲があるのなら、少しは待つという行為を知らんのか」

「……不本意だけど、わたしもルカに同感」

ユエは苦渋のすえ、少し身を退いた。

「……わかりました」

すごく渋々感が出ているがそこは気にしない。

「一週間経ったら、お迎えに上がります。ですがお願いです。ぜひ王宮に戻ってきてください」

是とも否とも言わせず、ユエは一礼して流れるような動きで優衣の手を取った。

（なに）と思う暇も無く、なれた手つきで唇を押し当てる。

（っっ！！）

「では。また一週間後に」

動揺しきった優衣に対して、ユエはルカにも一礼を取って速やかに部屋を退出する。その背中を見送ったルカが、少し眉根を寄せた。

「一週間とは、早い日程だ……。それほどあちらは急いでいるのか……」

つぶやき、カツカツと長靴を鳴らして、優衣に近づく。

「……まさか、まだ屋敷に居たいと言うとはな。この街で楽しいことでも見つけたか？」

「……。今日中に来るって言った秘書殿って、ユエのことだったの？」

ルカの質問には答えず、優衣は逆に問い返す。「あぁ」と、ルカは頷いた。

「貴様を引き取った時から、すでに若造が言っていたからな」

「……。そういや思い出したけど、引き取ったって？　てかどうやってあそこから移動したの」

瞬間移動、というのか、それともただ単に気絶していただけなのかは知らないが、一応尋ねてみる。

ルカは若干渋面を作って「運んだのは私だが……、貴様がいたと

いう場所から移動したのは知らんぞ」と、小さな声で言った。

「知らないの？　一番、それも何でも知ってそうな顔してるのに？」

「……。うるさいな」

言い、黒い手袋のまま優衣の頬を引っ張った。

「い、――――――っ」

「――――とりあえず貴様は、生きてればいいんじゃないか？」

整った顔を近づけ、ルカは皮肉げに笑う。

すぐに離れて、彼は部屋から退出した。

（い、生きてればいいんじゃないか……って――――――）

何ソレ、と、尋ねる声は、空しく虚空をさ迷った。

3（後書き）

ついに二人目の美形登場！
わたしが知らないあいだに読んでくださっている方々、ありがとうございますっ！

4（前書き）

物語の進み具合が早いのは作者のせい。

4

特に何も無く、普通に一週間が経過した。今日はお祭りらしく、王城護衛騎士団の者はすべて召集されているのだが。

「……あなたは行かなくていいのね」

右も左も本で埋め尽くされた書斎。悠然と椅子に座って本を読むルカに、優衣は呆然と立ちながら質問を投げかける。

なんか異様にサマになっているって、こいつだとムカつくな。

「あなたも騎士でしょ？」

「……。私は、他の騎士とは違う」

「はっ？　何が？」

いきなり立ち上がったルカに、優衣は思わず身構える。

「……なぜ私の軍装が、他の騎士と違って黒い色をしているかわかるか？」

「え？　あぁ、そういえば……。騎士の人ってみんな白だったような……」

「護衛騎士団の位は、騎士団長、二級騎士、三級騎士、従騎士と言った四つの位に分かれている。位としては二級騎士だが、どの位にも黒い軍装なんてものはない。例外中の例外だ」

「それで」

続きを促すと、ルカは見たことが無いような苦笑いを浮かべて答えた。

「――――闇に姿をくらませ、日の光に決当たることの許されない“黒”の存在。裏で暗躍する者に鉄槌を与える、いわば影の覇者さ。私としてはこれが殉職だ」

（……なんで……）

誇りに思っているのだろうか。でも、そんな感じの表情じゃない。

（……むしろ）

いっそ、自分自身を哀れんでいるか、さげすんでいるかのような。そんな表情だった。

「……そのうち秘書殿が来るだろう。部屋にいるか、外に行けよ」

微笑を消し、ルカは言う。それを見ているのが辛くなって、優衣は足のつま先を扉へと向けた。

◆◇＊＊＊◇◆

（とか言いながらなんですよねっ）

屋敷を出て約八時間。今は太陽が沈んでお星様がちらついている時間帯。

街の中央に鎮座するお城を見上げても。

王城の敷地内である庭園の奥の林を見渡しても。

はてや明日の方向へ見やっても。

（わたしが迷子なのは変わりない……）

そう。あれやこれやと見ているうちに、優衣はいつのまにか王城の林に迷い込んでしまったのだ。

……我ながら何て情けない現実。トホホ……

「いったいどこから入ってきたのかわからないから、この林から出られないわけで」

優衣の記憶では、裏門の端っこに出来ていた隙間からこの林に入った気がする。なぜ裏門の隙間からこの林に入ったかというのは聞かれたくない話だが、とりあえず自分が危機的状況に陥っているのは変わらないわけで。

ヤケにデカく感じる。ノイシュヴァンシュタイン城。

「――あの辺で物音がしたぞ」

「コラッ。声を出すな。気付かれるだろッ」

まぬけな衛兵もいたのね。

優衣は獣道ともいえる小道を、ゆっくりと後退し始める。見つかりませんように……、と何度も心の中でつぶやきながら。

シャキッ、と小枝を踏んだとき、いきなり腕を捕まれ捻りあげられた。

「いたっ」

「っ！　子ども！？」

黄色いランプが優衣の顔を映す。明かりを持っていた片方の男が「どうする？」と言った顔で相方を見た。優衣を取り押さえた男の方は、少し考えたあと優衣の腕を放した。

勢い余ってこけそうになったが、何とか堪えて二人の衛兵を見上げる。

「おまえ、なぜこの林にいる。ここは一時間ほど前から閉鎖されているはずだ」

……えっそうなの？

（わたしこの林で二時間は過ごしたんですけど……）

「ま、迷ってしまったんです……」

できるだけ子どもっぽく見せようと思ったが、無理だとすぐに悟った。いぶかしげに二人は眉をひそめる。優衣は何かを言おうと口を開いて、ちょっと肩が動いて激痛が走った。

（ったっ！）

思わず肩を押さえると、さきほど腕を捻り上げられた男の方が口を開く。

「いきなり捻ってしまったことは詫びる。すまなかった。この林は日没する時間帯になると封鎖される。王城が近いせいだ。俺がお前を王城に連れて行く。そこで治療しよう」

「へ？　ち、治療ってなにも、ちょっと捻られただけだし……、大丈夫ですよ？」

いやいやいや！　その仕返しとかが怖いから嫌なのよ！

訴えるような目で男を見つめると、男はゆるゆると首を振った。

「無理に捻り上げたから、骨に異常をきたしているかもしれない」

いーやーだー。

本人は本気で心配しているようだが。

◆◇＊＊＊◇◆

「骨にヒビは入ってないようです。ただ打撲に似た鈍い痛みが明日

からくるので、一応包帯を巻いておきましょう」

狭い医務室で優衣と向かい合うのは、白衣を着た丸眼鏡の男。少しほっとしたのが、平凡で人の良さそうな顔立ちをしていたことだ。身長も自分より少し高いくらいで、見上げて首が痛いということはない。

優衣の左腕には包帯が巻かれていた。

姿勢をくるりとかえて後ろを向く。この部屋はカーテンで仕切られているのだが、そのカーテンに人影が写った。

「ユイ様いらっしゃいますか？」

（わ、わたしっ？）

白いカーテン越しで話しかける女性の声。

「あぁ。いるよ。でも先に用件を言ってくれるかな」

「あはい。実は……、屋敷にいなかったユイ様を引き取りたいと、ユエ様とルーク様が起こしになっております」

優衣はひきつった笑みをうかべた。てかなぜ王城にいるとわかった。テレパシーか。

（しかも、ルークってだれ……？）

「――――駄目だ。ユイさんは僕の患者だ。例え隣のお偉いさんでもできない。手荒い真似でもされて怪我をしたらどうするんだ」

おお。平凡な顔立ちをしてると思ったら結構強いこと言うじゃないか。

カーテン越しにいる女性が「ですが……」と言葉を濁らせながら言った。

「正式な署名もありますので……。それにユエ様は少なからず伯爵家の血を、ルーク様は公爵家当主でございます。王国としての名誉もありますので、例え名医と呼ばれるあなた様でも、今回は退いてもらいたいと…」

「あ、あの、わたし行きますっ！」

女性の言葉に優衣が飛び上がったのは、白衣の男が舌打ちした瞬間だった。

「こ、公爵ってお偉い人なんでしょ？　どっかの衛兵みたいに、いきなり捻りあげたりはしないでしょ」

「うっ！」

すぐカーテン隣にいたらしい男が、思わずうめき声をあげたのも気にせず。

「治療してくれてありがとね。じゃ、じゃあ……！」

カーテンを開けて女性を見た瞬間、どこのメイドさんですが、と場違いな声音が広がった。

5

?お前、昨日までどこへ行っていたんだ。しかもノコノコとわたしにまで着いて来て……！？

聞き覚えのある声が、叩こうとした両扉の向こう側から聞こえた。荒々しい口調など初めて聞くが、もう一人の男がなだめるように声を出す。

?別にいいでしょう。王宮から抜け出すのも結構楽しいですよ。研究にもはかどりますから。私も久しぶりに、ユイちゃんにお会いしてみようと思いましてね？

それも聞く限りかなりの美声だ。落ち着いてしっとりとした、男性にしては高い声音。

後ろに侍女がいるのも忘れて、優衣はその会話に聞き耳を立てた。

?！　お前。ユイさんに会ったことがあるのか……ッ！？？

?えぇ。ユイちゃんがこの世界に来たときから王宮に入っていましたから？

?こんな奴にまで先をこされたっ！！？

?……。こんな奴とは失礼な……。ほらほら、肩を落

として落ち込まない？

美声の持ち主が青年に近づく気配がある。

ビシッと人差し指で、彼がけん制する。

？お前がユイさんにちょっと変な真似でもしてみろ！　このわたしがお前を退治してやるっ！？

？私はいつの間に魔物扱いですか？　化け物とは呼ばれたことがありますが？

？同じだろ？

（同じだしっ！　でもユエも怖いことサラリと言わないでっ）

荒々しい口調をしていることに違いないが、黒髪（ユエ）の青年に優衣は盛大なつっこみをする。

しかしもう一方の美声は聞き覚えが無い。……たぶん。

？……そうですね。殺気も何もないこの気配、まさしく……――――？

カツカツと長靴を鳴らし、美声を持った男は両扉を開けた。

（うわ……っ！）

「間違いありません。お久しぶりです。ユイちゃん――――」

眩しいと感じた元凶である、肩の前に下ろした艶やかな銀髪。
長い睫毛に彩られた翡翠の瞳に、くもりひとつないきめ細かな白い肌。
簡略化した白い僧服。厚着ではなく薄着だ。動きやすそう。
「ルーク。お前、気付いていたのか……」
ユエが感嘆とも意外ともとれる表情で近寄る。
「えぇまぁ。貴方も気づいていたのでしょう」
「ああ……。ただユイさんが入ってくると思っ――――――思いまして」
黒銀の髪を持つユエと、銀髪の麗人ルーク。
優衣は二人を見上げて、誰にも悟られないよう心の中でため息をついた。
(美形ねぇ。まぁ慣れてるんだからいいけどさ)
左頬を右手で掻きながら、優衣は再びため息をつく。
「ところでユイちゃん。腕を痛めたようですが大丈夫ですか？」
いきなり中性的な顔が近づいてきたものだから、反射的に一歩退く。とその前に白い指が、制服の上から左腕を撫でた。
「な、なんで知ってるんですか」

「ぎこちない動きでだいたいは察しがつきますよ。それに痛みを緩和する薬品の匂いが、貴女の腕からしますから」

「げっ」

思わず優衣は顔を近づけて匂いを嗅ぐ。しかし、まったく薬品の匂いがしない。

「――ユイさん、驚くことはないですよ」と、ユエがこちらに近づきながら朗らかに言った。

「こいつは人間以上犬以下の嗅覚を持っています。…まったく。本物の犬だったら少しは可愛がってやれるものを……」

「……ユエ、いくら心の中で悪態をつこうが気にしませんが、無意識で言わないでください。貴方が誰なのかたまにわからなくなります」

（……いま無茶苦茶ルークさんに同意したいかも……）

「なんだ」と朗らかに問い返すユエに対して、ルークは失笑を、優衣は引きつった笑いを浮かべる。

（ってか皮肉を言ってることがわかるルカより、あなたのほうが性質悪いわよ）

ユエは棘のある言葉を、悪意なしで言える才能があったりするのか。

咎めたくても咎めない。うーん。性質が悪すぎる。

「嫌うのは大いに結構ですが、見てください。ユイちゃんがドン退きしていますよ」

ドーン？

「……お前、「ドン」退きというのはどういう意味だ？退く、というのはわかる――――りますが…」

「そのままの意味ですよ。「ドーン」という感じで」

「はあ？」と、ユエが口を開ける。

ああ。もう口調が崩れてる。これはルークにだけこうなるのだろうか。

「……話がかなり脱線しました」と、ルークがコホンと咳払いをした。

「ユイちゃんは、夜のお旅はお好きですか？」

「夜？　旅？　またたび？」

「……」

思わずルークは、口を閉じた。呆気にとられたかのような顔をし

ている。

（まさか、これは、関西人にあるまじきスベった？　スベりましたか？）

ルークから視線を外してユエを見ると、なぜかガッツポーズで促された。

（えぇぇぇぇぇ！？　何をしろと！？　このわたしに何をしろとっっ！？？）

「……。とりあえず、夜の旅は平気ですか、と聞いてるのです」

「あぁそうそれね！　大丈夫！」

（ナイスフォロー！）

ユエの謎のガッツポーズから逃れられた。

彼はなぜか耳を……失礼、頭を垂れている。

「あれって、拗ねてるの？」

恐る恐る声を忍ばせてルークに聞いてみる。

すると彼は「ああ」と言ったあと、顔を近づけて耳打ちした。

「拗ねてると言えば拗ねてます。彼はコウリ様と同じく子どもっぽい性格をしていますから。本人は気付いていませんね。無意識です」

「なんか可愛いかも……あ…」

思わずルークさんの目の前で言っちゃったじゃないか！

「…ユイちゃん……」

ルークが優衣を見下ろす。その表情は、明らかに複雑だ。

「ユエは、１９ですよ？」

「若っ！　わたしと四つしか変わらないじゃん！」

「私とは五つですか。もう少し離れているかと思いましたが」

「へっ？」

（ってことは）

「まだ２０！？　えぇえでも確か、何とか当主って！」

ルークはくすりと、笑みを浮かべる。優衣の反応を楽しむかのように、彼はそのままつづけた。

「えぇ。ヴィアム王国公爵家当主とは、この私のことです」

『それにユエ様は少なからず伯爵家の血を、ルーク様は公爵家当主でございます』

そう言っていた侍女を思い出す。彼女はいつのまにかこの場を退席しているが。

（なんだかまた眩しい……）

後光が差しているように見える。

「そう驚くことはありませんよ」←――ルーク

「……雲の上の人だ……神だ……すごすぎる……」←――放心状態の優衣

「……ユイちゃん……？」←――驚くルーク

「雲の上の住人だ……、神様だ……」←――継続中の優衣

「……大丈夫ですか」←――あまり心配ではないルーク

「天から召された神、あるいは仏様だ……わぁ」←――頭がいかれた優衣

「……ユエ、」←――ユエに視線をやるルーク

「やっぱりわたしには程遠い存在なのだ……」←――心ここにあらず優衣

「……私には到底無理です。貴方がユイちゃんを現実に引き戻してください」←――苦笑を浮かべるルーク

「わたしが？　だが、そんなこと言われてもだな…」←――優衣を見て若干無理そうな顔をしたユエ

「わたしなんか高校すら危ういかもしれないのに……」←―意味の分からないことをほざく優衣

「……しょうがないでしょう。ユイちゃんの思考回路が壊れてしまったのですから」←―マジでそう思うルーク

「……しかしどうすればいい？　下手に揺さぶって頭が馬鹿にでもなったら大変だぞ」←―油断したユエ

「やっぱりわたしは馬鹿なんだ…」←―傷ついた優衣

「あっ。いや、その、これはだ――――ですね。ただの不可抗力と言いますか…」←―必死に訂正しようとするユエ

「ユエ。何とかしなさい」←―命令口調になるルーク

「わ、わたしは無理だ！　お前がやれ！」←―ヤケになるユエ

「変な真似をするなと言ったのはどこのどいつですか」←―肩をすくめるルーク

「……」←―無言になった優衣

「とりあえず、どのような方法でユイさんは元に戻るんだ？」←―真面目に聞くユエ

「刺激ある方法ですかね。口づけとかですか？」←―超真顔で言うルーク

「あぁなるほど」←―納得するユエ

5（後書き）

出たぜ美形三人目！

6

銀髪（ルーク）の麗人の言葉に、放心状態が二分間ほど続いていた優衣はあわてて手足をバタつかせた。

「無理。無理無理無理無理――――――――っ！！！」

「……言葉だけで戻ってきましたよ……」

「そうだな……」

若干残念そうな顔をする二人。ルークは肩をすくめると、好機とばかりに話を始める。

「夜の旅。すなわち夜の間にこの王城を出るということです。獣が出る可能性は増えますが、夜の方が厄介な輩に会わなくてすむので」

「よほど馬鹿じゃない限り、夜に行動をする盗賊団なんかいません。周りが真っ暗だと連携なんてとれませんし」

ユエも何故か嬉しそうな顔でルークの説明を付け足す。優衣はとりあえず「はあ」と相槌を打っていた。

「光があるとこっちが盗賊だとバレバレですからね。まぁとりあえずは、夜に移動できるなら夜の方がいいのですよ」

「夜ねぇ。夜。……でもさぁ、夜って危なくない？　よく言うじゃん。寝込みを襲う盗賊団とか、狼とか……」

なぜか、ルークの顔が曇る。隣にいるユエは、前込んで力説を始めた。

「大丈夫です！　もしも盗賊に会ったとしても、わたしがお守りしますし！　それに、ヴィアムの中にさえ入れば、もう怖いものなんてありません！」

（盗賊に会ったこと前提なんだ……）

ルークが右耳を指で押さえる。優衣はそう思いながら、あははと引きつった笑いを見せた。

「王城から出て、早くヴィアム王国へ帰りましょう！　ユイさん！」

「――――……ーセン…カッ…。熱ふ……を最……で……」

（えっ…？）

「ルークさん、今何か言いました？」

耳を澄ませて聞こえるかどうかの、小さな声。さきほどユエが言っていたのと、ほぼ同時だった。

しかし当の本人は、目を丸くするだけで「言った、とは？」と逆に問い返してくる。

「あれ？　じゃあ空耳かな。全然内容が聞こえなかったし…」

「……。私は何も聞こえませんでしたが……」

「同じく」

ユエとルークが言うので、優衣は（空耳だ）と納得する。

「また話が脱線しました。ユイちゃん、とりあえず聞きますが、夜の旅は大丈夫ですか」

「あぁはい。だいじょぶです」

「では。馬車はすでに手配しているので、いきましょう」

「てか、マジで王宮に行くわけですか」

さっそく歩き出したユエとルークを、優衣は声だけで制止させる。

「何か不都合でもあるんですか？」

「いや、不都合って。なんで王宮に行かなくちゃならないのかなぁって」

ユエが「そんなの簡単ですよ！」と、何故か熱の入った声で言う。

「王宮にいてくれるだけで、色んな人が幸せになるんですから！！」

「……」

「……」

優衣はともかく、隣で聞いていたルークまでもが、複雑な表情で沈黙した。ルークが何を思っているのかは知らないが、優衣は思わずユエを見上げる。

（それって、ものすごく複雑そうで単純なんだけど、意味不明……）

理由になってない、と、優衣はついつい思ってしまう。

「まぁ別に、いいけど」と、油断して口走った瞬間。

「じゃあさっそく！」

「結構な時間を喰いました」

ユエは優衣を抱え上げ、ルークは微苦笑を浮かべて。

（えぇ？　え？　えぇぇぇぇぇぇぇ！？）

二人は部屋から、飛び出した。もちろん優衣は、小さい子どものように片手だけでユエに抱え上げられているわけで。

（ひ、ひぃとぉさぁらぁいいいいいいいい？）

◆◇＊＊＊◇◆

「いいの？　本当に彼女を行かせて」

マキは見た目からしてひ弱な少女だ。それでも彼女と対峙したことのある騎士なら、彼女をみただけで竦みあがってしまうだろう。

『蜜のように甘い毒林檎』

誰よりも早い速攻の連続攻撃と、一瞬の観察と洞察能力。

そんな彼女でも、素性のわからない男がいた。それが、目の前で椅子に腰掛ける茶髪（ルカ）の青年だ。

「言うことなどないな。その事項はあいつが決めたことだ。私に異論は無い」

マキより一段格下の二級騎士である、ルカという青年。彼女は直々にこの屋敷を訪れていた。

「そう。まぁいいわ。それがあなたの真意ならね」

「真意？　さぁ。どうだろうな」

騎士団長五位であるマキに対してでも、彼は平然と皮肉るのだ。

能力としてでは、騎士団長と二級騎士は選ばれたか選ばれなかったかの小さな差だ。

三級騎士が２００人いるに当たって、二級騎士はせいぜい５０人程度。騎士団長は６人しかいない。

だから、マキとしてでも彼があのように言うのは許しているのだが。

……どこまでが、この男の限界かしら。

一度だけ、面白そうだからといって彼と戦ったことがある。肩書きとしてでも最終的にはマキが勝ったのだが、妙な戦いだった。

最後に彼の銀剣を弾いたとき、マキの息が上がっているのに対して、彼は息どころか汗すらかいていなかった。

第三者から見れば男と女の差、短期戦で挑むマキとの相性の悪さ、であるのだが。

……おかしい……。

彼と戦ったことがある自分だからこそ、わかりうること。

ただ、違和感を感じずにはいられない。それでも、屈辱は感じていなかった。面白い、という感情が、胸を占めつつある。

「それで、久しぶりにお手合わせ願える？」

「却下する」

期待を込めて言うと、この男は即答ときた。

「騎士団長五位の、このユマキスカル様が言っているのよ。格下の者は素直に従いなさい」

「……。仕事しないのか」

「そ、それは……。だ、大丈夫よ。優秀な部下に、頼んでるから……」

少しパニクったマキは、軽く咳払いをして気を静める。

「久しぶりに、私と手合わせしなさい。いいわね。これは常務命令よ」

「……却下」

「あなた。どれだけ平静に私との手合わせを断るのよ」

ルカはちらりと目線を上げ、彼女と視線を合わせる。

「丁重に、断ったはずだが」

「……。そうね。あなたにとってはそれが「丁重」なのよね。期待した私が馬鹿だったわ」

マキは思わず額を押さえる。だがしかし、ルカは何も言わない。

「今日は出直すわ。また来る。いいわね。そのときは絶対に――――」

マキは少しだけ、息を呑んだ。

彼女が驚くなんて明日は空から槍でも降ってくるかと思うくらいだが、彼女の視線の先にはルカの横顔がある。

どこかを見つめる、綺麗な彼の横顔――――――

「～～～～～～～っ！」

マキの頬が、一瞬で朱色に染まった。

何故か知らない。理由なんてわからない。

ただ、顔が紅くなっているその事実だけ。

……落ち着くのよ、私。

深呼吸をし、マキは気を静める。何事も無かったかのように部屋の外を出ると、ヤケに大きな音を立てて扉を閉めた。

……うるさい扉っ！

それは、動揺している自分を表すようだった。

7

「――――――っ！！」

「？　ユイさん風邪ですか？」

ぶるりと、なぜか身が震えた。

屋根つきの馬車の中で、隣にいるユエが優衣の顔を覗き込む。

（なんだろう……、見も毛もよだつ、っていうか、鳥肌立った……）

「夜ですからね。寝ていたほうがよろしいかと」

「猛烈に結構です。お断りします」

ルークの丁寧なすすめに全力で断った。男に囲まれて――――しかも美形――――寝られるわけがない。そこまで肝が据わっているわけでもないのだ。

しかし期待を裏切って「いいえ」と、また力説を始めたのはユエだった。

「風邪でも引いて身体を壊しては大変なんです！　さぁ遠慮なく、わたしの膝でも使ってください！」

「だ、誰があんたの膝なんか使うかぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「ユイちゃん、声を静めて」

「あ、すいません」

（……まさかこの二人、共犯くってる……？）

流れるような感じで謝罪してしまった優衣だが、後からそのことに気付く。ルークは相変わらず微笑を湛えているが、何を考えているのか意味不明だ。

（いやでも、ルカの行動が解るかって言われても、返答困るんだけど。あの人も何考えてんのかまるで謎だし）

「――でも本当に眠らないんですか？　身体に悪いですよ」

「う、うん。まぁどうせ今は眠くないんだから、そういうだけだけど。もうちょっとしたら、どうせ眠くなって寝るだろうし」

……といいつつ寝てしまったのは、決して優衣（じぶん）のせいではない。

眠気。そう、眠気が悪いのだ。

「……本当に、小さい……」

「そうですね。確かに15歳にしては、同年代と比べて骨格が違いすぎます」

「……いや、それだけじゃない。お前は気付いたか？」

優衣の頬を撫でていたユエが、頭を上げて向かい側に居るルークを見やる。同じ仕事をすでに一年以上になるが、未だユエはルークを受け入れきれてない。ユエの口調が荒いのは、4割方そのせいだ。残りの6割はと言うと、昔から口調が荒かったせいである。

「――痩せている以外に、彼女の首筋に刃物で切ったような痕がありますね。ここを刃物で切られるということは、死の淵に立った経験があると」

白い指が、彼女の首筋にある傷跡をなぞる。それを苦々しく感じながらも、ユエは彼に同意した。

さほど目立つものではない。がしかし、彼らには意図も簡単に見つけてしまった。

「幼少期に受けた傷、というのが妥当でしょう」

「やっぱり賊に襲われたときの傷か？」

「彼女の世界に賊がいるとは、考え物ですね。いないでしょう。彼女の世界には」

「なぜ断定できる」

ルークは失笑し「ただの勘ですよ」ときっぱり言う。よくあることだ。

「それより、よく彼女の後見はこのことを許しましたね。どのような手段を使ったのですか」

さらりと話題をすりかえ、ルークは自身の銀髪をいじりながら言う。ユエはそのことを頭の中で考えながら、言葉を紡いだ。

「……あぁ。あの人は『本人の意思を尊重したい』と言っていたから、一応王宮に行くことは許可してくれた。条件付で」

「条件？」と、ルークが眉根を寄せた。

「本人の意思を尊重することと、本人に傷をつけないこと、だ」

「そのようなこと、当たり前ではありませんか」

「あぁ。そうだ。だが、あの人はそう言ったんだ」

「……。そうでしたか」

ルークは苦笑し、再び彼女に視線を戻した。

◆◇＊＊＊◇◆

（……ん）

「あっ、起きたんですね。朝ですよ。ユイさん」

「ふがっ！」

美麗な顔に上から覗き込まれ、優衣は思わず奇声をあげた。向かい側に座るルークが、クスクスと笑っている。

「可愛らしい寝顔を見れないのは惜しいですが、休憩地点に着きましたよ」

（ま、まままままマジで――――――――――――っ！？）

ルークが言うや否や、何故か馬車の扉がひとりでに開いた。

眩しい、と感じた瞬間に、ユエの「そうです。まだ王宮まで二日とかかる距離ですから」という声が右耳から左耳へ通り過ぎていく。

「ユイさん、手を」

ルークに続いてユエが馬車から降り、ユエが優衣に手を差し伸べる。

（うわ、社交辞令……！）

優衣はおずおずとユエの手をとった。意外に大きくて温かいことにびっくりする。

地面に降り立ったことで目の前に広がった光景に、優衣はまず目を疑った。

（っつか、これが休憩場所！？）

ヴェルサイユ宮殿。

はるか彼方にそびえ立つ、壮麗で豪奢な建物。

左右対称である噴水庭園。花々や敷き詰められた砂利。

それはまるで、１７世紀～１８世紀に造られたヴェルサイユ宮殿のよう。

（うご……。ここって何世紀のヨーロッパ？　ぶっちゃけ１９世紀？）

歩き出した二人に挟まれていると、ユエが淡々と説明する。

「ここは先代国王が避暑として造らせた宮殿なんです。下級貴族は入ることが許されず、上級貴族でも特別な日や国王の許可なしには、入ることが許されないんですが――――」

ちらりと、ユエがルークに目配せする。ルークは失笑ながらも、丁寧に答えた。

「この宮殿を管理するのが、公爵家の仕事の一環。すなわち公爵家当主なら、許可など必要ありません」

「そのかわりコウリ殿下の許可をもらってるんですよ。ほら、お出迎えがきた」

仲が悪そうなかわりに息ピッタリで二人はそう言い、視線で前に促した。

「えっ？」

宮殿の玄関まであともう少し、というところで。

優衣はすごさに気付く。

右はメイドの列さん、左は執事の列。

どっかの漫画に出てきそうなお出迎えの仕方が、そこにはあった。

「は？」と、大口を開けて固まった優衣に、ルークが耳打ちをする。

「全員が公爵家のエリート達ですよ。掃除、洗濯、裁縫、炊飯。すべて誰がやっても完璧にこなす優秀な人たちです」

「で、でも、この人数、ざっと百人はいるよ……？」

「公爵家はヴィアム王国の貴族第一位ですから」と、事もなさげにルークが笑む。

（なんか、居心地悪い……）

何しろ「お帰りなさいませ、ご主人様」的なノリで全員が頭を下げているのだ。

あまり刺激ない暮らしをしていた優衣にとって、これほどの刺激はかえって辛い。

（あれ……、ここが公爵家の管理下だということは……）

「ここって、もう国外なの？」

「大陸中央に君臨する、ヴィアム王国です。そういえばユイさんは、この大陸のことをどれだけ知ってるんですか？」

今度はユエだ。忙しいな。

「ううん。全っ然知らない。なんとなく、ヴィアム王国とバロン王国があるということだけ、知ってるけど」

「じゃあ、それは部屋で教えますね」

なぜか、ユエの顔がキラキラと輝いているような気がする。

その時、ルークの顔が少々曇っていたことに、優衣は気付かない

――――――

7（後書き）

全キャラを出すまで、あと何十話くらいいるだろう……。

8

赤いカーテンと縦長に大きな窓が三つ。天蓋つきのキングサイズベット。向こうにあるテーブルからシトラスの香りがふわりと漂った。

隣の部屋は緩やかな曲線を描く階段があり、二階には大きなバスルームと彫刻から噴き出す噴水が一つ。

「げが……」

とりあえずとソファに腰掛けたユエとルークなど目もくれず、優衣は魚のような目でロイヤルスイートルームを見渡した。

（扉が二つもあるし！　しかも大きいし！　ボディガードが扉の前で立ってるしっ！）

……19世紀ではない。完璧に21世紀だ。

（まさか、国によって化学が違ったり……）

無茶苦茶ありえる話だ。

「――えぇっとそうですね、とりあえず大陸の国から」

羽ペンとインクと紙を持ちだしたユエが、テーブルにそれを置く。

優衣はユエと向い合せになって座るため、必然的に隣がルークとなった。

「まず、ここがヴィアム王国です。こっちがバロン王国で、こちらが砂漠の国・西ヴィアム。そして、ここがフムユスト皇国(こうこく)です――――」

横長の長方形に伸びた大陸を、四分割するそれぞれの国。

ほぼ中央に君臨するヴィアム王国。見る限り一番大きい。

山脈で囲まれた東のバロン王国に、国のすべてが砂漠という西ヴィアム。

そして、大陸の最南。沿岸部をほぼ独占するようにできている、フムユスト皇国(こうこく)。

「ヴィアム王国には他国にはない四季があります。あと作物なども豊富で、大陸一の富を誇ってるんです。東端にあるバロン王国は、一番小さな国ですが山脈に囲まれて、敵からの壁となっているんです」

地図を見ながら、優衣はふむふむと適当に相槌を打っていく。

「西ヴィアムは察しの通り、砂漠なんですが、宝石の純度が高いことが知られています。唯一のオアシスに巨大な都を作っていると言われていますね。わたしは行ったことがないんですけど」

隣で座るルークが、眉根を寄せたのが気配でわかった。

「最後に、フムユスト皇国。この国は何から何までが謎で、ただ大陸一の軍事国家ということだけ知られてるんです」

「えっ？　隣の国なのに？」

隣の国。日本でいえば韓国だろう。そんな近くて、もし韓国の内部状況がわからなかったら、こっちのほうが大変だ。怖い。

「この国に入った人間は、誰も帰ってこれないとまで噂がありますしね。どうやってこの国に入るのか、というのも、謎なんです。ただ、この国の皇太子が一度だけ、王宮に来たことがあるらしいんですよね。そのときわたしは、まだ若輩者なので、王宮にいっていませんでしたけど……」

続きを言え、とでもユエに視線で促されたのか、ルークは微苦笑混じりに言った。

「15から王宮に行っていましたからね。確かにいらっしゃいましたよ、皇太子殿下が。

そのときは、確かコウリ殿下と話をしていっらしゃったようですが、私は存じ上げませんね――」

「――と、いうわけです。四つの国のこと、わかりましたか？」

「え、あうん。だいたいは」

「じゃあ次はですね……――」

◆◇＊＊＊◇◆

「？　ルークさんどこ行くの？」

かれこれ一時間くらい社会の授業を受けていた優衣は、急に立ち上がったルークを見上げる。

「えぇ。部屋に戻ります。ユエ、お願いしますね」

「お前に言われるまでもない」

ルークはくすりを笑みを残し、部屋から出て行く。優衣はその背中を見送り、ユエに視線を合わせた。

「――――と、こういうわけです。しっかりお勉強できましたね」

偉い偉い、的な感じで頭を撫でるユエ。それはまるで、赤ちゃんが初めの一歩をして母親がほめるのような構図だ。１５歳の優衣にとって、複雑な心境である。

「なぜに頭を撫でる……」

「あぁ何となく。教師をやってると。小さな子どもは特に」

「きょ、教師っ？」

えぇ、と、ユエは小さく頷いた。

「わたしは秘書であるのと同時に、王子の教師役ですからね。じゃないといくら伯爵家の血筋があったとしても、直系の秘書にはなれませんよ」

「優秀なんだ」

「まぁあいつほどじゃないんですが」

（羨ましい、って――）

絶対国語の成績の悪さではわたしの方が勝つな、と思いかけていた優衣は、疑問符を浮かべる。

「アイツ？　アイツって？」

「ルークですよ。さっきやっと出て行ったヤツ――――」

（ちょっと言い方ヒドくない！？）

確かにさきほど出て行ったが、なんか棘があるように感じられる。やっぱり仲が良いのか悪いのか、微妙だ。

「気持ち悪いほど天才ですよ。あいつ」と、ユエが前にのめり出した。

「爵位の貴族から下級貴族。経済界や政財界。四つの各省にまで広く顔を持ち、その天才的な頭脳で俗界にまで名を轟かせています。特に１６歳という異常な若さで、公爵家当主の座を勝ち取ったのは、一番の吉報でした」

「そ、そんなすごいんだ……」

「別にあいつを褒めているわけでありませんが、確かに魔術に関する論文は素晴らしいもので……」

「へっ、魔術？　いま魔術って？」

（この世界って、まさかそんなものまであるの……！？）

なんてファンタジックな、などと思っていると、ユエが苦笑交じりに言う。

「ですが、いまは魔術どころか、魔力さえ持つことの出来ないと言われています。微量の魔力なら十万人に一人、魔術を使えるほどの魔力なら五百万人に一人です」

「へぇ。そうなんだ」

「……まぁ近くに、気持ち悪いほどそれを持った変態妄想狂がいるんですけどねぇ……」

「えっ、なんか言った？」

「いえいえいえいえ。ただの独り言です」

つとめて笑顔を貼り付けるユエに、優衣は疑問符を飛ばし続ける。

「まぁともかく、あいつのの話なんてほっといて、続きでもしましょうよ」

「あ、あの、できれば、もう勉強は疲れたんだけど……」

（わたしが得意なのは数学だけ。国語は最悪。社会は……微妙）

「そうなんですか？」

……秀才なユエにだけは言われたくない……かも。

◆◇＊＊＊◇◆

コツコツコツ、と、細長いコンクリートの空間で、靴の音が反響する。延々に続くような空間。線路がひかれているが、電車が通る気配など無い。足もとから這い上がるような冷気は、この通路を歩く少年にとって大きな苦痛を与えていた。

ッックション。

ひとクシャミ。ぶるりと身体を震わせ、美がつくほどの少年は黒いジャケットを羽織りなおす。

「――さ、さっみぃ！　寒すぎる寒すぎる！　あぁ駄目！　マジで死ぬよ。マジで死ぬぅ！」

クセのある青い髪に碧眼。走りやすそうな半ズボンは、この場所

と不相性だ。

「くっそぅ。今度は唐辛子を入れてやる……！　しかも超激辛のやつを入れてやる……っ！」

誰に対してなのかわからない恨み言を言い、ソプラノ声の少年はふと足を止める。白い息を吐きながら、真っ暗なその先の空間に目を凝らした。

（変だなぁ。ここはボクの領域なのに、電気が点いてない？）

少年はジャケットの胸ポケットから小さな機械を取り出し、それを見た。超ミニ型のコンピュータープログラムが組み込まれている携帯式の機械。プラックボディがきらりとひかり、キーボードがないためタッチ型だ。

「ねぇねぇ兄さん。コレってどゆコト？　ここってヴィアム王国の真下だよね？　ボクの領域だよね？」

『……いきなりなんだ…。緊急事態じゃあるまい』

兄の冷徹じみた声がモニター越しから聞こえる。ただし、通話だけだ。

「なんかさ、とぉってもヤな予感がするんだよね。これって野生の勘ってやつ？　まさかボクでも野生の勘が働くとは思わなかったよ」

『おまえはとりあえず頭脳でなんとかしろ。体力ないだろ』

「はいはい。とりあえず、コレなによ。電気が点いてないんだけど」

『……僕にもわからないな。だが、電気が点いていないだけだろう」

「――――――――っ！！」

『？　どうした』

ぶるり、と、少年の全身に戦慄が走った。少年はゆっくりと、コンクリートの先を見やる。

……何かが、この先で動いてる……

「ねぇ兄さん。地下鉄、まえはいつ使ったの……っ？」

『……五日前だが』

「ふぅん。五日もあれば、『赤』がここで力を貯えることもできるね。ボクの野生の勘が当たっちゃった。もう切るよ、兄さん」

『ッ――――おいっ！』

少年は兄の声など気にせず、勝手に通話を遮断した。

ゆっくりと息を吸い込み、白い息とともに吐き出す。

「……下手すればボクもここで死んじゃうかな。でも、この地上にいるヴィアムの人間もろともか……」

失笑をうかべ、少年はその場で構えた。

「――さぁ、今回の獲物。街で仕留め損ねた『第六赤蜘蛛（シックス・レッドラウ）』。画面越しではないあんたの姿（データ）、ボクが回収してやるよ」

……ざざざざざざっざざざざっざざっざ…。

狂喜のような雄たけびとともに、赤い目を爛々と光らせた獲物が、少年の前に躍り出た。

◆◇＊＊＊◇◆

「う、うやぁぁあああああああぁぁああああ」

「どうしたんですかユイさんっ！！」

突然悲鳴を上げた優衣に、ユエは扉を開けて部屋の中に入った。
天蓋つき寝台の上で悲鳴を上げていた優衣は、ユエを見てぽかんと口を開ける。

「あれっ………。まさか夢……？」

それを聞いて安堵したのか呆れたのか、ユエは頬を綻ばせた。
「ごめんごめん。なんかムチャクチャ変な夢見ちゃって……」
寝巻き姿の優衣に近づき、ユエはベットに腰をかける。ズトンと、キングサイズの寝台が揺れた。
（そうだもんね。こんな世界に地下鉄なんて登場しないだろうし、でっかい化け物なんか出ないだろうし…）
と思い、試しにユエに聞いてみる。
「地下鉄とか、でっかい化け物とかって出てくることある？」
「は？　化け物ならともかく、地下鉄、というのはなんですか？化け物でしたら、昔はいたらしいです」
「だ、だよねぇ。ありえないよねぇ」
（しかしリアルな夢……！）と思いかけていた優衣は、ふと気付く。
自分は、寝巻き姿のままだ。
「ぎぃやぁぁあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
再び優衣は、大きな悲鳴を上げた。

9

「ふくれてますね……。ユエに何かされたのですか」

隣に座るルークが、白い指で膨れた頬をつつく。

再び馬車に揺られている優衣は、頬をふくらっぱなしで向かい側に座るユエを睨みつけていた。

「だ、だって、乙女の朝を邪魔したのよ。酷い」

するとユエは、あわてたように弁解を始めた。

「そ、それはですねっ。ユイさんが悲鳴を上げたので、何事かと飛び込んでしまったまでなんですよっ」

「でも事実は事実じゃん」

「ユイちゃんの仰るとおりですね」

「お、お前までっ」

ルークがユエに麗しい憫笑(びんしょう)を向ける。が、そのことに優衣は気付かずユエに「反省なさい」と、ビシッと指で指し示す。

「ど、どうやってですか……」

可愛いほど、……失敬、哀れなほど従順な表情をするユエに、優

衣は厳しい一言――――

「正座しなさい」

「せ、製剤ですか？」

を、聞き間違われる。

「正座しなさい」

「ザセイですか？」

を、上下反対にされる。

「正座しなさい……」

「せ、星座の観察ですか…っ？」

を、意味間違われる。

「せ・い・ざ・っ・！」

「せ、い、ざ、？」

を、反復される。

「だから正座だって……っ！」

「セイザって何ですか？」

……最終的に疑問で返された。

「……。ごめん忘れてたわ……」

ヨーロッパ人は正座しないということを、すっかり忘れていたのだ。しかし隣にいるルークは、何を思い出したのか楽しそうな笑みを浮かべている。

「正座って言うのはね」

「ふむふむ」

「こうやって座るの」

「ほぅほぅ。で、これで何のご利益があるんですか？」

「そ、それはねっ――――――！」

不思議そうに首をかしげるユエに向かって、優衣は断言する。

「――――何にも、それこそ価値すら、ないわっ！！」

……

……。

「失礼ですが、それは明らかに無駄な作業なのでは？　やっぱり頭が可笑しくなってしまったんですか？」

柔らかい口調でけなされた。優衣は頑張って、弁護する。

「そ、そうかもしれないけど！　座禅は精神統一になるんだよっ！　お仕置きには一番の薬！」

「……そ、そうなんですか……」

「ユエはそちら系の趣向はありませんからね。止めておいた方がいいですよ、ユイちゃん」

「普通誰でもないっしょルークさん」

「そういう人はいますよ。まぁそれより、ユエは三十分でギブですね」

「わたしも三十分で無理だね。……あれ？　てか何でルークさん知っ――――――っはぶ」

「あぁぁああ！　ルーク、お前　ユイさんに何をするっ！」

ルークが手で優衣の口を塞いだのだ。ユエが慌てるのも無理は無い。

必然的に優衣が彼に近づくことになるのだが、優衣にとってはそんなことより酸欠状態。

「失礼。ちょっとした悪戯心です」

離れていくルークの左手を呆然と見送って、優衣は彼に視線を向ける。次の瞬間には、驚きと悲鳴に似た言葉が出ていた。

「今のが悪戯心！？？？　マジで殺されるかと思ったわよ！」

しかしルークは「すみません」と、顔の前で手を出し、謝罪する。すごく悪びれなく言ったのは気のせいだろうか。

そしてルークは、ユエと優衣の顔を交互に見比べた。

「えぇっと、ユエのお仕置きの話はどうなりましたか？」

「あぁあそうだった！　ユエっ！」

「え、えぇ？　えぇぇえ？　話戻すんですか？」

「そ、そうよ！　あの事件は、わたしにとってあれなんだからね！」

乙女の事件だ。

「結構根に持つ、いえ、覚えてらっしゃるんですね……」

「ユエ、聞こえてるよ」

「ユエ、聞こえてますよ」

優衣とルークがほぼ同時に言う。するとユエが、しゅぼんと頭を垂れさせた。

（むちゃ可愛い気が――――するっ！！）

撫でようと手を伸ばして、でも理性で止めさせて腕をプルプルさせている優衣の隣で「愛玩作戦」と、ルークが素直につぶやいていたことに、優衣は気がつかない。

（大の大人、しかも男の人に可愛いっていうのも、何か変なんだけど……。でもわたしより、マジで可愛い気がするよ！？）

……偏見だ。

「ユイちゃん。ユエは男ですよ？　しかも年上ですよ？」

「だ、大丈夫よルークさんっ。いま抑えてるから……っ」

「……腕が震えてます」

「あと身長が１５０センチ低かったら完璧なのにっ！」

「……」

ルークが、何とも言えない顔で沈黙した。

それは完璧、ペットだ。人間じゃない。

「王宮生活、大丈夫でしょうか……」

不安を胸に、ルークがひとり呟いた。

彼の耳元で、何かが音響（おとひび）く。

9（後書き）

1

白い曲線を描く巨大な宮。
そのほとんどが白い大理石で造られた王宮には、執務室・応接室・処務室・礼拝堂・厨房など、様々な部屋が用意されている。賓客用の部屋は特にたくさんあり、王宮の大半を占めていた。

執務室は、王宮とは思えないほど質素だ。
縦に長い長方形の奥には、大きな竜の描かれた執務机。冴え冴えとした大理石の部屋は、執務机のある向こう側が段違いになっている。

なお、執務室にあるのは、執務机と蛍光灯と本棚のみ。

「――ふぅん。ソレがコウリの……。あの人もついに頭がイかれちゃった」

肩につく程度のサラリとしたプラチナブロンドの髪。左右対称に整った顔立ち。
ギラギラと輝く紅い瞳が印象的な青年だ。
王子のような、ではなく、簡略化した白い正装に身を包み、傲慢さを感じさせない気品ゆえか、ほのかに薔薇の香りが漂ってくる。

「二人とも、大儀であったよ。頭上げて」

金髪赤眼の青年が言うと、二人の青年が頭を上げる。

（この人が……）

自分を挟んだユエとルークが頭を上げるのを気配で感じ、優衣は思わず唾を飲み込む。

執務机の横に立つ、オウリという金髪赤眼の青年。

（次期国王継承者で、ユエが教師役を任せられた人……）

「――オウリ様。改めて問いますが、何か感じませんか？」

黒髪の青年・ユエが、いつもとかわらず穏やかな口調で問う。

「うーん」と、オウリは優美に首をひねった。

「僕は、コウリのように卓越（たくえつ）しているわけじゃないし、彼女を召（よ）んだのも僕じゃないから、全く。

そういうのはコウリに聞いてくれる？　全然興味ないしね」

「そうですか」

何の話をしているのか、全く意味不明だ。自分を挟む美形二人を見やるが、答えてくれそうな雰囲気ではない。

「オウリ殿下――」

続いて、銀髪の麗人ことルークが口を開いた。しっかりとオウリを見つめる翡翠の双眸に、なぜか鋭い光が走る。

「彼女には説明が必要だと思われます。そして心身ともに休まる時

間も。ご用意願えますでしょうか」

「いいよ。どうせコウリもそう言うだろうと思うし。でもコウリが起きたら、心身疲労して腐って墓に埋めちゃうかもよ」

はぁぁあああ！？　腐るぅ！？

「腐ることはさせないのでご安心を」

（てかルークさん何でそこ笑顔！？　何故に笑顔！？）

なぜか意味ありげに微笑を湛えるルークに、今度は思わずユエを見やる。が――

「そうです！　ユイさんに指一本触れささないよう、縄で縛ってやりますっ」

一瞬遅かった。

（うわぁあああ珍発言っ！）

そするとコントのような流れで、オウリは唇を歪ませた。

「そうだね。じゃあいまから、僕を縄で椅子に縛り付けるかい？　ユエ」

（またまた珍発言っっ！？）

珍発言の連発に、優衣はついていけない。

金髪赤眼の青年が言うと、ユエは怖いくらいにっこりと笑みを浮

かべた。

「いえいえいえ。…（クソ餓鬼は後で縛り付けにしてさしあげます）」

「そう？　…（君バカ？　その前に墓に埋めちゃうよ）」

「滅相もないですよ。…（人を勝手に殺すな、クソ餓鬼。お前の方こそ墓に埋めてやる）」

「ふぅん。…（バカかい。僕は国王継承者だよ。殺したら打ち首だ）」

「……。…（ついでに変態妄想狂も抹殺できるからむしろ好都合。何も未練などない）」

「――ルークさーん！　この二人なんか変ですっ！」

とりあえず叫んでみた。しかし横で繰り広げられる口喧嘩は、治まりそうもないのだが。

「大丈夫ですよ。いつものことです」

「ま、マジですか……」

ルークは翡翠の瞳を細めながら、優衣の頭を撫でた。それは、慈しむかのような慈愛深い微笑とともに。

「とりあえず、この二人は放っておいて、部屋に戻りますか？　私が手配しますよ」

「……そ、そのことなんだけどさ……」

ルークが優衣の顔を覗きこむ。中性的なその顔に、たじろきつつも言った。

「……お、王宮にいたときの、き、記憶がないって……。ユエが言ってたんですけど……」

『ユイさん……。やっぱり記憶が消えてしまってるようですね……』

ユエがそう言っていたのを思い出す。自分は、あのコンクリートの場所にいたまえに、王宮にいたと言うのだ。

「……いましたよ。確かに」

いつのまにか俯いてた顔を上げると、目上でルークが麗しい微笑を浮かべていた。

肩の前に出し軽く一つで結った銀髪が、サラサラと音を立てて流れる。

「ですが、ひどく消耗していました。専門の侍医のもと、二日は寝込んでいましたよ。そのとき私は出かけていて、遠目でしか貴女を見ていませんが。

戻ってきたときには、貴女がいなくなっていたのです」

「へ？　いなくなって、？」

その時の記憶が全く無いのだが、とりあえず疑問を覚える。寝込んでいて、いったいどうやって姿を消すと言うのだ。幽霊か、自分は。

「…専門の侍医と衛兵達も気絶させられていました。なので、コウリ様が総出で捜索をなされたのです。バロン王国の彼……――――ルカ殿が、本人の意思を尊重した上での、王宮にもどすことを許諾されたのですが、貴女がいったいどこで何をしていたのかは、教えてくださらなかったのです」

「そ、そうなんだ……。まぁ、ルカってすっごく性格悪そうな顔してるもんね」

「……。そうとは思いませんが……、むしろ私より」

「何で？」

深刻そうな顔をするルークの心情がわからない。しかし彼は「何でもありません」と小さく微笑し、金髪赤眼（オウリ）の青年に背中を向けた。その瞬間、薬品のような甘い香りが一瞬だけ匂う。

「部屋に行きますよ。王子の隣か、私の隣か、ユエの隣か、どの部屋がいいですか？」

「ぶっぅぅぅぅっ！」

優衣は盛大に、吹き出した。

「何ですかその究極の三択っ？！」

まるで、生きるか死ぬか奴隷になるか発言だ。優衣の反応など気にもせず、ルークは「危険回避です」と、事もなさげに言った。

「離れると色々と危ないでしょう？　私事（わたくしごと）ですが、できればコウリ様以外にしてほしいのですが」

「……わたし、誰の隣も嫌なんですけど？」

自我自讃拍手喝采（じがじさんはくしゅかっさい）のうるうるビームでねばってみる。が、ルークは軽やかに笑顔で黙殺した。

（うっぇぇぇぇ。でもやっぱ自分でやると気持ち悪い……っ）

うるうるビームをやっておいて自分で気持ち悪く感じる。

（――コウリ、って誰だが覚えてないけどその人の隣か、ユエの隣か、ルークさんの隣か……）

「私のおススメは、ユエの隣だと思いますよ。笑えるほど清潔です」

「わ、笑えるって……、ルークさんの隣の部屋って、いったい……」

「あぁ気にしないでください」と、ルークが優衣の頭をポンポンと撫でた。

「私の部屋から研究室直通なので、少し薬品臭いにおいがするかもしれません。それに私の自室も薬品等が置いてあるのです。王宮の最奥なのでここから遠いですから」

人間以上犬以下の嗅覚とはこれのせい？

「へ、へえ。研究してるんですか。でも確かに邪魔しちゃいけないから、やっぱりユエの隣かな」

一瞬だけ不服そうに眉根を寄せたルークだが、すぐに微笑を刻み、歩き出した。

「こちらです」

執務室を出るための大きな両扉を押し開け、ルークは優衣と共に退出した。

尚、ユエが優衣の姿が無いと気付いたのは、それから約三十分後だったりする。

1（後書き）

1，5　閑話：血濡れた騎士（前書き）

暴力・流血シーンがあります。
人によっては、これでもグロい、と感じるかもしれません。
ご注意ください。

1，5　閑話：血濡れた騎士

『仕事？　西ヴィアムに行け、だと？』

『あぁ。国のため、西ヴィアムを偵察して来るのじゃ』

バロン王国の王城に、宰相直々の呼び出しを受けたと思ったら、やっぱりこれだ。

元々彼は、色々な国を回るのが仕事。

それと同時に偵察と抹殺を繰り返してきた彼にとって、ただ西ヴィアムに行くだけなら、これほど簡単な仕事（もの）はない。

闇のように濃い茶色の髪が、小さく微動する。

『ルカ。お主は、唯一の銀剣を所持している。国家名誉として、誇りに思っておるのか』

密かに唇を噛む。

太陽は、ルカを照らさない。照らされてはいけない存在なのだから。

だから、彼の周りだけ、闇が渦巻く。

ただ右耳につけた紫のピアスが、彼の存在をあらわしているかのよう。

『西ヴィアムに潜り込め。お主は、バロン王国の騎士じゃ。

なればこそ、今だ、お主のことを王城に伏せているのだ』

太陽に照らされない影の存在。それこそ、彼の生きる上での永遠の栄光だ。

◆◇＊＊＊◇◆

「何者だッ！　名の名乗れっ！」

オ都アシスにつく手前、関所で足止めを喰らうのはいつも当たり前だ。

相手は五人。砂漠の国らしく、露出度の低めな服装だ。全体的に白で覆われたマントと、槍を持っている。

自分も同じような格好。茶っぽいマントで顔を隠し、露出している部分は無い。

「通行証を見せろ」

小さく、息を吐く。

マントのなかで銀剣の柄を探し当て、右手で握る。

いつも通り、そこには黒い手袋が嵌っていた。

「なんだキサマ。通行証が無いのか？　無いんだったら、ここを通すわけにはいかんッ」

「さっさと失せろ！」

「――……通行証なら、ここにあるさ」

左手で、何かを探る仕草をする。通行証を、兵士に投げた。

「う、うむ。これは確かに、バロンの王国のもの。よ、よし、通っていいぞ」

ルカは砂に足をすくわれない様に歩きながら、通行証を投げた男に近寄る。と、そこで立ち止まり、兵士を見た。

「ついでに聞くが、西ヴィアムの反乱は納まっているのか」

「……キサマ、この件については一切の無関与だ。バロンの者に話す理由などない」

やはりか、と、心の中でつぶやき、再び歩き出す。

比較的情報は集めた。だが、やはり内乱のことは一切口を割ろうとしない。しかし見たところ、都では内乱の影響は受けていないようだ。

大きすぎるとでもいうほどの、派手な宮殿を見上げる。この中に、税金を取り立て太鼓腹した男や、宝石と地位に自惚れる女がいるとなると、吐き気すら覚えた。

「宮殿か……。いい思い出の無い建物だ…」

母の残像が頭をよぎり、彼は切り替えようと頭をかぶり振る。

一歩足を動かした瞬間、悲鳴が聞こえた。

「――――――きゃぁあっ！」

恐ろしく五感が鋭い彼にとって、静寂のなか聞こえたそれは悲鳴以外のなにものでもない。

（女か……）

土で作られた建物の角から、女の髪の毛を引っ張った大柄の男が出てくるのが見えた。そのそばで、男の子が泣きながら大柄の男に体当たりをしている。たぶん親子だろう。子供が大人に体当たりしているなど、哀れなほど滑稽な絵だ。

それよりも、彼は女の方を見ていた。その目に、感情という感情がない。女は嫌いだからだ。特定の条件を満たしたものは、見るだけでも吐き気と嫌悪を覚える。その特定の条件というのは、子を持つ母親だ。変だと言われたこともある。

「――お母さんを返してよぉ！　お母さんっ！　お母さん！　お母さんっ」

「うるせぇなこのガキ！　てめぇはすっこんでろ！」

大柄の男が子どもの首根っこを軽々と掴み、持ち上げる。男の子はひっしに我が爪を立て抵抗するが、力の差は一目瞭然だ。

「なぁ母親さんよ、お金が足りねぇんだ。これが欲しいんだろ？」

大柄の男は男の子を投げ捨てると、痛さで顔の歪んだ母親に顔を近づける。そして懐から、革袋を取り出した。

（……アヘンか……――――）

同盟を結ぶ西ヴィアムとヴィアム王国で、全部焼却処分とされたものだ。今はほとんど無いに等しいはずなのに、まだ出回っていたのだろうか。すると察するに、あの母親はアヘン中毒者。

大柄の男は、見せびらかすようにアヘンの入った革袋を揺らしている。こちらに気付いていないのだろう。興奮して鼻息が荒くなっていた。

「ほ、ほ、ほしいですぅ！　お願いしますぅ！　お願いします……っ！」

母親も必死だ。何とかアヘンの入った革袋を手に入れようと、手を伸ばしている。

「じゃあ、奴隷になれ。そしたらコレをやろう」

アヘンをもらえる。ただその事実だけに、母親は狂喜している。奴隷、という意味を、理解していない。

（奴隷解放令も、ここでは無意味か……）

あの母親がどうなろうと、自分には関係なかった。だが、正当な、それもただの借金取りならともかく、裏の売買の本流である麻薬と

なると、見過ごすのもカンに触る。

矛盾する思い。

「お母さん！　お母さん！　お母さんっ！」

「！」

一瞬だった。

子どもの叫びを聞いた瞬間、すでに銀剣は耳障りな音を立て、鞘から抜かれている。

男が驚く暇も無い。母親が叫ぶ暇も無い。

そこにあったのは、血の海。

命が、静かに流れ出た。

「とっと失せろッ！」

薄く、汚(きたな)く、汚れているだろうその眼で、母親に一喝を入れる。

母親は子どもも忘れて一目散に逃げ出した。

大柄な男はというと、腰を抜かして地面に尻餅をついている。

そして右腕が、無くなっていた。

……ぽた……ぽたぽた……

ざしゅっ！

「ひっ！」

銀剣を大柄な男の首筋に当て、冷徹に見下ろす。

「その薬は違反だな。右腕が無くなるくらいでは済まないだろう」

冷たい、冷たすぎる声。そしてひどく、落ち着いていた。

「薬を持ってさっさと行け。死にたくないのなら、もう二度としないことだな」

大柄の男は、恐怖で何も言えない状態だ。

彼は銀剣についた血を振り落とし、鞘に納める。何事も無かったかのように、ここから立ち去ろうとした。

肉を抉る感覚。何も感じないほど人を殺してきたというのに、たかが右腕を斬っただけで、恐怖が襲い掛かる。

らしくない、と、頭を振った。

もう考えない。

雑念は、いらない。

「ただ、任務にまっとうするのみ……か」

いつも通り、皮肉げな笑みを浮かべてみせる。

（私は、私の行きたい道を行く）

その先に、たとえ何があろうとも。

2

?大人しく、僕の遊び相手になれェぇえええぇえええええぇえぇえ！？

?誰がなるかこのクソど変態の妄想狂野郎がッッ！！？

（な、何事――――――――っっ！？）

またしてもロイヤルスイートルームに泊まることになったのだ。それはいい。というかそれより、なんだこの叫び声は。

優衣は飛び起きる。天蓋つきのベットから飛び降り、優衣はとりあえず服装を整えた。

?朝から銃を振り回すな馬鹿っ！　建物が壊れるっ？

?そんなことはどうでもいいよ。そんなことより僕の遊び相手になってね、ユエちゃん？

?気色の悪いこと言うなっ！？

部屋の外から聞こえる怒声というか何というかの声は、片方はユエだ。間違いない。

両扉に近づいた瞬間、何と独りでにその扉が開いた。

「わっ！　――――って、あれ？　ルークさん、どうしたんですか」

目の前にいた銀髪の麗人に優衣は目を丸くする。しかも彼は、急

いでいるかのようだ。有無を言わせず優衣の腕を引っ張り、部屋から連れ出す。

「とりあえず来てください。コウリ様がついに暴れられたのです」

（つ、ついに？　暴れられた？）

丁寧な物言いだが、ルークは小さく憫笑（びんしょう）を浮かべる。

そのあと回廊を早足で歩いていると、角を曲がった瞬間ルークの足が止まった。

「あっ。しまった」と、全然そう思ってない口ぶりでルークが言うや否や。

「――――あぁぁあ！　ユイさん、とりあえず逃げてくださいっ！」

銃声と共に、猛ダッシュでこちらに向かってくるユエが見えた。

（はぁぁああ！？　しかも、なんで銃声……？　いったい誰が銃持ってんの）

逃げている。そう、ユエは逃げているのだ。

走って。

「ルークさん……。ユエの後ろに居る人…」

「あぁ。あれですか。コウリ様です」

「こ、コウリ様ってだれ？」

何回か聞いたことのある名前だ。だが、それが思い出せない。
「オウリ殿下と対なる人格のコウリ様です。毎日人格が変わり続けます。昨日はオウリ様だったので、今日はコウリ様です」
オウリって、たしか金髪赤眼の青年か。
「二重人格なんだ……」
テレビでは何回か見たことはある。だが目の前にいても、さほど驚くことはない。せいぜい、興味を持つ程度だろう。
「それだけだったのならいいのですがねえ」
「えっ？」
ルークが笑みのかたちに唇をゆがめる。その視線の先には、ものすごい勢いでこちらに来るユエの姿が。
そして――――
「貴女がこの世界に来たきっかけを造ったのが、コウリ様ですよ。ユイちゃん」
何でそんな重要なことをもっと早く言ってくれなかったの！？
ルークは、あっさりとそれを言ってのける。説明も入れてくれるのだが、何だか騙されているような気がしてならない。
「彼は希少稀な魔術を使うことができましてね。魔術を使える人間、

という条件付で人間の召喚魔術を使ったのですよ。ですが、どうも貴女は魔術が使えるようには……見えませんね」

「……平凡だからね。当たり前でしょ」

自分で言ってちょっと傷ついた。

「まぁ魔術ができるかできないかではなく、貴女に心底惚れ込んでしまったのが問題ですねえ」

「は？」

苦い微笑を浮かべるルークの心情が謎だ。

と、そこらへんで。

「あっ！　ゆ、ユイ――――――――っっ！」

ゆらゆらと揺れる金髪とともに、王子スマイルの青年がユエの後ろから出てきて抱き付いてきた。

「うげっ」

しかも、拳銃所持で。

「あぁ間に合わなかったっ！　ユイさん！　どうぞわたしの頭を殴ってください！」

「へっ？　つか何いきなりマゾ発言……っ」

ユエが近づいて同時に頭を下げる。黒銀の髪がサラリと音を立て

た。

「彼は謝っているのですよ。コウリ様から貴女(ユイちゃん)を守れなかったのですからね」

説明するのはルークだ。しかし、なんかさっきより距離が遠く感じる。

「――ちょっと君たち消えてくれないかな。僕がユイと一日を過ごすんだよ？」

金髪王子が顔を上げた。その瞬間、オーシャンビューのような深い海の双眸が目に映る。そう。彼は金髪赤眼のオウリではない。れっきとしたもう一人の彼なのだ。

優衣は小さく息を呑んだ。

「黙れ変態っ！　さっさとユイさんから離れろッ」

ユエが叱咤するが、逆に金髪王子は優衣に密着してくる。うぅ、圧迫される。

ついでにいうと、コウリが着ている王子服が邪魔だ。正装ではないだろうが、何となく、高そう、ということだけわかる。

「……コウリ様。ユイちゃんが圧迫死します」

冷静にルークが指摘する。うん、距離遠くない？

「僕はユイと一緒にいるよ。一日中ね」

「はいはい。政務はどうでもいいってことですか。わかりました。

ならば、痛い目にあってもらうしかありませんね」

「「「え？」」」

優衣、ユエ、コウリが、同時に銀髪の麗人を見やる。

ルークは、艶やかな微笑を浮かべていた。

いや、かなり嗜虐的（サディスティック）に。

「とりあえず、ユイちゃんは狙いません。まぁユエはそのついで。一番攻撃が当たるのはコウリ様だけなので、安心して眠ってください」

薄ら寒い笑顔で、どこから取り出したのか黒い物体をコウリの首筋に押し付ける。

ユエはその場で固まって、優衣は当たり前に動けず、ルークは優衣からコウリを引き剥がした。

「アレだけは止めてぇぇぇぇぇぇぇぇ！　ぎぃやぁあああああぁぁぁぁあああ」

いったいどこから出てきたのか、覆面をした女官たちが、ギリギリセーフで気絶した金髪王子を受け止めた。……覆面？

「お、おい。わ、わたしは関係ないんだなっ？」

あわてたように、ユエがルークに問いかける。額には、大量の汗があった。

「えぇもちろん。今回の実験はコウリ様のみです。良かったですね」

つとめて、というか作り笑いを浮かべるルークに、ユエは今まで溜めてきた疑問をぶつける。

「……。お前、なぜそう物事を実行できるんだ……？　スタンガンとやらを平気で」

（スタンガン！？　それスタンガンだったの！？　やっぱり近世じゃなくて現代ヨーロッパ！？）

コウリが女官たちによってどこかへ運ばれていくのを横目で見やり、ルークは何故か誇らしげに説明する。

「結構きますでしょう。一発で気絶させられます」

「いや、そういう意味ではなくてだな。……まあいい。お前の研究は訳が解らん」

「失礼ですねえ。あの銃を開発したのは私ですよ？」

あのヨーロッパ式の銃を王子に持たせたのあなた！？

「火縄銃もお前か？」

「……。それ、何百年前の話ですか…」

……歴史を聞いているような心地がするのは気のせいだろうか。

「いやお前なら、時間も飛び越えられるかと」

「……できるものならやってみたいですが、さすがに時まで操作で

きませんよ。残念なことに」

……そろそろ、ワタシ(わたし会話に)カイワニハイッテモヨロシイデショウカ(入ってもよろしいでしょうか)。

そんな優衣の気配を感じ取ったのか、ルークがこちらに向き直った。

「ユイちゃん、これからどうしますか？」

「へ？　別に、そんな予定なんかないけど」

「まぁ王宮に来たとしても、コウリ様とじゃれるかその辺の庭で散歩するか、どちらかですからね」

「じゃ、じゃれる……？」

……それって、愛玩的に……？

3（前書き）

かなり暗いです。母親に対しての否定的な文章が出てきます。ご注意ください。

3

「ユイー！　ルークに虐められたぁぁああ」

「失礼な。ちょっと遊んだだけでしょうが」

「いやぁあああぁぁああ。僕お婿に行けないぃぃいいい」

いきなり金髪青眼の王子・コウリが、こんな時間まで部屋のなかに入ってきた。身体の大きな彼に抱きつかれ、優衣はソファで危うく昇天するところだ。

「ど、どうしたの？　こ、コウリさん……？」

「コウリさんじゃ無い。僕はコウリ」

子どものように頬を膨らませるコウリに、優衣はしぶしぶ「コウリ」と名前を呼んでみる。するとコウリは、何かを発見した子どものように目を輝かせた。

「そうそう。って、それよりユイ聞いてよ、ルークが、ルークがぁぁあああぁ」

「止めてください。私が悪役みたいな雰囲気ではありませんか」

……いったい何してたの……。この数時間の間で。

ルークは優衣の隣に座り、ほぅと息を吐いた。
「って、いま何時だと思ってんの！？　八時よ八時！」
日本語に変換すると、だ。
「このままベットに行ってもいいよ」
うわぁ顔が出たっ！
いきなりむっくりと顔が出てきたので、思わずびっくりした。
「い、いきなりなに！？」
「いきなりじゃないよ。ユイは僕の妹になるんだから☆」
「そっちの方がぶっちゃけ驚き！」
「だからお兄ちゃんって呼んでね」
王子スマイルで可愛くウインク、って――――
「なんでわたしがあなたの妹――――っ！？」
王子の妹になったら、イロイロ比べられた困る。容姿とか、容姿とか、容姿とか。まぁ色々ひっくるめて、困る。
社交辞令？　めんどくさ。
ドレス？　重い。

やっぱりこんな時でもフォローに入ってくれるのは、ルークだ。

「妹にするなら私も賛成ですが、貴方の行為はどうみても兄妹の理論から外れていますよ」

ルークが隣で眉根を寄せた。コウリは気にせず、子どものように目を輝かせる。

「妹になるか、妻になるか選んで？」

（は、話がぶっ飛び過ぎて意味わかんないんだけどっ！？）

頭の中で大混乱が起きている優衣の返答を期待していないのか、コウリはルークに視線を送る。

「ねぇルークは出てって。僕今日はここで寝るね」

ね、寝るぅ！？

察しの通り、ルークは睨むように王子（コウリ）を見た。

「……そのような言葉を聞いて、出て行けるほど余裕はありませんね」

「別に変な意味は無いんだよ。膝枕膝枕（ひざまくらひざまくら）」

コウリはそう言うと、ごろんと寝転がった。もちろん、膝の上で。

そして一分も経たないうちに、すやすやと寝息を立て始める。

「あぁ。たぶん寝ましたね」
呆気にとられたような表情をしてから失笑し、ルークはコウリの顔を覗き見る。
「うぅ。完璧膝枕状態」
「……でも、嫌がらないでくださいね」
「えっ？」
横を見ると、ルークが寂しそうな微笑みを浮かべていた。
翡翠の瞳は、吸い込まれそうな魅力があって。
しばし、見惚れてしまう。
ルークは自分の頬を撫でながら、玲瓏（れいろう）な声で言った。
「コウリ様は、これでも極度の対人恐怖症なのです。私とユエとお父上以外、コウリ様は喋るどころか見ることもできません」
（そうか……だから、王宮の中に近衛兵もいないし、女官も覆面してたんだ……）
王宮の門番くらいだっただろうか……。確か、王宮の周りはぶあつい壁に隔てられ、人を寄せ付けないイメージがある。女官も全て覆面をしていて、その理由が、いまやっとわかった。
すべて、コウリのためだったのだ。
「ルークさんやユエならわかるけど、わたし初対面なんですけど？

それになんで召喚魔術をしたんですか？」

確か、王宮で寝込んでいた、ということだけだし、コウリと直接話したことは今まで一回も無かったはずだ。

「召喚魔術を使ったのは、単なる気まぐれなんです。

———ユイちゃん。貴女は、召喚当時の記憶が全くありませんよね」

「へ？　う、うん。そうですけど…」

「……ちょっと失礼しますね」

そう言うとルークは、いきなり首筋を指でなぞった。体全体がびくぅと跳ね上がる。

片方の手は体重を支えるため、彼は優衣を下から見上げるかたちとなる。

「ここ」と、ルークは切実な微笑とともに、ナイフで切られたような痕を指し示しす。

「あの時、とても不思議だったのですよ。貴女は、体中泥まみれで、身体にたくさんの古傷があった」

「……ぁ……っ……」

自然と、自分の息が乱れていく。浅く、速い、呼吸のリズム。

頭の中で、何かがフラッシュバックした。

「…聞かないで」

母。

「ユイちゃん？」

狂気。

「…お願いだから、聞かないで…っ」

血。

「ですが……」

『私の可愛い娘！　さあ、私と一緒に死にましょう！』

嫌い。

『綺麗。なんて綺麗な赤。綺麗よ、優衣……』

嫌い。嫌い嫌い嫌い嫌い……っ！

「お願いだから聞かないでっ。わたしを殺さないでっ！」

「……っ！」

もぞりと、膝の上でコウリが動いた気配がある。ルークは体を寄せ、条件反射的に俯いた優衣の頭を撫でた。

こんなこと、言うつもりじゃなかった。

「ごめんなさい。ただ、思い出すのが怖いから、こんなこと言ってるの」

ルークは、そうでしたか、と、心の中で痛々しげに呟いた。
彼女が今まで一度も、元の世界に帰りたい、と言わなかった理由。
帰れないと察したからではない、帰りたくないのだ。
だが、いつか時空は元に戻る。

「……その傷は、もしや親族……」

「えぇ。……母」

優衣の頭の中では、いろいろな記憶がフラッシュバックしていた。

召喚されるまえ、自分は学校から帰ってきた時だった。
家に帰り、いつもその時、母親の機嫌をうかがう。
機嫌が良かったら何も起らない。自分の頭を撫でるだけ。
機嫌が悪かったら、とりあえず包丁を投げてくるだろう。

ただ怖かった。

母の狂気に、触れるのが。

「なら、貴女も人間不信になるのでは……」

「ううん。そうじゃない。母の行為が嫌いなだけ。……お願い。もう聞かないで……」

耳を塞ぎたい、という欲望のまま、自分は殻に閉じこもる。

「わかりました……」

ルークは静かに立ち上がって、部屋を出て行った。

人間不信……か――――

そうか、わかった。

やっぱり自分は、母だけが憎いのだ。

愛して欲しくて、甘えさせて欲しくて。

――――先に逝った母が、憎くて、怖くて。

だから自分は、母のいない世界に、何も感情を持てなかった。

愛しみも、憎しみも、何もかも。

3（後書き）

4

（……っ）

筋肉痛が、すごい。膝の上でコウリ（？）が寝ているからだ。

「……でも、気持ち良さそうに寝てる……」

仰向けは寝にくいのか、彼は横向きで寝ている。こんな近くで、人と一緒に寝たことなんてあっただろうか。

「やわらかい……」

自分のクセ髪とは違う、滑らかな金髪。太陽のように煌くそれは、見惚れてしまうほど美しい。

気がつけば、窓の外は明るかった

「……良い」

（え……？）

彼は、横向けでボソりとつぶやいた。昨日より、何だか声が低い気がする。

「良い匂いだ……。母上の、匂いがする」

「……」

彼は、ゆっくりと目を開いた。一瞬だけ、紅い光が見える。

（オウリ……。また人格が変わったんだ……）

毎日人格が変わり続ける王子。それは、身体に宿る魔力のせいだという。

「……コウリが君を気に入った理由も、やっとこれでわかった……。亡くなった母上に、君はそっくりだ」

ひどく、穏やかで柔らかな口調。一昨日聞いた冷たい声とは、ぜんぜん違う。

「何で……」

気がつけば、自分は疑問の言葉を口にしていた。オウリは、ここからじゃ見えないような、小さな微笑を浮かべて言う。

「コウリは母上が大好きなのさ。そして君の匂いが、母上と同じだ（おんな）……」

優衣は小さく息を呑んだ。

（わたしは……、母が嫌いなのに……）

「……コウリのためを思って、妹になってやりなよ。僕（コウリ）の片割れには信用できる人間が少なすぎるんだよ」

「……」

「一緒にいるだけでいい。共に暮らすだけでいい」
穏やかな口調。強制なんて欠片もない。
コウリは、寂しい人だと、思った。
かわいそうな人だと思った。
自分と、似ていると思った。
「……うん」
頷くと、オウリは満足したように微笑して、ゆっくりと身を起こした。約束を立ててくれて、ありがとう、とでも言うかのように。

◆◇＊＊＊◇◆

食堂、というよりレストランに近い会場には、ユエと優衣とオウリは席についていた。
丸いテーブルに優衣が座り、その横にユエが座り、自分と向かい側にコウリが座っている。
空いている席はまだ来ていないルークだ。

「今まで気付かなかったけど、コレ全部ユエが作ってたの？」

「……ええ、まあ。ほとんど無理やりですが。ルークが作ると謎の物体に成りかねますので」

「…そ、そうなの？」

（――しっかし、ユエにこんな才能があったとは……！）

サラダ、オードブル、魚料理、肉料理と、料理がズラリと並んでいる。昨日まではお手軽なサンドイッチを食べていたが、今日はなぜか豪華な品揃えだ。

（……でも、テーブルマナーって知らない……）

なんかスープをズズズッと音を立てたり、ナイフとフォークを左右逆に持ったり、ガチャガチャと物を落としたり、そんなことをしそうだ。優衣はじぃっと料理を見つめる。

「――別に緊張しなくてもいいんじゃない？」と、オウリがいつものように冷めた目で言った。

「君が音を立てながらスープを飲もうが、ナイフとフォークを反対にして持とうが、ガチャガチャに物を落とそうが関係ないし」

「えっ？」

読心術！？

驚いている優衣など気にもかけず、オウリが先にスープを飲み始めた。二、三口スプーンで飲んだ後、彼は顔をしかめる。

「今日はちょっと濃いかな。でも鶏(とり)の下味がちょっと薄い。野菜はいい味出てるけど、今日はどうしたの？」

ユエはすぐさまスプーンですくってスープを飲むと、苦笑いを浮かべた。

「……やっぱりいつもの香辛料ではないと、オウリ様の舌を満足させられないようですね。見たら無くなってたんで、他のものを使ったんですが…」

……ユエって、どういうときが荒々しい口調で、どういうときが丁寧な口調？

「やっぱりね」と、オウリは言う。

「いつもと違うし。でもまぁいいや、ルークよりは幾分優しい味だ」

「〜〜〜〜っ！　ちょっと思い出させないでくださいっ！　吐き気がっ」

（…そんなに美味しくないの？　ルークさんの料理って）

ユエが口もとを抑えているのを見て、優衣は疑問符を浮かべる。

「えぇそりゃぁもう！」と、まるで心を読んだかのようにテーブルを叩いて、ユエが熱弁を始めた。

「ユイさんは知らないと思いますけど、あいつはこれでもかと言うような超甘党なんですよ！」

……甘党と不味い料理ってどう関係があるんだ？

「何でもかんでも砂糖を入れて、自分好みの味にするんです！　普通の紅茶でも、あいつはロイヤルミルクティーに砂糖を五杯！　ピリ辛が美味しい野菜スープに、お砂糖を入れたんですよっ！」

……マジっすか。

「そうそう。間違ってそれを食べちゃってさ、びっくりしたよ。びっくりしすぎて失神した」

（そこまで？）

優衣は思わず、ひきつった笑いを浮かべる。ルークの甘党ぶりには、全国のケーキバイキングが悲鳴を上げることだろう。

「――――――じゃあもう一度食べますか？」

いきなり美声が、部屋に舞い込んだ。カツカツという長靴の音と共に、薬品のような甘い香りが漂ってくる。

「噂をすれば何とやら。それにさ、朝風呂もいいけど、もうちっと時間考えてくれない？」

オウリに指摘を飛ばされ、ルークは失笑のまま席に着く。

「シャワーしないとヤバいですよ。いろいろと」

「そりゃ嫌だね。却下」

オウリは手で振り払い、ルークを眺めた。なぜか、探るような目つきで。

それを知ってかしらずか、ルークは全員を見渡した。

「ああそうだ。面白い話がありますよ。食事中ですが」

オウリは興味深そうに頭をもたげ、ユエは訝しげに顎を組んだ両手に乗せた。

優衣は、未だ必死に音を立てぬようスープと格闘している。

「異界の格好をした十代の娘が、その異様な術によって次々に人を殺していると。しかも殺された人間は、全身炎に包まれて灰になった、と――」

優衣はスープを飲む手を休め「それってわたしのこと？」と思わず反応した。

速やかに反応をくれるのは、もちろんユエ。

「ユイさんが人殺しなんてするわけがありません！　それに、そんな回りくどいやり方よりも、銃で一発！」

「うんユエ、後者の方撤回して。つか今すぐに訂正しなさい！」

きょとん、と、ユエがこちらを見た。そしてそのあと、「あぁ」と、手のひらを打つ。

「そうですよね。ユイさんが人殺しなんて、もうユイさんが人を崖

から突き落とすくらい、変な妄想ですよね」
「勝手に人を犯罪者に仕立て上げないで」
平々凡々な性格をした自分が、そうそう簡単に人を殺せると思う？　育ちは別だが。
「いえ。人殺しか崖っていうと、人殺しの方が勇気が要ります」
「そんな勇気はいらんし、しかも二つとも人殺(ひところ)してるし！　食事中に死亡ネタなんて話すなっ！」
「あっ、すいません。つい…」
（『つい』ってなに？　ついって）
ユエはボケキャラで、優衣が突っ込み役。
これなら漫才界に革命を起こせるかもしれない。
「――ゴホン」と、オウリが大きな声で咳払いをした。
「今から独り言言うよー。いいかい――？」
目を閉じて、彼は大きな声で独り言を言う。
「ユエー？　君さぁ、天然全開で力説なんてしないでくれるー？　あと数秒で止めなかったら君の脳天をぶち抜くよ」
ユエはオウリを睨んだ。
これは……、すごく嫌な予感。

「……あぁもう我慢ならない。クソ餓鬼っ。わたしはユイさんと話をしているんだ！」

ユエは最初から所持していたのか、ホルダーから銃を取り出した。あきらかに独占欲をさらけ出している。

が、優衣はとりあえずめんどくさいことになってきた、と思うのみ。

（発砲だけはしないでよ…）

流れ弾がきたら大変だ。

4（後書き）

ユエ君のせいで、よく話が脱線するのは仕様。

5

「…あぁあ、また始まった……」

ルークが憮然とつぶやくが早いか遅いか、ユエは銃の引き金に手を当てる。

その目は、嫉妬のような深い感情が渦巻いていた。

「もう我慢なりません。一回死んでください。そしたら、丁寧にお墓に埋めてあげます」

「嫌だね。それにコウリの方は未練垂れ垂れだと思うけど」

「そんなの知りません。ユイさんに必要なのはわたしだけで充分です。誰が変態に渡すか」

……訳が分からん単語が混じってる…。

「ユエ、とりあえず銃しまって」

優衣が言うと、ユエは困ったような表情を浮かべた。彼は悩んだ末、渋々といった感じで銃をしまう。

まるで犬みたいだ。

「……。ユイさんが言うなら、しょうがないですね……」

ユエが椅子に座ったと同時に、ルークが、はぁと息を吐いた。

「ユエ……、感情的になりすぎです。冷静さを失っては、補佐官として失格ですよ」

ユエはちろりと彼を睨んだが、ルークは全く気にしない。ルークは静かに目を閉じ、落ち着いた口調で話を戻す。

「――とりあえず、その噂がユイちゃんとは全く関係がないとも思えません。また無害とも言い切れないのですが、それのおかげで、バロン王国の王城護衛騎士団の方々が、ユイちゃんの身柄を引き渡せと、要求してきました」

（！）

バロン王国、王城護衛騎士団（おうじょうごえいきしだん）。王族や貴族の護衛、または街そのものの警備を務める団体。

ルカとマキも、その騎士団に所属しているのだ。

ユエが机を大きく叩いた。

「どうしてそういう事になっているんだ！　それに、ユイさんを渡せるわけないだろう！！」

（……噂……）

確かにそうだ。身に覚えが無さ過ぎる。育ち以外は一般家庭と変わらない平凡な自分だ。もしそんな力があれば、火熾（ひおこ）し程度に使いたい。

優衣が内心でそんなことを思っていると、ルークが冷たくユエを見据えた。
翡翠の瞳は、哀れむかのような魅惑を宿している。
「そうですよ。ですが、あちらもあちらで国家というものがありますからね。バロン王国でそういう噂がたった以上、黙って見過ごせないでしょう？」
「だがッ！　こっちには国王継承者である、コウリ殿下がいるんだ！　易々とユイさんを取り返せると、バロンも思わないはず！」
「落ち着けユエ」
オウリが言うと、ユエは奥歯を噛んで、蹴るように椅子に座った。
（ほんとユエって血の気が荒いね……）
それが自分のせいだというとことは、優衣は気付かない。
「……コウリが後見人だと知った上で、バロン王国は彼女の身柄を要求しているのかい？」
静かにオウリが言えば、ルークは再び口を開ける。
「ええ。なのであちらも、国王陛下直々に身柄を引き渡せと。脅しているわけではありませんが、もし要求を呑まなかった場合、何かありそうですね」
「……今日がコウリじゃなくて良かったよ。もしコウリだったら、すぐにでも出兵命令を出すだろうね」

（せ、戦争……？）

コウリがどれだけ短気なのかは知らないが、とりあえず今日の人格がオウリであって良かった。

それがまた自分のせいだということも、優衣は知らない。

「……身柄か……。無理だね。国王陛下には、丁重にお断りを入れてくれ」

ガタンっと音を立て、ルークが立ち上がった。

「なら、私がバロン王国に出向きましょう」

翡翠（ルーク）の瞳と、真紅（オウリ）の瞳が、一瞬だけ絡まりあった。

優衣は驚いてルークを見つめる。だが、財政とか社交界とかを知らない自分にとって、何かを助言ができるわけでもない。

「君が、？」

ルークは顎に手を添えながら、麗しい笑みを浮かべた。

「公爵家当主（私）が出向けば、それなりの対処と返答があるでしょう。それに、国王と面会できるほど実力を持った使者は、ここにはいませんからね」

オウリは考える素振りを見せる。

彼の開いた口は、いいだろう、と言葉を発していた。

「ありがとうございます」

胸に手を当て軽く頭を下げたルークに、オウリは「ただし」と厳しい言葉を浴びせた。

「十日だ。寄り道せずに帰って来い――――」

（？　なんか、苛立ってる……？）

なんとも言えない負の感情を漂わせ、オウリは唇をきつく引き結んでいた。その理由が、いまいちわからない。わからないでいるうちに、ルークが言葉を発した。

「承知しました。我がただ一人の王子のためあらば」

ルークは小さく唇で微笑し、胸に手を当ててもう一度頭を下げた。すぐ踵を翻し、朝食もとらず部屋から出ていく銀髪の麗人。

優衣はフォークで、ぷつりとミニトマトを刺した。

◆◇＊＊＊◇◆

自室でユエと一緒にソファに座っていたときだ。

ユエが何かのボトルを空け、グラスに注いでそれを飲む。

「何て無礼なやつでしょう！　ユイさんは何もしていないのに、たかが噂だけで身柄を引き渡せとは……！」

（ユエったら飲んでるし……。しかもなんでこの部屋で飲むかなお酒）

優衣は思いながら、まぁまぁと、ユエをなだめる。

「わたしは召喚されたんだから、しょうがないでしょ。それに、それってただの噂でしょ？」

「ただ、じゃないんですよ！　ユイさんだって気になるでしょう？　なんで自分の噂が悪質なものとして広まっているのか、って」

「そ、そりゃ気になるけど……」

ユエはまたグラスに赤い液体を注ぎ込み、ぐぐっとそれを一気で飲んだ。

「噂は噂をよび、より陰湿なものへと変化します！　これでは、噂を広げた黒幕の思う壺でしょう！」

「え？　黒幕？　この噂を広めた人が、いるって言うの？」

平凡な家庭に育った覚えはない優衣だが、この世界に来たのはつい一ヶ月ほど前だ。そんな短期間で優衣と出会ったのは、二本の手でも余るほど。

しかしそれが逆にユエを怒らせてしまったのか、憤怒の表情で詰

め寄ってきた。

「こんな噂、故意でなければ広がるわけないでしょう！　言っておきますがユイさん、あなたは無警戒すぎますよ！」

「はぁ？」

たぶんユエは、お酒に酔っているのだろう。本人が酒に強いかどうかは知らないが。

「たとえば、わたしがこう近づいて」

優衣はユエと向き直るような体勢になってしまう。なにごとかと、ユエを見上げると、予想以上に彼の顔とが近かった。

「ほら、襲い掛かる隙だらけ。こんな隙だらけな顔、他の男に見せられませんっ！」

「へ？　あ、あのさユエ？　わたしたち、噂の話をしてたんだよね？」

「ほらすぐ話を逸らそうとする。ユイさんっ、少しはわたしのことを見てくださいっ！」

まったくもって意味がわからない。ユエはむしるように優衣の肩を掴んだ。これでもか、と思うほど整った顔が近づく。

（お酒……！）

お酒の匂いが濃く香った瞬間、ユエの手が自分の後頭部を抑えつ

けた。

続いて、唇を押し付けられる。

「……っ！」

ぬるりとしたものが、唇を割って侵入してきた。抵抗しようとたじろくと、きつく後頭部を抑えて抱きしめられ、より一層逃げ場が無くなる。

彼の舌は、口内を侵しながら奥へと進んでいく。

……熱い……！

彼の水色の双眸の奥に、狂気が見え隠れする。

野生のような、深い色だ。

「っぅん！」

無遠慮に、彼の手が足をなぞる。

このままじゃいけない、とわかっているのに。

身体中に甘い痺れが走って、動けない。

どれもこれも、初めての感覚と感触。

つづいてやっと唇が離れたと思ったら、頬に口づけの雨を降らせる。

音と立てず、彼の唇が這い、首の中心部分に吸い付いた。

ぬるりとした舌で、そこを突く。

「可愛い……」

ぼそりと聞こえたそれは、官能的なほど甘い響きを持った声だった。
叫ぼうと舌を動かすが、声にならない。
「初めてでしょう？　こういうの」
艶めいた甘い声が、ただひたすら自分だけに注がれる。
「あなたにわたしの全てを捧げますから、あなたをわたしにください」
深い。それこそ、蹂躙、という言葉にふさわしい、激しい口づけ。角度を変えながら、ユエは愛撫した。歯列をなぞり、口内を舐め、舌を絡ませる。
何も、考えられなかった。
だが、突き放すこともできなかった。
だから、気絶したのだろうか……。
猛々しいほど狂った感情が、あまりにも突然に来たものだから。
狂気など、自分が傷つくのは嫌だった。
それがいくら、自分の我ままだったとしても。

6

…ざざざっざざざっざざっざっざっざざざざざ…――――――

「なっ！　消えた……だって！？」

真っ向からこっちに向かってくる化け物・『第六赤蜘蛛（シックス・レッドラウ）』は、確かに目の前まで迫ってきた。

名前どおり巨大な赤い蜘蛛。触手から染み出る紅い液体に触れれば、どんな生き物でも死に至る強い猛毒を含んでいる。

青髪に碧眼の少年は、思わず辺りを見渡した。

「……六体目の赤蜘蛛……。巨大化しているだけじゃなく、まさか瞬間移動までできるなんて……」

どれだけ能力が進化しているのやら、と、失笑交じりにソプラノ声の少年は言う。

ふとブラックボディの携帯式コンピューターを取り出し、映像を空中に出現させた。モニターとして出てきた光を見やり、高エネルギーの生命反応を追跡する。

「……これはちょっとまずいね。百メートルしか進んでないけど、ここからさらに北にいってる。このままじゃ、ヴィアム王国の管理局に衝突しちゃうね」

そこにあるのは「死」のみ。あの化け物は殺せない。眠らせるしか、方法は無いのだ。

『永久の眠り（ピットキャップ）』――――――仮死状態。

「……今から約三十八分後。地上と繋がる管理局と、ごたいめーん」

少年はにやりと、口角を上げた。

楽しい。楽しくって仕方ない。『第六赤蜘蛛（シックス・レッドラウ）』が、この先どこへ向かっているのか。

「さぁて、ボクも人助けに入ろうかな。そしたら、兄さんに仕返しもできるし」

ペロリと乾いた唇を舐め、その場で座り作業に取り掛かる。光のキーボートそこに出現した。

「Ｇ－２壁（ジーツーへき）からＦ－２壁のブロックを閉鎖っと。連絡橋封鎖。１分後にミニ爆雷投下。本部に緊急応援を要請。これで、『ヴィアム王国のみなさーん。怪物が来ますので速やかに避難してくださーい』って言えたら完璧なのに」

ガチャガチャ、といろいろな場所のロックが解除され、少しでも『第六赤蜘蛛（シックス・レッドラウ）』を足止めできるか試してみる。

だがはるか百メートル先では、巨大な怪物が地響きを鳴らしながらぶ厚いコンクリートの壁を突き破っていることだろう。

「……ミニ爆雷は効果なし、か」

さっき前方で爆発音がした。が、高エネルギー反応を表す赤い丸印は、まだ進行を続けている。
少年は少々考えた末に、管理局に通信を入れた。
「……管理員。こちらワユルアです。『第六赤蜘蛛（シックス・レッドラウ）』、北北西に進行中。そちらと接触するのが約三十七分後。ただちに局員を避難させて。……え？　そしたら地上の人間に気付かれる？　そんなの、人の命と比べたらなんてことないでしょ。できるだけ気付かれないように頑張ってね」
ブツ、と、強制的に回路を遮断する。あとは……。

――――――ＥＲＲＯＲ――――――

「なぜエラーが！？　直通回路なのにっ！」
彼に限って、エラーという失敗をすることは、自尊心（プライド）が許さない。技術者としても成績優秀な彼だ。となると、このエラー表示は……。
「？　ハッキング形跡……？　そんな馬鹿な。本部の中央コンピューターに限って、そんな訳ない。ボクだってまだ成功させたことないのに……っ！」
画面に表示される文字を読み取り、少年は驚愕する。ありえなかった。あのコンピューターは、特殊暗号が十万桁もあるのに……。
「――高い知能と潜在能力。そして街からの脱走。向かっているのはヴィアム王国……？　ヴィアム王国に、何があるっていうんだ…

…？　三ヶ国は王政政治の田舎なのに……」

ヴィアム王国に何かある。それを確信し、少年は立ち上がった。

「――――エフェム兄さん。ボク、ヴィアム王国に行くよ。あいつにも、会えるしね……――――」

◆◇＊＊＊◇◆

「――――イさん……！　起きてください……！」

「……っ……」

もぞりと布団の中で少女が動いた。ユエはそれを感じながらも、心を鬼にして彼女の肩を揺さぶる。彼女が目を開いてこちらを見るまで、少しの時間を要した。

「――――へっ……？」

頭がとろんとしている。一瞬目の前にいた人物が誰なのかさえ、わからなかったほどだ。優衣は落ちそうな瞼をこすり、ユエを見上げる。きょとんとした表情が、妙に可愛らしかった。

「…どうしたの……？」

「どうやら、ソファで寝てしまったようです。すごく頭が痛くて、……あの、昨日、お酒でも飲みました？」

優衣は一瞬、何のことかと首をかしげた。昨日のことを思い出し、「あぁ」と言ってから。

「き、昨日さ、めっちゃヤバいほど酔ってたよ！」

改めて弁解した。純情少女にとって、昨日のあれは刺激が強すぎる。

「わたしはお酒に弱いんです。でもカッとなったりすると、ついついお酒に手を伸ばしてしまって。

まいったな……、この頭の痛みは最悪です……。

仕事がありますが、コウリ殿下に休みますとでも言ったら許してくれますかね」

二日酔いで社会人は仕事を休めるのか？

15歳の優衣にとってわからない素朴な疑問だ。

「まぁ無理でしょうね。ルークが出立したから余計でしょうが、わたしの仕事まで増えるんだから全く…」

いつもユエは優衣と一緒にいると思ったら、そうではないのだ。秘書の仕事は毎日忙しいらしく、同じ年の人なのにオウリの教師をしている。何でも、オウリには哲学と美術を教え込んでいるらしい。そういえばユエは、料理のほかにヴァイオリンを弾けるらしい。

とりあえず、自称「秘書」なのだが、優衣的に「執事」の方が似合っていると思う。

（何となく、「坊ちゃん」って言ってそうな印象（イメージ）が……）

優衣は唇を引き結び、何となく彼を眺めた。

ユエはしばらく何かを考えたふりをすると「あああ！」と、悲鳴を上げた。

（いきなりなに！？）

「ルークがいないから、あいつの仕事全部やらないといけない！今日はゆっくりしたかったのにっ！」

ユエは布団が吹き飛ぶほどの勢いで立ち上がり、思い切り扉の角に当たりながら外へ出ていった。

「……――――――え……？」

あまりにも、素っ頓狂な状態に。

優衣は、顔をしかめる。

回廊を歩いていると、なぜかいきなりユエがやってきて腕を引っ張られた。どうしてか、と聞く暇さえ無く、いま早足で移動している状態にある。

そろそろ手が痛いな、などと感じ始めたころ、ユエが険しい顔つきのまま話を始めた。

「いきなりなんですか、バロン王国に帰ってほしいんです」

……は？

優衣はぽかんと口を開けた。だって、そのことについて、昨日あれほど口論をしていたんだよ、この人（ユエ）は。その人本人から、バロン王国に帰ってほしい？

怒りを通り越して呆然としてしまうのがオチだ。

ユエは何を勘違いしたのか「ルークはそのうち帰ってくるので……！」などと言ったのち。

「実は、国王陛下がおこしになるんですよっ！」

（陛下……？）

金髪。碧眼。傲慢。馬鹿殿。

イコール、コウリの父親。

そんな方程式が、優衣の脳内に出現した。

「――もしユイさんがここにいれば、色々と厄介になるんです。ほら、ユイさんって異世界の人ですから、国王に変な興味を持たれるくらいなら、と、コウリ様がとりあえずバロンの王城護衛騎士団に、ユイさんを預けるそうなんです。それにルカ殿も、王城護衛騎士団の方ですから、コウリ殿下も安心したようで……」

……とある夫妻の夫が浮気していて、バレないように隠し子を他国に移す？

そんなわけないよねっ。

馬鹿な翻訳をしていることユエは知る由もなく、そのまま続ける。

「国王陛下が出て行かれたら、本格的にバロン王国と交渉を再開します。わたしも一緒に行きたいくらいなんですが、何しろオウリ様がいるもんで……」

ユエは、残念そうな、苦い微笑を浮かべた。美しいその微笑など、俯いた優衣は知るはずもなく。

（ようするに、バロン王国に帰れってこと――――――――っ！？）

たった一週間たらずで、バロン王国へ帰国。

展開が早すぎてついていけない優衣は、ものすごい脱力感に襲われた。

7

「《魔術式(ザ・イースドクション)》ッ！」

『発動詠唱(ツータンブ)』、のち展開。

紫色の光を放ちながら、地面に描かれる規則的な方陣。

中央に太陽。一回り小さい月。そして、人間を囲うのは幾何学模様。

世界の理(ことわり)でさえも、歪めてしまうとされてきた術(わざ)こそ、魔術(イースト)だ。それを操るのが魔術師(ガウス)であり、今では数えるほどしかいない。

そして、国王継承者であり唯一の魔術師(ガウス)であるコウリは、ひたすらに魔力を駆使していた。

何度も試しては失敗の繰り返し。そのたびに精神はずたずたに引き裂かれる。それでも、たった一回の《魔術式》を成功させるため、一年間に渡る独自の修行に耐えてきた。ルークにもユエにも力を借りず、ただ己の意志だけをもってして。

（今度こそ、成功させてみせるよ……。ユイ……――――）

大理石の部屋で、地面で描かれる《魔術式》を見やり、コウリは深呼吸をする。千年に一人という確率で魔力を持ったコウリでは、造作もないはずだった。莫大な魔力のため眠(オウリ)った人格が魔力を抑制する。だから魔力を魔術として使うときは、暴走しないよう細心の注意が必要だった。

その抑制のコントロールが、上手く行えない。

「いくよ。オウリ」

片割れに話しかけ、コウリは再び、術を動かす。

ベタベタに甘やかしてやりたいほどの可愛いい、ただひとりの妹（ユィ）のためだけに。

◆◇＊＊＊◇◆

移動だけで何日もかかってしまうのは当たり前だ。優衣はとりあえず、馬車の乗り継ぎで痛む腰をさすりながら、馬車から降りる。そして、白亜の城を仰いだ。

「なんか、久しぶりだなーこのお城……」

街の中心に建つ白亜の城。ノイシュヴァンシュタイン城のようなそれは、豪奢というより清らかで楚々しい印象を受ける。

優衣はすでに、大陸の東にある山脈で囲まれた国・バロン王国に来ていた。馬車などが出入りする門を入ったところだ。王城に入るためには、目の前にある正門を潜（くぐ）らなければならない。

優衣の付添人である騎士の方が、なぜかいきなり背筋をのばして敬礼した気配があった。

「あれ、入らないの？」などと考えていた優衣に「あぁぁああ！」

という悲鳴がかかる。驚いてそちらを見ると、少年のような少女がその場で固まっていた。
蜂蜜色の髪。同色の瞳と桃色の唇は開かれ、驚きを隠せないのが痛烈に伝わってくる。白シャツに白い大外套を羽織った少年のような少女……。

右手に持たれた彼女の金剣が、突然近くなった。

「あなた、帰ってきていたの！？　いつ！？　なぜ！？　どうして教えてくれなかったの！？」

騎士団長五位という肩書を持つ、愛称でマキという少女だ。この世界において唯一の、女の子の知人である。
なるほど。だから付き添い人の騎士が敬礼したのか。

「え？　いきなりなに！？」

マキの驚き様といえば尋常ではない。もちろん付き添いの騎士だって、マキと自分とを交互に見比べて困惑している。当たり前の反応だ。

「だって、私があなたを迎えに行く算段だったのよ。これじゃあ私の完璧な計画が、じゃなくてっ！」

「へ？　計画？」

マキは赤面しながら、コホンっと軽い咳払いをした。風邪でもひいたのだろうか、などと、優衣は見当はずれな答えを導き出す。

優衣はとりあえず、訊ねたいことを訊ねた。

「何であなたがここにいるの？　ここって正門だよね？　それに訓練とかは？」

きっとどこかに、訓練場があるはずだ。騎士団の人は、大抵訓練場にいそうな気がする。しかしマキは、腰に手を当てむすっとした表情で答えた。

「私があんな、むさ苦しい輩がいる場所で、訓練できると思う？　ここに来たのは、……もうっ、何度も言わせないでよ！」

マキは付添人である騎士に目配せした。騎士が敬礼して去っていくのが足音でわかる。

「へ？　どこ行くの？」

「決まってるわ。部屋に行くのよ。牢屋じゃないから安心してちょうだい」

マキが優衣の腕を掴んだ。冷たくて予想以上に手が小さいことに、優衣はビくりとする。

大きな音を立てて開いた正門を通り、優衣は歩きながら彼女に質問する。

「牢屋って？」

「あなた、自分の立場理解してる？　あなたはあの噂の張本人なのよ。まぁどうせ嘘だと思うけど、国としては押さえておくべしだし……。だから、軟禁部屋に行くの」

「な、軟禁！？　わたし軟禁されるの！？」

なんとなく、刑務所に入れられる感覚かな、とは思っていた。だが実際に目の当たりにすると、怖かったりもする。「監禁とか、牢屋に入れられるより、幾分かマシよ」と、マキが言った。

（そりゃそうだけどさ……）

たぶん、マキがいるおかげであろう。

普通なら、もっと酷い目に合わされているに違いない。

「後見は……ほら、ル、ルル、ル……」

そしてまた、若干顔が赤くなった。無茶苦茶噛んでます。

「？　ルカのこと？」

見事正解を言い当てると、マキは深呼吸をしてから「そうよ」と答えた。

「本当の後見人は、ル、ルカだけど、この王城にいる間は、私が守ることができるの」

「ふ、ふむ？」

またルカの名前で噛んだ……。そんな言いにくい名前かな。

そのままどこかへ連れて行かれ、止まったのは大きな両扉の前だった。

「ここ。軟禁って言っても、酷いものじゃないわ。あまり自由に出歩けないけれど」

両扉を押し開けると、やっぱりここでも眩しい。またここもスイートルームだ。

ソファに天蓋つきのベット。紅い絨毯に大きな窓。……鉄格子つきだが。

「もう少ししたら、あいつが来るわ。あなた、頑張りなさいよ」

「へ？　誰が？　何を？」

マキはさすがに忙しいのか、外套を翻しながら部屋から立ち去っていった。優衣は、外側から鍵の掛けられるタイプの軟禁部屋で、呆然と立ち尽くすしかない。

しばらく呆然としていると、いきなり外側からノックが掛けられた。しかし優衣の返答を待たず、両扉が開かれる。入ってきた男の第一印象が誰かに似ているような気がした。

猫科肉食獣の顔立ちに、鋭く光る金色の瞳。

サラリとした赤褐色交じりの茶髪は短く、シャツの第三ボタンまで解放されたダラけた格好。

強く雄の匂いを感じさせる（見た目）ホストな男は、唇を官能的に歪めた。

（…誰っすか……）

挑戦的に笑みを刻んだ男に、優衣はソファの上で思わず身構える。

「あんたがユイ・ヒサキ？」

身長の高さを理由にして、赤褐色の男は優衣を見下ろす。

「ほんとにちっちゃい。噂どおりだ」

「小さくて悪かったですね……」

優衣は呟き、男を睨みつけた。

すると赤褐色の男は「ふぅん」と鼻を鳴らす。品定めをされている感じでいやな感じだ。

「まあいいか。俺はバロン王国第一王子・バイアム・ダ・ジェスワだ。バイアムと呼んでくれてもいいよ」

バイアムという男は、にやりと口の端を上げる。

これで第一王子！？　第一王子って、次の国王になるもんじゃないの！？

いかにも淫靡そうな顔立ちだ。こう、飄々としている。

「たぶんあんたは、俺が第一王子に見えないって、思ってるだろ？」

優衣は遠慮なく首肯した。

バイアムは「まいったな」と、額を大きな手で覆う。

「言っとけど、この国の国王は生まれたもん順で決まらないぜ。第一王子から第五王子までが国王候補につき、国王が６０の生誕祭に

選挙が行われる。候補者が各課題を成功させた点数と、最終選挙において、やっと国王様が選ばれるってわけだ」

「へ、へぇ……そうなんだ……」

「独裁政治じゃなくて議会もいるから、国王ってめんどくさそうなんだよねぇ」

適当にぶつぶつと言い、「まぁ」と言って話を戻した。

「俺は、とかもかくとして、あんたの見張り役。まぁどうせ、どこにも行けないだろうぜ」

優衣の方の目をつむって、バイアムは踵を返す。

あの人はいったい、何をしに来たのだろうか。少々疑問が残る。

ちちち……、と小鳥のさえずりが、やけに遠く感じた。

7（後書き）

ユエ：「ここからしばらくユイさんと会えないのは寂しいです」
コウリ：「しょがないよユエ。無慈悲で鬼畜で勉強しない馬鹿作者が、僕たちを出してくれないんだ。ここは隣の国の王子という名目で、暖かく見守ってあげよう」
ユエ：「変態のくせにたまには良い事言うんだな。しょうがない。ユイさんと久しぶりに出会ったのち、ベタベタに甘やかしてやりましょう」
コウリ：「えぇ？　君が？　大丈夫。ユイには僕がいるから」
ユエ：「誰が変態に渡すか。……そういえば、アイツ（ルーク）はいつ帰ってくるんだ？　また行方不明か？」
コウリ：「……さぁ。片割（オウリ）れに聞いても、知らないっていってたし。どうせそのうち手土産を持って帰ってくるでしょ？」
ユエ：「……今度はどんな、おぞましい物を持って帰ってくるのだろうな……」

――――そんなわけで、無慈悲で鬼畜で勉強しない馬鹿作者――――（ってオイ！　誰だこんな肩書きを考えたのは！）――――の考えにより、遠い未来で会いましょう、ユエ君・コウリ君。――――え？　一人足りないって？　ふふふふふ。
さぁ、優衣はバロン王国に舞い戻って、マキとの感動（？）の再開です。　優衣はバロン王国で、何を思い、はてやどのような行動をするのでしょうか。第二章は、まだまだ　つ・づ・く。

8

今日は朝から外が騒がしい。昨日は色々と監察官に質問を受けたが、今日はなぜか侍女たちが走り回っているのだ。

（走りにくくないのかな……）

ちょうどその時、開かずの両扉が派手な音を立てて開いた。そこにいるのは、白い大外套を羽織る少年のような格好の少女……。

「――マキちゃんどうしたの？　そんなに慌てて」

「どうしたもこうしたもないわよ！」

明らかに怒っている。

しかし、マキに何かをした覚えなどないのだが……。

「議会が馬鹿な決議を出したせいで、王城（こっち）護衛騎士団は大変なのよ！　西ヴィアムの反乱を抑えるための援軍になってくれ、だって！　何が王城護衛騎士団よ！　これじゃあただの軍隊と一緒じゃない！」

西ヴィアムは、その名の通りヴィアム王国の西にある砂漠の国だ。ヴィアム王国の東にあるバロン王国にとって、もっとも遠い国でもある。

「――……愚痴ぐらいなら聞いてあげてもいいけど……」

しかしマキの激昂は、尋常ではない。いつも彼女は冷静沈着な印象（イメージ）があるのに、何か意外な一面を見た気がする。そういえばマキは、軟禁されている身の上の優衣と自由に会って良いのだろうか。

てか訓練とかは……？

「…騎士団長六位が、五千の軍隊を引き連れて出立したわ。それのせいで、二級騎士と三級騎士の、合わせて四分の一は持っていかれた……！」

「……それって、戦争じゃないよね…？」

戦争なんて響き、好きではない。自分の声は意外に静かだった。冷静、というより、恐々というほうがしっくりくる。

「戦争なんて、するわけないわ。自国を破滅に追い込むだけよ。ただ、西ヴィアムの反乱を抑えに行ったの」

マキは言うだけ言うと、外の見張り番の人に扉を開けてもらい、たったと去って行った。

やっぱり、愚痴を言いたかっただけなのだろうか。

やっぱり外は慌しい。西ヴィアムとやらのコトはあまり関係無さそうだ。

?――ねぇ聞いた？　第三王子のジェル様が、お倒れになられたんですって？

?知ってる知ってる。もう王城は大忙し？

（……出たっ！　ガールズトーク！）

鉄格子の窓の外から聞こえてくる、侍女たちの話し声。下の階でテラスを掃除をしている侍女たちが話しているのだろう。彼女たちはひそひそ声のつもりなのだろうが、風に乗ってここまで良く響く。

?だって今回の国王候補って四人ですからねぇ。第三王子ジェル様といえば、一番人気の美少年。お美しいわよねぇ？

（……え？　四人……？）

確かバイアムという第一王子が言っていた。第一王子から第五王子までが国王候補だと。

となれば、五人いなければならないのだ。

聞き間違いなのかどうなのか迷っていると、矢継ぎ早に侍女たちの話は続く。

?第一王子バイアム様、また今日も修行に行かれたんですって？？

?そうそう。弟思いだわよねぇ。行方不明になったミカエリス様を救うためと、幼き頃からの約束を守ってらっしゃるのよねぇ？

?兄弟愛だよねぇ？

?:うん。いいわよねぇ？

（……あの顔で……？）

いかにも淫靡そうで色魔そうで馬鹿そうな第一王子が、弟との約束を今も守っていることに、意外な一面を見た心地だ。

行方不明になった第二王子……、ちょっと気になる話だ。

?:ん？　何かしら、あれ？

?:何かしらね。あれ？

侍女たちがテラス越しから何かを見ている。しかし優衣は鉄格子があるため、窓から乗り出して見ることは出来ない。

?:人……かしら。黒いマントを羽織ってるわね？

?:王城に？　あれ不審者じゃないわよね。騎士団に通報しなくていいかしら？

?:騎士団は王城のいたるところにいるのよ。そのうち気付くわよ？

?:そ、そうよね？

侍女たちが部屋の中に入ったのが、気配でわかった。

（不審者見逃しちゃっていいの？）

◆◇＊＊＊◇◆

「きゃあ！」

それは一つの、悲鳴から始まった。王城の中に突如現れた、黒マントの不審者。男か女かも判別できない黒マントは、何かを探すように王城の廊下を駆け巡った。

「だ、誰かきてぇぇぇ！」

王城の中で待機していた騎士数名が、黒マントを食い止めようと立ち塞がる。しかし黒マントは嘲笑うかのように、高く跳躍して騎士数名の頭上を舞った。用はない、とばかりに黒マントは着地して走り出す。

小さく、歓喜の声を漏らした。

「わが君主、お喜びください。目標を見つけました……ッ！」

門番がいたが、武器を使わず手だけで気絶させてやった。

（えっ……悲鳴……）

微かに、女の人の悲鳴が聞こえた気がした。開かずの両扉の外で、ドスっという鈍い音が響く。
続いて派手な音を立てて、両扉が壊された。黒マントが、蹴って扉を破壊したのだ。

「だ、……れ……」

黒マントが、にやりと笑ったような気がした。
硬直して、動けない。
逃げろ、という衝動が突き上げるのに、この軟禁部屋では逃げられないと脳内で悟ってしまう。
瞬間、刺激臭が鼻を衝いた。
叫ぼうとしても黒マントは優衣の口を完全に布で塞いでいて、身体から力を奪っていく。

もはや抗う気力も、根こそぎ奪われた。

9

頭がクラクラして何も考えられない。目を開いているのか閉じているのか、それすらもわからない。　そんななか一番始めに感じたのは、唇の感触だった。

いくら頭がぼんやりしてようが、馬鹿な頭をもっていようが、大好きなアニメ絶賛放送中していようが、おばちゃんたちの井戸端会議で道がふさがれ通れないと心の中で泣いているおじちゃんだろうが、これがどんなに現実的ではないことか理解できるであろう。

こんがらがって手足をばたつかせることもできない優衣のおとがいを、触り心地の良い布越しに、誰がカ強く掴む。口を開けさせられ、舌とともにゼリー状の液体を流しこまれた。

（――――――――ッ！！）

後頭部は誰かの手で押さえつけられ、逃げることはできない。ほどなく、舌で押されるままの液体をのどで嚥下（えんか）した。

（……飲んじゃった――――――――――っ！！）

得体のしれない液体を飲まさせられ、頭の中がこんがらがってしょうがない。しかも、しかもだ。この世界に来て二回目。二回目のキスされたのだ。一人目はユエで二人目は誰だかわからない謎の人。頭がぼけていなかったら、みぞおちに向かって蹴りを入れてやるところだ。

やっと誰かの唇が離れ、優衣はぼやけた視界のなか相手を睨みつけた。一言文句言わないと気がすまない精神で構えたのに、視界が正常に戻り始めたころにそれが玉砕される。

深みのある声が、優衣の耳を打った。

「意識が戻ったみたいだな。まったく。馬鹿面引っさげて、貴様は本当に世話の焼ける娘だ――――」

柳眉。

瞳。

唇。

そのどれここれも絶妙な位置づけにあり、嫌味なほど造形された顔立ち。黒い騎士服は彼の魅力を昇華させ、筋骨隆々とまではいかないものの、彼の勇ましさを際立たせている。

……そういえば、暗褐色の髪といい、独特の服装と黒い手袋といい、蒼色の目といい、この性格悪そうで意地悪そうな顔といい、よくよく考えてみれば――――――

「……――つか何でルカぁ――――――――――っ！？？」

見ため黒騎士というべき毒舌家・ルカは、条件反射的に耳をふさいだ。右耳に付けた紫のピアスが、小さく揺れる。

「耳元でわめくな」

「わめきたいわよ逆に！　ギャーギャーギャー」

ルカが優衣の額を指ではじいた。デコピンってやつに、優衣は唇を引き結ぶ。そこでようやくここがどこなのか、理解することができる。紅い絨毯やクローゼットが見えた瞬間「ここは屋敷だ」と思

うよりはやく、優衣は再び絶叫を上げそうになる。

「な、なんでベットに上がってんのよあんた！」

「……。貴様なぁ。もう少し違う部分に気がつかないのか？　それよりさきに聞きたいことがあるだろ？　警戒心が高いのか無警戒なのかわからん奴だな」

ルカは皮肉るように言うと、素直にベットから降りた。と、言っても、彼がベットに乗せていたのは片足だけで、半分の足は地面で体を支えているが。

ルカはあるベットからある程度距離を置くと、背中を向けたまま告げた。

「さっきの薬は、貴様が痺れ薬を飲まされていたので、その解毒薬だ。あの男が使用した刺激臭のせいで頭痛はすると思うが、その辺は我慢しろ」

とりあえずあの男が貴様を誘拐しようとして、私が助けてやった、という部分だけ記憶しておけばいい、と、ルカはそのまま続けた。

（……軟禁……が）

「――そういえば、わたし王城に戻らなくていいの！？　これでも軟禁されてる身の上なんだけど」

てっきり、戻してくれるのであれば王城だと思った。ルカが軟禁されていることを知っているかどうかは知らないが。

しかし案の定、どこかの博士みたいなもったいぶりかたで、ルカがゆっくりと言葉をつむぐ。

「ああそのことか。それならまず心配要らない。貴様の管理権が王城(あちら)護衛騎士団から私(後見人)へと移譲(いじょう)した。根回しをしてくれたのは宰相だが……、一つ借りができたな」

いまいち理解できそうでできないが、ともかく王城に戻る必要は無くなったみたいだ。しかし、あの男が誰だったのかがいまいち引っかかる。それにあの男はどこへ行ったのだろうか。ルカは男を逃がしたのだろうか。そんな疑問を持っても、目の前にいる彼は言葉をはさませない。

「だが、貴様は未だ、噂される魔術師ではないかと疑っている輩も少なくない。しばらくは屋敷に居てもらうぞ」

自分の立場は、これでも理解しているつもりだ。バロン王国でそういう噂がたった以上、国として何らかの策を練らなければならない。今はとりあえず、大人しくしろということだ。ヴィアム王国に帰る方法は、ユエたちが何とかしてくれるはず。

そこまで思い、優衣ははっとした。

「あぁそうだ。わたし、ユエが迎えに来たら、ヴィアム王国に帰るからね」

バロン王国との交渉が成立すれば、ユエは迎えに行くと言っていた。それを思い出してルカに伝えたのに、彼は長い間黙り込んでいた。それほど長くはないはずなのに、いったいどんな表情をしているのか、不安になる。

「――――残念ながら、それは無理な話だ」

振り返ったルカは、冷たい表情をしていた。
皮肉げでありながら、自嘲げに笑みを刻む唇。それでいてなお、蒼い瞳は水晶のような光を放っている。
優衣は、「また」とうんざりした。なぜ彼とよく反発するのだろうか。それが気がかりでならない。いつも自分は負けてしまうのだ。しかし今度は、引き下がるという行為もできない。
沈黙で先を促すと、ルカは冷めた目で抑揚も無く言った。

「ヴィアム王国国王とコウリ殿の大喧嘩。婚約の話が持ち上がり、コウリ殿はその内容に激怒した。
国王は『コウリをたぶらかした娘を処刑する』と、バロン王国に脅してまできた。未だ必死に貴様のことを隠しているらしいが、それもすぐ無理になる。もし貴様の手配書でも作られれば、ヴィアムへの入国は永遠に無理な話さ」

やっぱり彼の言葉は、巧みで、正論だった。
コウリは次期国王継承者でありながらも、まだ正妃を娶っていないのだ。それどころか、側室もいない。それは対人恐怖症であるコウリのためを思って、国王(父親)が考えたものだった。しかしコウリは、すでに１９歳。対人恐怖症などと甘えたことを言える年頃ではない。
優衣は深呼吸した。コウリが怒る理由はわからないが、自分がこ(バロン王国)こに居続ける理由もない。だから優衣は、彼に歯向かう。

「オウリと、約束したんだ。わたし」

ルカはすぅと目を細めた。窓から差し込む光が逆光となり、彼の表情を隠していく。

「ずっと、コウリの傍にいる、って……。ただ傍にいるだけでも

いいからって、言ったから、オウリと、わたし約束したんだよ……！」

『一緒にいるだけでいい。共に暮らすだけでいい』

オウリは、そう言っていた。

コウリの妻でもなく、恋人でもなく。

ただ一人の家族として、傍にいてはくれないかと。

「だから、何が何でもヴィアム王国に帰るよ！　わたしだって、人の役に立ちたいもの！　だからわたしは、わたしは……っ！」

母から、真逆の愛情を受けてきた自分は、人の役に立っていそうで、たってない。

別に要らない子、と言われたこともない。だが、そばに居てほしいだなんて、誰も言ってはくれなかった。

ルカが眩しそうに自分を見つめていることなど、優衣は知らない。だって逆光（闇が濃くて）のせいで、見えないから。

「貴様は……、ただ約束を守るためだけに、命の危険があるヴィアム王国に戻ると言うのか――――？」

「そうだよ！」

子供のころ、とある女の子と遊びに行く約束をして、守れなかったことがあった。女の子はひどく傷つき、ずっと泣いていた。さびしそうに、泣いていた。それから、あの女の子とは会っていない。

突き放すでもなく、憐れむでもなく、ただ純粋に、ルカは疑問を投げかけた。

「それは、ただの我がままではないのか？　コウリ殿が、危険を冒してまでも戻ってきて欲しいと、貴様は思うのか？」

「わかんない。それはわかんないけど……、でもだからって……！」

「それより時期を待ってから、安心して帰ってきて欲しいと、コウリ殿は思うのではのか？」

「でも……っ！」

ただ、約束を守るために、行きたいだけなのに。

彼はそれを、阻もうとする。

自分の非力さに、吐き気を覚えた。

（わたしの力じゃ……ルカを説得させられない……）

どんなに足掻いても、彼は自分をヴィアム王国へ行かせてくれないだろう。

ルカはゆっくりと、瞳（め）を伏せた。

10

優衣は今だ、行動を起こせず屋敷にいる。いつも通りご飯を食べて、散歩して、お風呂入って、ベットで寝て。満たされたようで、満たされない生活。

自分は優柔不断だ。

ただ自分を貫いてヴィアムに行くか、ルカの言うとおりここに留まるか、迷っている。

（わたしは……何て馬鹿なんだろう……）

決定的な、何かが足りない。

……ガキィィィィンッ……ッ…

「……なんだろう」

鉄が擦れる様な音が、絶え間なく響いている。たぶん中庭からだろう。何かに操られるようにして、ふらふらと歩きだす。壁を手で伝いながら歩くそれは、盲目の少女のようだ。

外を出て、広い中庭に来たときだ。芝生が緑の絨毯に見える、その先で――――

（……！）

黒と白。

金と銀。

黒い軍装に黒い手袋。銀色に輝く剣を操るのは――――ルカ。

白い軍装。金色に輝く剣を操るのは――――マキ。

まるで舞を踊っているかのように、二つの対照的な色は、交錯する。

マキは速攻型だ。金剣は、あの細い腕で支えているとは思えないほど素早い動きを要している。

しかし、その全てをルカは受けきっていた。

斜め。横。上。下。

少しでも相手の不意をつこうと、目で追えないほどの素早さ（スピード）でマキが金剣を振るうが、一向にルカに当たる気配は無い。もともと速攻で相手を叩きのめす彼女にとって、長期戦を狙うルカは相性的に不利だった。身長の差も歴然としている。

（……鈍い……遅くなってる……？）

わずかにズレが生じているのだ。たぶん、疲れているのだろう。特別こういうものに見慣れたわけでもない優衣だが、何となくそう感じた。

「……！　しまっ――――――」

マキのリズムが、ついに崩れた。ルカが銀剣で一ミリの場所に叩き込み、柄が彼女の手から離れた。金剣が、空中でくるくると弧を描き地面に落ちる。

（すごい……）

剣など見たことも無いが、それがどれだけすごいことぐらいはわかる。

ルカは無造作に彼女の金剣を拾い上げると、マキにそれを手渡した。

「ほらよ」

「……ッ。負けたわ……見事にね……」

屈辱は感じていないのだろうか。負けを認めた顔をしている。金剣を鞘に納めたころ、ほぼ同時にルカも銀剣を鞘に納めた。

「ほんとに。騎士団長の名でも返上しようかしら」

カツカツカツと、気丈に振る舞う少女。

ルカは相変わらず無関心だ。ていうか、無表情。

（なぜに？）

そういえばマキとルカは、いつから知り合いなのだろうか。微妙な知人関係、というのか何というのか…。

「……時間だ。さっさと行けよ」

優衣は驚いてマキを見やる。

「…バレてたのかしら？」

「……どうせ訓練場が男ばかりだから抜け出して来たんだろう」

……抜け出してきたんだ。マキちゃん。そういえば、むさ苦しい輩、的な発言をしていたような気がする。

「悪かったわね。暇だから来てやったのよ」

ありがたく思いなさい、オホホホ……、まではいかない。優衣の脳内で勝手に補正された文章だ。

ルカの冷めた目線に、マキは怯まない。

「まぁ帰るわ。久しぶりだから負けたけど、またお手合わせ願える？」

「却下」

美少女の申し出を断った！？　しかも無表情で！？

「ま、また却下？　さっきはしてくれたじゃない」

「暇だから」

（うわ～性質（たち）わる～）

ついつい思ってしまう。彼の性格の悪さは、見ているこっちまで思ってしまうほどのものだ。マキは「はぁ」と息を吐いて、てくて

くと歩く。優衣はわかっていないが、複雑な乙女心だ。背中が痛々しいほどさみしげ。しかしルカは、物憂げに前髪をかきあげながらこっちに近づいてくる。
ふとした瞬間には、黒い手袋の嵌った手は優衣の髪をなでていた。

「あのさぁ、何で頭撫でるわけ？　わたしの身長が低いせい？　認めたくないけどさ」

ユエも、ルークも、みんななぜか頭を撫でるのだ。ルカは無意識だったのか、失笑気味に手を見やる。

「ああ。ただ単に、こういう柔らかそうなものをみると、触りたくなるだけだ」

「…お気楽でいいね。うらやましいよ」

明らかに自分より彼の方がサラサラだろう。自分の柔らかいかもしれないが、何だか変な気分になる。明らかに毎朝寝ぐせと奮闘している自分だ。

「……温かいな……」

「へ」の字に口を曲げている優衣など、ルカは気にしていない。最後は叩くように、ぽんぽんと撫でつけた。そのあと優衣は、全速力で彼から逃げることになる。

「――貴様、聖祭の対抗戦に出てみないか」

すごい速さだった。中庭の規則的に植樹された木まで後ずさり彼

を睨みつけた、までの時間、約０，８７秒。対抗戦、という単語に反応したわけでも、聖祭、という単語に反応したわけでもない。
ルカのその表情に、思わず後ずさってしまったのだ。
（なんか……すっごく嫌な予感がする……）
ルカは猫のような足取りで、一歩ずつ近づいてきた。それがやたら、優衣の『嫌な予感』警告を駆り立てる。逃げようと横を向いた瞬間、覆いかぶさるように彼の手が顔の真横をついた。切れ長の美しい瞳が、かなり近づく。
「バロン王国で二十年に一度ある聖祭だ。１０１人の乙女の中から、たった一人の清らかな魂もった乙女を探し出す。その？１０１人の乙女？の候補として、貴様が出てみろよ」
「なにそのムチャぶりっ！？」
（ていうか、清い魂を持ってるとも思えないんですけど……）
「いや、もう候補として出した。どうしても嫌だと言うならば……」
ルカは、若干愉しそうな笑みを浮かべた。いつもは見せないその肉食的な笑みに、優衣は思わず唾を飲み込む。
「ど、どうしても嫌だと言ったら……」
「……その時考える」
（この人悪魔だぁぁあああぁぁ！　究極のサディストだぁぁあああぁ

！）

ルカは「死にはせんから安心しろ」と更なる追い打ちをかけてきた。目がくるくると回り大混乱をしている優衣に対して、ルカは小刻みに震えだす。優衣が気付いた頃には、声を立てて笑い始めていた。

「へ？　なになに？　何でツボにはまってんのっ？」

超美形のくせに腹を抱えて笑いこける彼に、優衣はいっそ「頭大丈夫？」と思ってしまう。笑いが治まらない彼は、それでも必死に言葉を紡いだ。

「貴様が、そんな行動を取るからだろっ？　しっかしなぁ、貴様、ころころと性格、変わりすぎだろっ？」

優衣は「そ、そんなの知らないわよ」と、ルカの体を押しのけた。笑いが治まって間もないルカは、目じりにたまった涙をふき取りながら、優衣の肩を掴む。

「騙されたと思って出てみろよ。どうせ暇だろう？　暇そうな顔してるぞ」

麗しい笑みをうかべ、ルカは言う。優衣はジト目で彼をにらんだ。

「あなたに騙されて、良いことなんか一つもないと思う……」

素直な感想であった。

11

ルカの頼み事（ムチャぶり）のせいで、優衣はその対抗戦に出る羽目になった。どうせ暇だから、別に嫌という訳ではない。だからといって、候補に選ばれそうとも思えない。

１０１人といったら結構多いと思うかもしれないが、その乙女の候補になるために万単位の少女たちが集まるのだという。しかも、その対抗戦の内容が、色々と大変そうなのだ。

まず自分は、この世界の人間ではないというのに……。

「とりあえず、世界共通のロヴィア語を覚えろと？　英語だって完璧じゃないわたしが、なんで余計なロヴィア語まで……」

優衣はぶつぶつと文句を言いながら、ぶ厚い本を広げる。

……あれ……おかしいな……。これって、本当にこの世界の文字？

「……これって、日本語で書かれてるよ……しかも漢字つきで……」

優衣ははっとして、本棚にある本をしらみつぶしに読んでみた。するとすべてが、日本語で書かれている。背後でカツンと長靴が鳴った。

「―――意思疎通（いしそつう）、語源変換機能（ごげんへんかくきのう）である《赤の指輪》。肉体保持の役割を担う《黒の指輪》。バロン王国現時点において、すべて不可

能とされてきた《誓約(イペル)》の完成形さ」

「！」

黒いズボンに白いシャツ。そして黒い上着を羽織ったルカが、国語辞典より厚みのある大きな本を脇に抱え、両扉を閉めた。唇は、綺麗な曲線を描いている。

「それが使えるのは世界でたった三人。その一人であるのが、ヴィアム王国の国王継承者、コウリ・ヴォルス殿下だ。残りの一人は西ヴィアムにて牢獄中。もう一人はフムユスト皇国(こうこく)で消息を絶ったと噂される」

優衣はうんざりしたような顔でルカを見やった。彼は本を無造作に机に置いて、優衣と視線を合わせるため腰を落とす。シャツの隙間から白い布のようなものが見えた。

「貴様が生まれた国の語源に見えるのは、その指輪が勝手に解釈を起こしてるからさ。だから貴様には、私が喋る言葉も、字も、その語源に聞こえたり見えたりする」

ここに来た時から優衣の右手薬指には、赤と黒の指輪をクロスさせたような指輪が嵌っている。絶対に抜けないのだから、いまの今まで忘れていた。優衣は改めてその指輪を見やる。

赤い指輪には規則的に方陣が彫られ、黒い指輪には流麗な文字が刻み込んである二つの指輪。

「……そういえば、何で一番最初に教えてくれなかったの！？」

一番最初から、ルカは何もかも知っていたような口調だ。何にも

情報を教えてくれなかった彼に対して、今さらだが怒りの感情が湧き上がってくる。

しかしルカは、いとも優美な笑みを浮かべながら。

「貴様には、時期が来たら教えるつもりだったんだ。最初に教えていても無駄だと思ったからな」

と、軽くけなしてみせた。

「……あなた、ほんと良い性格してるね……」

「よく言われるな」

ルカは笑みで軽くけなすと、馬鹿ほどデカい本を広げた。一番最初のページには、日本語で【〜バロン王国千年の歴史〜】と書き記されている。

「課題科目は歴史だ。バロン王国千年という問題。最初に応募した数万人というなかから、五千人だけ第一次試験を通過できる。第一次試験は筆記問題で、第二次試験は口頭問題。第三次試験の時点で、応募数の9割が落とされる」

「もし運が良かったとしても、第一次の時点で落とされるかもしれないんだけど……」

数学の成績は高いが、それ以外は上の下程度だ。しかも国語は最悪的に悪い。歴史。暗記は得意だが、この世界の歴史って……エリザベスとか出る…？

「貴様なら出来るさ。自信を持てよ」

「……何かあなたに言われるとムカつくわ……」

彼のそれは逆鱗に触れる言葉だった。優衣はイラっと頬をひきつらせ、絶対鼻を明かしてやる、と固く決心する。

「候補に選ばれれば、これほど名誉なことはない。まぁ最終目標は『太陽神の乙女』になることだが、そこまで尽くせとは私も言わん。だから、せいぜい頑張れよ」

優衣はしっかりと頷く。名誉だろうが何だろうが、一度決めたことは、とことんやり通したいものだ。約束を守れなかった、コウリのためにも――――

「――なぁ。貴様は、何故そのような考えができるんだ？」

「……へ？」

唐突投げかけられた質問に、優衣は立ち上がった彼を追うように見やった。

「１０１人の乙女。普通なら『自分だったら絶対に選ばれる』と自信過剰になるか、『絶対に選ばれないから出たくない』と思うか、誰かに言われて渋々出るかのどれかだろ。だが貴様は、態度を見てもこれら三つの枠には当てはまらない。確かに私は強いて貴様を押しやったが、今こうして試験のために努力をしている」

褒められているのか貶されているのか不思議がっているのか、いまいちわからない言い方だ。優衣は思ったことをそのまま述べてみ

る。

「だって、もう参加登録とかしちゃったんでしょ？　確かに自分が選ばれるとはこれぽっちも思ってないけど、選ばれるための努力はしたいしさ。……それで、その、……、これをやったら、……」

ヴィアム王国に行くことを許してくれるか、と言おうかどうか迷う。

予想に反して、ルカは真顔だった。

「……。まぁ、いい。ある程度の努力をしたら、それだけ結果が実となってついてくる。１０１人の乙女に選ばれれば、先代の《アルミス》が乙女たちに試練を与える。その試練に成功して『証』を手に入れた乙女こそ、晴れて当代の《アルミス》になれるんだ」

説明をするだけすると、ルカはぱっと離れた。

「――美しく賢く、麗しい小鳥のようなさえずりで皆を癒し、太陽のごとき眩しい笑みで皆を魅了し、導くとされるのが太陽神の乙女・アルミスだ」

彼の皮肉げな笑みに対して、優衣は思う。

（…？美しく賢く、麗しい小鳥のさえずりでみんなを癒して、太陽のような眩しい笑顔でみんなを魅了し、導くとされるのが太陽神の乙女・アルミス？ぅ――――――――っ！？）

……候補になれるほど、自分は美しくないないしそれほど賢くもない。まして小鳥のようなさえずりなど、そんな声出せるわけがない。笑顔なんて、そんなビジネススマイルできるわけない。

「――あなた、とんでもない聖祭（もの）に参加登録してくれたわね――――っ！！？」

心の底からの、叫びだった。

◆◇＊＊＊◇◆

太陽神の乙女・アルミスの聖祭。太陽神の乙女を決める前に、その候補を１０１人だけ決める聖祭だ。参加対象は１０歳～１７歳までの少女全員。候補に選ばれるだけでも名誉なことで「我が娘こそは」と、応募人数はなんと五万人。メイルの街からという少女たちが圧倒的だ。五万人という大規模な応募数から、第一次試験に上れるのはたった五千人。

「……」

のはずだ。？たった？のはずだ。

長い足を優雅に組む彼を見上げて、床に正座しながらため息をついた。

「悪運と言うべきか、それともただの幸運と言うべきか……」

優衣は頭を押さえる。さっき彼の口から発せられたのは「不合格」

ではなく。

「なんでわたしが「合格」なの？　これって幸運？　不運？　それとも悪運？」

そう、合格というか、入った、という報せだった。どうやって応募者から五千人を選ぶのかは知らないが、とりあえず今日の第一次試験に行かなければならないらしい。

「？神の理は神のみぞ知る？。偶然か必然かは、後で考えればいい。ともかく貴様は、乙女候補になれる可能性がある。せっかくこういう機会に恵まれたのだから、真剣にやれよ」

「そ、そりゃ、わかってるけどさ……っ！」

正座をしてるから足がそろそろ痛くなってきた……。

「あぁそうそう。第一次試験と第二次試験ならそうだが、第三次試験は正装を身に纏わなければならない。普通なら誰しも持っているものだが、貴様の分はとりあえず私が用意した」

……這ってでも第三次試験まで行けとっ！？　んな無茶なっ！

「まぁ。落ち着いてやれよ。第一次試験程度なら、楽勝だろ？」

「いったいどこからそんな言葉が出てくるの。確かに、国語以外なら成績も良いけど…」

国語だけいつも「3」がつくのが現状だ。国語じゃないから、ある程度は頑張れる気がする。

優衣はもぞもぞしながら、拳をつくった。

「最大限の努力はする。それだけは、約束できる。たとえ、落ちたとしてもね」

「ああ」と、深くルカが頷いた。そのあとに「貴様なら」と、小さく呟く。

11（後書き）

作者は国語大好きですよ。数学は好きだけどテストは嫌い。

12

第一次試験。筆記問題。
優衣は羽ペンを持つ手を休め、今とさほど変わらない問題用紙の解答欄を睨みつけた。全部埋まっている。これが全て正解なら満点だ。ほぼ確実に第二次試験に進める。
優衣は深呼吸した。

◆◇◆◇◆

美少女から美女。美醜（びしゅう）関わらず街の掲示板に群がるそれは、高校受験を体験したかのような心地だ。
番号、ではなく、順位で挙げられている掲示板には、選ばれし者たちの名前が挙がっていた。五千人から一気に千人にまで絞り込まれる第一次試験。一位から千位まで桁のあるその中に、優衣の名前は挙がっていた。

「……154位……」

満点中9割を正解でおさめたのに、二桁には至らなかった。その前に第一次試験を通ったことに、驚くべきであろうが。

（ここまで来たんだから……、第三次試験まで行きたいよね……！）

第二次試験は二日後。確か、試験官の前での口頭問題のはずだ。筆記問題より、さらに難解な問題が出てくるであろう。

◆◇◆◇◆

「受かったんだって？　とりあえず、おめでとう、とでも言っておこうかしら」

さっそくルカに報告しようと彼の部屋を訪れたら、そこにはマキの姿があった。いつも通り白い大外套を羽織る、栄えある騎士団長の姿に、優衣は目を見開く。

「マキちゃん！　また訓練さぼったの！？」

「えっ？」

向こうの方で本を読んでいたルカが、笑いを堪えているのが気配でわかった。

「訓練をしたくないから彼の部屋を訪れたわけでも、彼に会いたいからこの屋敷に来たわけでもなくてよ！　あ、前者の方を撤回よ！

――――あ、いえ、その、後者の方も撤回よ！」

みるみるうちにマキの顔が真っ赤になる。

（……どっちとも正解ってことでしょ……？　なのに何で顔あかくするかな…）

まさか、やっぱり風邪でも？　などと、優衣は見当違いなことを思う。マキは小さく咳払いすると「とりあえず」と気を改めさせた。

「第一次試験、合格おめでとう。結構良い滑り出しだわ」

「あ、ありがとう。……あれ、でも何で知ってるの？　わたし、それを報告しにここに来たんだけど」

まだ誰にも報告していないはずだ。すると向こうの方で、ルカが立ちあがった。古い本を持ったまま、こちらに近寄る。

「私が教えたのさ。貴様の合格通知は、すでに知っていたからな」

「し、知ってたのっ？　何で？」

合格のやつは、街の掲示板だ。ついさっきそれを見てきた優衣に対して、彼は一歩もこの部屋から出ていないだろう。マキがいるから余計だ。

しかし彼は、本を軽く空中に投げながら笑みを浮かべる。

「保護者には、先に通知される仕組みに、なっているからな」

優衣は本を掴み取るルカを呆然と見やった。確かにそうだったような気がする。

（せっかく鼻を明かしてやれると思ったのに……！）

（こうなったら、何が何でも……乙女候補とやらになってやろうじゃないの……！）

優衣は勝手に決意し、ルカを人差し指で指した。

「第二次試験も、絶対合格してやるんだからね！　覚えておきなさい！」

「……。何があったのか知らないがやる気だな」

ルカは笑みを浮かべて言った。皮肉さはなく、何故か若干嬉しそうな笑みで。

「まぁせいぜい頑張れよ。全力でな」

わかってるわよ、と優衣は言いかけ、ふと思い出す。

「……あ、そういや、第二次試験って、口頭問題だよね？」

「そうだが」

「早押しの、クイズ形式だから、……どこでやるの？　どこかにスタジオでもあるわけ？」

「……貴様、場所を知らないのか？」

冷たい視線に、優衣は思わず「うっ」とうなって縮こまる。やっぱりルカに対しては、どんな発言でも嫌味が返ってくるらしい。これから気をつけないと。

「だって、何も聞かされてないし……ルカだったら何か知ってるかなぁって」

「第二次試験からは王城内での試験だ。十人ずつに分かれて、各部屋で口頭問題を行う。各部屋で生き残れるのは二人のみだ」

呆れた顔ではなく、ルカは小さく吐息を吐いて告げた。うしろのほうで、何やらしかめ面をするマキがいる。

「上位二位ってわけね。……よし」

優衣は心の中で、今まで覚えてきたバロン王国の歴史の文章を繰り返す。勝つためのことはやってきた。あとは、全力でやるのみ。

◆◇＊＊＊◇◆

「――第２６問目。バロン王国、７代目暴君の名を述べよ。ただし、略式は誤答とする」

（きたっ！）

髪を整え黒い礼儀服を着込む二人の試験官。自分の左右に居る九人の少女たちを見るわけでなく、優衣は真っ先に手を挙げた。

「ユイ・ヒサキ。申してみよ」

「――７代目暴君は、ジョップ・ザイエル・キコウスですっ！」

「うむ。ユイ・ヒサキの解答は正解である」

隣の方で、小さな舌打ちが聞こえた。優衣はそれを感じながら、ぎゅっと拳を作る。

（……まさか、ここで二位の子と当たるなんて……）

自分は木の柵に囲まれている。他の九人の少女もろともだ。まるで裁判を受けているかのような心地になる。優衣が気にしているのは、部屋の端で余裕げ微笑を湛えている少女だ。第一次試験で二位通過した彼女は、容姿端麗・成績優秀・実家富豪というお嬢様。大きくてパッチリとした碧眼と、サラサラストレートな金髪は見る目麗しい。

（フェルシア・バイトン……。戦乱の時代を生き残った唯一の貴族……）

彼女ははすでに一位確実だ。１６ポイントを取っているため、早抜けしている。だから優衣は、二位を狙っていた。

（これで点をとったから、三位と同点。次でポイントを取れば、二位の子と並べる……！）

試験官の言葉に、耳を澄ます。

「――第２７問目。バロン王国の山脈地域咲く「ミワン」は、特にどのような薬として重宝されるか、述べよ」

（……え……？）

知らない。知るわけがない。だって、課題科目は歴史。植物なん

て、聞いてない。

「――「ミワン」は特に、ミクシン病という恐ろしい病気に適すると言われています」

現在二位の子だった。彼女は貴族ではないものの、父親が大商人だから大金持ちらしい。

（……連続で正解しないと、二位になれない……！）

次も植物問題が出たら終わりだ。優衣が答えられる可能性は極端に低い。いや、不可能と言っていい。

「――第２８問目」

試験官の朗々とした声が、優衣を我に返らせた。ものすごく焦りを覚える。

「特別問題。二千年前、世界破滅の危機を乗り越えた英雄・ミカエルの、弟の名前と、その汚名を述べよ」

（！）

少女たちにざわめきが走った。たぶん、みな名前だけは答えられるが、汚名は知らないということだろう。優衣は、それを聞いていた。だって、その名前は……。

「――――ルカヴィンド・サラシュタ。汚名は、「影の覇者」……」

手は上げていなかった。しかし試験官は「うむ」と、頷きを見せる。

（ルカ……）

血が出そうなほど、唇を噛みしめる。似ているのだ。その英雄の弟と、彼の名前が。

「――以上をもってして、第二次試験を終了とする。なお、一位のフェルシア・バイトンと、二位のユイ・ヒサキは、たった今をもって、二日後の第三次試験を行える資格を、もつ者とする――――！」

優衣はその場で崩れるように座り込んだ。三十問、一時間に渡って緊張状態が続いていたのだ。無理もないだろうが。

（なんで27問目で、植物の問題が出てきたのよ……！　歴史だけのはずでしょう！）

出てきたのは27問目だけだったから、優衣は一点差で二位に登りつめた。もしそのまま植物問題が出ていたら、間違いなく二位にはなれなかっただろう。

優衣の脳内で、さきほどの試験官の声が再生される。

『特別問題。二千年前、世界破滅の危機を乗り越えた英雄・ミカエルの、弟の名前と、その汚名を述べよ』

『――――ルカヴィンド・サラシュタ。汚名は、「影の覇者」……』

（……これって、偶然なの……？　彼（ルカ）の名前と、英雄・ミカエルの弟の名前が、似てる、って……）

この問題は、ルカ自身に聞いていた。だから優衣は、汚名の方も知っていたから、答えることができた。

「……二日後の第三次試験。まだ情報が与えられていないけど、いったい何をするんだろう……」

優衣のつぶやきは、乙女たちが部屋を退場する足音で――――――かき消された。

13

ぼんやりと星空と眺めていた。綺麗な夜空だ。この世界でも月は美しい。
そして、散りばめられた星も綺麗。

「こんな夜景、都会じゃ見られないもんなぁ」

第三次試験は、明日の昼から行われる。だから優衣は、自室のテラスからそれを覗いていた。
下を見下ろせば屋敷の中庭と、向こう側には静まり返ったメイルの街並み。白亜の城でさえ、この星空には敵わない。

（……寒いなぁ。……）

優衣は長袖のワンピースを手繰り寄せた。この街の夜は冷える。

「――馬鹿だな。風邪を引いたらどうする」

「！？」

ばさりと、暖かいものが身を包みこんだ。これは黒い上着だ。しかも大きい。

「な、何でそんなとこにいるの！？　危ないよ！」

いつの間にかルカは、欄干の上に悠々と立っていた。月の光が、彼の顔を淡く照らす。

「……静かにしろよ。夜は、そういう一時(ひととき)だ」

「だって……！　（ここ二階だよ……！）」

優衣が小さな声で言うと、ルカは皮肉げに笑ってみせた。

「面白いだろう？　ここに立つと、街(メイル)が一望できるのさ」

彼は街を見下ろした。

その姿は、月からの使いにも見え。

――「影の覇者」と思えるほど、皮肉なまでも美しい。

優衣は彼の上着を手繰り寄せた。冷たい表情をしているのに、馬鹿げたほど上着は温かい。

変な感じだった。冷たいはずの彼が、こんな温かい体温を持っているなんて。ほんと。

「夜はな、人を癒す」

「え……？」

優衣は確かめるように彼の横顔を窺った。

「太陽は人を縛り、月は人に安らぎを与える。…私はそう考えている。

――馬鹿げた話だろ？　自分勝手だと思っているさ」

彼は、自嘲げな微笑を浮かべていた。
優衣は言う言葉が見つからなかった。言葉を探すうちに、彼は言葉を紡ぐ。
「太陽は嫌いだ。輝くのは表(おもて)、裏は影しか残らない。それに比べて、月は良い。全部が均等だ。裏も表もない。闇は、……私の色だ」
彼は星空を見上げた。闇に似た暗褐色の髪が、サラサラと音を立てて流れる。
「――ルカヴィンド……」
「えっ？　いま、何て……」
彼は、こっちを見てはくれなかった。蒼い瞳を、こっちに向けてはくれなかった。
「――私の名前(汚名)さ。偽名だが、私はこっちの方が気に入っている」
「……本当の名前は、何て言うの？」
「――――……」
風。それも突風だった。優衣は髪を押さえながらも、ルカを見上げる。しかしもう、彼の美しさを見ることはできない。彼は一足先に部屋に入り、自分を待ち構えていた。
「……風邪を引く。部屋に戻れ」
優衣はひっそりと「教えてくれないんだ」と、物淋しげにつぶや

く。無意識に苛立ちがまざっていたのは、まだ気付かない。

◆◇＊＊＊◇◆

「これより、１０１人の乙女候補の、最終試験を執り行いたいと思う――――！」

長官による開会式の宣言により、正装を身に纏った優衣は王城の地下へと進んでいた。

岩肌にかかげられる松明。ぬるりとした地面。木の柵の向こうは崖であり、そこは地の神が住まう場所だといわれている。

２００人の少女と七人の神官の列。一列の徐行行進であった。

「……この正装着、ちょっと重いかも……」

赤色の塗れば完璧に巫女さんだ。まぁこの世界はヨーロッパだから、全身幽霊のような白衣なのもうなずける。しかし何枚も重なって着ているから、ちょっと肩に食い込んだ。

（……長いなぁ。もう何十分くらい歩いているんだろう）

歩くのはいいが、いったいどれだけ地面に潜り続けているのだろう。この地下を掘ったのは大昔の魔術師らしい。微かに魔力を帯びているらしいが、優衣にわかるはずもない。ましてや魔術師どころか、魔力をもつ人間でさえ激減しているし。

そろそろ、この王城の敷地内にある三つの聖域のうち、一つにたどりつく……。

「……下り坂が平面になってきた……」

壁がくり抜かれたような大穴があった。その奥に、先頭の乙女たちは入っている。冒険気分とまで優衣は幼稚ではないが、何だか胸が高鳴る。大量に焚かれた松明のもと、その空間が優衣の眼前に広がった。

（……うわぁ……！　綺麗な水……！）

泉、または地底湖、とでも言うのだろう。面白いほど透き通った水から察するに、水底は五十センチも無さそうな深さだ。どこから湧いているのか探ってみると、何やら中央部分から水を噴き出していそうな感じだった。地下水脈でもあるのだろうか。

その脇を通るように列は進む。入口の反対側に位置するそこには、ここから見えるが限り、何やら金の大皿のようなものが置かれていた。

「前半の乙女たちよ。こちらへ」

「後半の乙女たちは、静かに水に入りなさい」

二人の神官が言うには、前半の列は陸で待機、後半の列は水の中に入れということだ。

今思えば、前半の列の子のほとんどが、バイトン家（貴族）や大商人といった金持ちの娘。優衣のような後半の乙女は、運よく選ばれたような子たちばかりだ。

（つ、冷（つめ）たー）

水泳で感じるような水温、どころではない。冷水だ。こんな中に

ずっと入ってれば、手足の感覚が麻痺するに違いない。しかし左右には何も言わず唯唯諾諾と入っていく乙女たち。優衣は覚悟を決めて水の中に入り、金の大皿に近づいた。今思えば、水の中に入っても大丈夫な服の素材だろう。

最後尾から見える限りでは、遠くから見えたあの大皿は、大皿ではなかった。

「？　金の鏡？」

金色の大きな丸い鏡。装飾もさることながれ、少しも粗野なイメージを与えない。

「今から選別の儀式を執り行う。心して待たれよ」

神官はある少女の名前を呼んだ。その名前が試験二位の「フェルシア・バイトン」だということにびっくりする。神官が言葉を発した。

「代々の太陽神の乙女・アルミスの力を受け継ぐ、金の鏡よ、かの者は太陽神の乙女になるに相応しい叡智を秘めておる。かの者は、太陽神の乙女になれるか、なれまいか」

（うそぅ！　こんな感じでやってくの！？　無茶苦茶時間かかるじゃない！）

神官の唱えに、金の鏡はぴかりと輝きを放った。一瞬の閃光のあと神官が「腕を差し出すが良い」と命じる。言われるがまま彼女が腕を金の鏡に差し出した。まばゆい光が彼女の腕を覆い、やがて……。

「おぉ……！　一人目の乙女候補だ……！」

上級神官たちの歓声のもと、彼女の腕には何やら刻印があった。ここからじゃ見えない。

フェルシアはいそいそと自分の場所に戻った。勝ち誇ったような微笑が、口もとに湛えられている。

そのあと何人もの乙女が金の鏡へ行き、ある者は落とされて泣き崩れ、ある者は刻印を手に入れ喜んでいた。

「――ユイ・ヒサキ。前に出るが良い」

名前を呼ばれ、優衣はびくりと背筋を伸ばす。乙女たちが金の鏡へと誘う道を作り、視線は優衣に向けた。落とされた者の嫌悪と、選ばれた者の冷視線が痛いほど伝わってくる。感覚の無い足をやっとのことで動かし、優衣は身の凍える思いで金の鏡の前に立つ。寒さで血の気が無かった。

「かの者は太陽神の乙女になるに相応しい叡智を秘めておる。かの者は、太陽神の乙女になれるか、なれまいか」

金の鏡がぴかりと光った。神官に命じられ、優衣は震えながらも腕を差し出す。

（ここに刻印ができれば、……乙女候補になれる……）

刻印が彫られなければ、ずべてが無と化す。しかし、優衣としてはどちらでも良かった。１０１人の乙女候補に選ばれればそれはそれで良い。選ばれなかったとしても「あぁあ」と思うだけ。その時は落ち込むかもしれないが、受験に落ちたわけでもあるまいし、か

なり楽観的であった。

「！」

眩しいとまではいかない。それでも、腕を包み込む金色（こんじき）の輝きに、優衣は目を細めた。

（……！　これが……――――刻印…）

上級神官の中で誰かが優衣に鋭い視線を送った。安堵とも苦悩ともとれるその視線に、優衣は気付かない。ただ太陽の刻印が持つその熱に、優衣は息を吐き出した。温かい。

（太陽神……の、乙女……）

幼稚園児がクレヨンで描くような、あんな太陽ではない。もっと文明的で芸術的な太陽の刻印が、優衣の右腕にはあった。色は褐色。だが、明るい色ではない。そしてそれが、入れ墨のようなものだと知った。

「うむ。これですべてじゃ――――」

「えっ？」

思わず隣に立つ神官を見上げてしまった。優衣など気にもせず、神官は朗々と宣言する。

「１０１人目の乙女候補は、ユイ・ヒサキであるということを、いまここに、長官として申し上げる。なお、１０１人の乙女候補は、明日、王城の《最聖域》にて、儀式を執り行う――――！」

最後の、一人。自分が、１０１人目の乙女。

（……ほんとに、選ばれちゃったよ……。？１０１人の乙女？に……）

神官の「なお、選ばれなかった乙女たちには奨励金が出る」などの声は、優衣の耳に入ってこなかった。勝った負けたそれぞれあるものの、乙女たちは、この聖域から出ようとしている。

前半の列の乙女の子がこの空間からいなくなり、優衣は金色の鏡を見てから一歩足を踏み出して……。

「……うわっ！」

踏み外して浅い泉にダイブするところを、とある神官の方に救ってもらった。助けてもらった拍子に顔が胸板に当たり、かすかに甘い香りがする。

「あ、ありがとうございます……」

「……風邪を引いたら大変ですよ。地上に戻ったら、早くお体を温めて下さい」

（……あれっ？）

相手の顔が一瞬だけ見え疑問を感じたそのあとに、青年は優衣から離れた。後姿は誰かに似ていて、神官が着用する白い帽子の中からちらりと銀色が見える。

「……」

優衣は再度青年を睨むように見つめて、乙女たちの列に加わった。

13（後書き）

作者が得意なのは
「シリアス＞コメディ＞恋愛」（恋愛小説を本格的に書いたのは今回が初）
こっちなんですよね。
第二章ももうすぐ終わりますし、第三章は
「コメディ＞恋愛＞シリアス」
という具合になれるよう頑張ります。
第三章は物語をあまり進めません。
ですが、第三章は数が少ないと思います。

１４　太陽神の乙女・アルミス　前編　（上）

バロン王国王城、最上階の式場《最聖域》。パルテノン神殿を思わせる大理石の柱。古代より残された永久不滅の魔術により？１０１人の乙女？たちが進む道以外は、暗黒の世界とも呼べる真っ黒な闇。縦十列横十列という、正方形のかたちを維持しながら乙女は進んでいた。

ゆっくり、一歩一歩確かめるように進む乙女たちは、一週間前の白い正装よりさらに豪華な服である。最高級シルクをふんだんにあしらわれた、純白のドレス。そして胸元には、太陽を表すルビーがあった。

（１０１人分も、よくこんだけ……！　お金かかってる……！）

ルビーというのは、そうそう簡単に手に入るものではない。まして１０１人全員分だったら、どれだけお金がかかるだろうか。ルビー一個で車が買える値段だとすれば、落としたり壊したりする前に早々返還したいものだ。……いや、気分的に放り投げたい。

優衣は上級神官たちを横目でうかがう。乙女の両端に、一人ずつ配置されている神官たちも、何やらルビーを付けている。そういえば、この乙女たちの先頭にいるのは、神官ではなくフェルシアだったような気がした。

先導を行う彼女の右で、神官が深く礼をとった。

「……神官長様。いまここに太陽神の乙女・アルミスとなれるやもしれぬ、１０１人の乙女たちと共に参上いたしました」

続けざまに、フェルシアが頭を下げた。波のように、１０１人の乙女は深く礼を取る。一番後ろにいる優衣も例外ではない。

「――うむ」

祭壇の上で畏怖たる威厳を漂わせながら、神官長は深くゆっくり頷いた。お腹まである立派な白髭が印象的だ。

「ではこれより、バロン王国３７代目国王に、太陽神の乙女・アルミスとの儀を、宣言してもらう」

前列の乙女たちが真っ二つに分かれた。右端に五列、左端に五列。国王を通すための道を作るためなのであろう。優衣はみなと同じような行動をし、軽く頭を下げながら入り口を窺った。

入口、というより光しかみえない。

ほんとうはあそこに階段があるのだが、古代魔術にのせいで空間が捻じれ、それを見ることはできないのだ。しばらくすると、国王と思われしき５０代後半の男が、ゆっくりと進んできた。

（あれが、国王陛下……？）

赤褐色の髪。微弱な光を放つ金の目に、若々しくしっかりとした体躯。金や銀の刺繍がたくさんほどこされ、肩からさげる皮ベルトには大きな宝石が三つもついている。

その傍らには、太い白眉のせいで目が隠れた、ほっそりとした男が付き添っていた。宰相である。

……国王陛下はともかく、あんな細々と皮と骨しか無さそうな人が宰相って……。

祭壇に立った国王は、まだ若々しい渋い声で朗々と語る。

「太陽神の乙女・アルミスの儀式を執り行う。先代アルミスよ、そなたは、新しい乙女の誕生を、祝福してくれるのか」

国王は後ろに振り返った。みんなの視線の先には、女の人が立っている。

「……。ええ。わたくしは、乙女の誕生に賛同します」

綺麗な女性だった。美女というより、女神という方がしっくりくるような金髪の女性。優衣たちと同じように白いドレスに体を包み、まだ三十代半ば程度だろう。……うーん。なんか目がちょっと赤っぽくて怖いなぁ。

「うむ。先代アルミスの同意を得た。

――これより、新たなる当代アルミスを見つけ出すため、この空間で試験をとり行う。

なお、ここは古代魔術によって成るため、空間が度々作りなおされる」

国王が下がった。すると今度は、先代アルミスが弱弱しく紡ぐ。

「――今回の試練は、太陽神の乙女の『証』を見つけ出すというものです。そしてこの空間は、いまわたくしが支配しています。ですから、永久に出られなくなっても不思議はありません」

「っ！？」

ざわめきが走った。国王と傍らにいる宰相が「予定外」というよ

うな顔をしている。

（永久に、出られなくなっても……――――ッ！？）

彼女は確かにそう言ったのだ。それはまるで、ここで死ねと言っているかのよう。

先代アルミスは、みなの驚愕しきった顔を見渡し、満足げな微笑を湛えた。

「お許しくださりませ陛下。この空間を保持する「戍石（まもりいし）」は、わたくしが頂戴いたしました。わたくしは微弱ながらも魔術が使えますの。ですから、魔力のない陛下と、ここにいらっしゃる１２３人の方々には、――――――死んでもらいますわ」

一瞬で先代アルミスの姿が消えた。「わたくしは、永遠不滅の麗しきアルミス」という声が、入口である光の方角から聞こえる。それが逆光となって、先代アルミスの表情を隠した。

「それではみなさん、ごきげんよう……！」

彼女の姿が、光の中に入って消えていく。そして、唯一この空間の入口が、見る間もなく閉じられていく。

「っ！」

闇が。

完全に、この場にいる者から、光（出口）を奪った。

そして、優衣は、次の瞬間には。

「！　ど、どこ……ここ……」

どこかへ、移動していた。
周りには誰もいない。そのかわり、何故か本で埋め尽くされていた。右も左も本。本。本。本の山しかない。

「閉じ込められた……」

誰もいなかった。静寂だった。暗かった。
なぜか自分の周りだけ明るくて、数メートル先は真っ暗だった。
まるで自分だけに、スポットライトが当たっているように。

（……）

怖くはなかった。それとともに、楽しくもなかった。
思い出すのは、トイレの個室。母親に投げ込まれ、日が暮れるまで泣いていた幼い頃。
真っ暗だった。ただひたすら、真っ暗だった。

真っ暗で、真っ暗で。
真っ暗で、真っ暗で。
真っ暗で、真っ暗で。
真っ暗で、真っ暗で。
真っ暗で、真っ暗で。
真っ暗で、真っ暗で。
真っ暗で、真っ暗で。
真っ暗で、真っ暗で。

光が恋しかった。
雑音がほしかった。
温かさに飢えていた。

怖くて憎くて。それでも、あれは演技なのではないか、と、期待もしていた。

――狂っていても、母は自分だけの母だから。

?母が死んだときには、何かが切れた……――――?

忘れる。ただそれだけに、本能(優衣)は尽力を尽くした。

忘れる。
忘れる忘れる忘れる忘れる忘れる忘れる忘れる忘れる。
忘れる忘れる忘れる忘れる忘れる忘れる忘れる忘れる。
でも……――――

たまに、ふとした瞬間に、母親を思い出してしまいそうだった。
つい最近では、ルークと話をしたときであった。
防衛反応が働き、優衣はまたすぐにそれを忘れた。
そしていま、再び思い出した。

(……お母さん……)

そして優衣は、光と出会った。
眩しいと感じるまでの、強大な光を。
「わたしには……遠すぎるよ……」
闇にのみこまれる自分。
光に心を魅せられた自分。
母親を憎み、恐怖さえ感じる自分。
（……光は、誰の味方……？）
優衣は、眩しさに目を細めた。

１４　太陽神の乙女・アルミス　前編　（上）（後書き）

シリアス感をここでぶっ壊しても構わないという方のみ、この先にある作者と優衣の会話をお楽しみください（笑）

優衣「ちょっとリノさぁん。シリアス多すぎじゃない？　そろそろみなさんもシリアスに飽きてきた頃だと思うよ。うん」
作者「……ふぇ？　にゃに？」
優衣「！　あなた、人が必死になって読者様の言葉を伝えてるのに、何たい焼きを口いっぱいにしながら筆跡してんのよ！　パソコンが壊れちゃうでしょ！」
作者「……ゴクン。あぁみなさん、おはよう・こんにちわ・こんばんわでございます。今日も良い天気（？）ですね」
優衣「小説のことだ小説！　この馬鹿作者っ！」
作者「ちょっと優衣？　キャラ変わりしてない？　小説中にあるあの可愛いキャラはいったい――――」
優衣「うるさいすっとこドッコイのカス野郎！　読者様の事を考えろつうとんのがわからんのかドアホ！」
作者「そんな大きな声で言ったら美形男性軍がこっちに来ちゃうよ」
優衣「あんたが逆ハーをつくりたい言うからわたしが付き合ってんのよ！　いまから一人に絞りなさい！」
作者「えっ一人だけ？　だれだれだれだれ。誰にするの？」
優衣「へっ？　誰って……」
作者「えっまさか。優衣ってそんなに浮気者……」
優衣「んな訳あるかボケっ！　若干一名を除いて全員、と・も・だ・

ち・よ！」
作者「そんな可愛いものかなぁ」
優衣「……この世界って、確か拳銃あったわよね。ルークさんが暇つぶしに作ったヨーロッパ式のやつ、あれ借りてこようかしら……弾入りで」
作者「あなたってそんなに怖い子だったの！？　母さんそんな子に育てた覚えないんだけど！？」
優衣「……。やっぱりいいわ。ルークさんに頼んでバズーカ作ってもらいましょう。消音機能付きで」

見苦しい文章を見てくださってありがとうございました！

15　太陽神の乙女・アルミス　前編　（下）

「なんだろう」

円形の空間、とでも言うべきだろうか。四方八方が大きな扉になっており、どこから入ってきたのかはわからない。ぐるりと一周し、それとともに扉が開くかどうか調べてみたが、扉は堅く閉ざされて開かない。

まさかここで絶賛迷子発売中になるとは思わなかった。そんなもの買った覚えはないのに自分は迷子である。人が来るまで待ってみようか。

（でも……１０１人（みんな）の乙女がどこにいるかわかんないし、ここがこの空間のどの位置に位置するのかわかんないし……）

先代アルミスの言った通り、やはりこの《最聖域》は彼女に支配されているようだ。「戍石」とやらは知らないが、現に優衣は迷子になっている。この空間は度々作り直されるらしいし、歩き回るのも無謀だと思って床に座り込む。天井を見上げて目を見開いた。

（なんだろう……？　月と、太陽と、ヒト……？　数式的な図形……？）

中央に太陽。その左に一回り小さな月。太陽を拝むのはヒト。方陣だ。

何となくこれに似た、サークルなら見たことがある。テレビの番組だ。しかしここは異世界。これが何なのか検討もつかなかった。

地響きのような音を立てて扉が開いた。あわててそちらを見やる。

扉から出てきたのは綺麗な顔立ちをした青年であった。たぶん上級神官の一人であろう。神官の服装と、それ相応の白い帽子が彼の身分を示している。

（まさか……！）

第三次試験のときに泉に落ちそうになったところを助けてもらった、あの青年ではないか。一瞬だけ見えた色の薄い緑の瞳。間違いない。あの時に助けてもらった青年だ。

上級神官の青年は、こちらを見て驚いたようだ。すぐにこちらに駆け寄る。

「大丈夫ですか？　色々大変だったでしょうに」

「は、はい。ありがとうございます」

（あれ……っ。何か、どっかで聞いたことがあるような……？）

なぜそう思ったのかはわからない。

「それは良かった。実は、国王陛下を探しているのですけれど、貴女は見ませんでしたか？」

国王もこの世界のどこかに居たのだとすれば危ないな。衛兵たちが「国王さまー」と叫びながら走り回っているだろう。優衣はもちろん頷く。すると彼は「一緒に行動を共にしませんか」ときた。

否定する理由もへったくれもないから即答である。

青年は神官なのだから、色々と知っているかもしれない。それにいま、優衣が頼れるのはこの青年だけだ。

「……あの、どうやったらここから出られるか、わかりますか？」

そのとき、青年が入ってきた扉が音を立てて閉じていった。いったいどこに繋がっていただろうか。

「……とりあえず、先代アルミスが言っていた通り『証』を探す必要がありますね。手がかりになりそうな文章は知っていますよ」

確かにそうだ。先代アルミスは、試練はアルミスの証を見つけることだと言っていた。ヒントを与えるような言葉を言ったのは、それだけ彼女に自信があったからだろう。

優衣が頷くと、青年は目を閉じて文章を読み上げた。

「――？太陽の神　いずれこのとき
三千と二百の月日経ちて乙女を集える
清き乙女　現れれば
その瞳　悪しき宝を封じらん
証を欲しいものよ
清き黒の術（わざ）を操るものと共に
聖なる証が現れん？――」

青年の声に反応し、扉が一つだけ開放される。まるで、中に入れと言うかのように。優衣と青年は互いに顔を見合わせた。青年が苦笑気味に「行きましょうか」と誘ってくる。もちろんノ―とは言わないし言えない。扉の中に入ったら、周りの景色ががらりとかわった。

がらがらがらと背後にある扉が閉まっても、優衣は振り向けない。

まるでパラレルワールドだ。

闇の空間にボールといえる大きな球が無数に浮いている。カラフルであったり赤一色であったりと、色はバラバラ。サーカスで使う

球みたいだ。

「道が無いですね……」

見たところ、一歩踏み出せば漆黒の闇。もしかしたら落ちてしまうかもしれない。踏み出す勇気などあるわけなかった。

（ここからどうしろと……。まさか、ボールに乗り移れと？　）

「――――しき」

（え……？）

青年が小さく呟いた。と同時に、どこかへ導くかのような道ができ始める。空中に出現した薄暗い光の道に、青年が一歩踏み出す。

「すぐにこの道が消えるかもしれません。行きましょう」

優衣の有無を確認するまもなく、なぜか薄暗いこの光りの道が、陽炎のように揺らぎ始めた。この道が消えてしまうと悟るより早く、青年が優衣の腕を掴んで引っ張った。

「走って」

「っ！」

走ってある程度離れると、さきほど優衣たちがいた場所が崩れ始めた。しかもその崩れが、連鎖のようにこちらに伸びてくる。明らかに崩れるスピードの方が早い。

青年の左腕が熱を持ち始めているのに気付いたのとほぼ同時だっ

た。

（百メートル走、わたし何秒だっけ？　１６秒だっけ？　で、あっちは、１２秒くらい？）

その差４秒。たったと思うかもしれないが、結構大きいのだ。その差は。

「……っ……痛いのは嫌いですが、仕方ありません……っ！」

青年が何事かと呟いた。優衣がそのことに気付くより、左腕が熱くなっていることの方が気になる。優衣は後ろの振り返ってみると、光の道が崩れるのが遅くなっていた。しかしさっきより光が弱くなっているような。

「！　扉だ！」

優衣は喜びに声を上げた。大きな扉が、おかえりと言うかのように開いて待っている。

あと十メートル。

……五メートル。

……一メートル。

「う、うそでしょ！」

扉に飛び込んで出てきたのは扉の空間であった。永遠に繰り返してしまいそうな扉のループ。

「根本的な解決には至らなかったようですね」

青年が苦笑。のち真顔に戻り、優衣と向き直った。

「どうやらこの扉は、声に反応して開くようです。神官に伝えられる秘文といえばこの程度でしょうが――――」

（なにさ……？）

不自然に声が途切れる。驚いて見上げると、青年が顔を歪めて左腕を押さえつけていた。

かたちのよい唇から、熱い、と、こぼれ落ちてくる。

「だ、大丈夫ですか！？」

青年が膝を地面に付けた。彼の左腕が、まるで己[彼]の手ではないように、ひきひきと動いている。見ることしかできない優衣とは違い、青年の左腕には焼けるような熱と痛みが走っていた。

大丈夫ともいえない激痛のなか、青年は自身の左腕を押さえ込む。いや……抑えこんでいる。

ふわぁと、光が視界の端でちらついた。

「扉が……！」

光が花のように舞い。

導くように扉が開く。

彼の左腕に、一瞬だけ蜘蛛のかたちが浮かび上がった。

「行きましょう。もう、治まりましたから……」

憔悴した顔で青年は弱弱しく微笑する。先導するように立ち上がり、優衣の背中を軽く押した。

「えっうん」

青年が先に行ってから、優衣は扉を潜る。

――――――扉が――――――またゆっくりと閉まっていった。

15　太陽神の乙女・アルミス　前編　（下）（後書き）

前回もやりましたが、作者が個人的に会話だけのギャグが好きなので、シリアスをぶっこわしても良いと思われる読者様は、この先の会話をどうぞ（笑）

――……作者（リノさん）……埋葬中……――

優衣「ふぅ。終わった」
幽霊「ちょっとあんた、創造神埋めちゃっていいの？」
優衣「いいのいいの。操り人形（マリオネット）は自分で動くから」
作者「作者ふっかーつ！！」
優衣＆幽霊「墓ん中から何か出てきたーーーっ！」
作者「失礼な、わたしは骨だけの作者・リノさんですよ。どこかの化け物ではありません」
優衣「骸骨が喋ったー！」
幽霊「第一骨だけのリノさんってなに？　ここって突っ込――――（創造神（作者）の力により強制退場）――」
優衣「幽霊が消えたー！」
作者もとい骨だけのリノさん「大丈夫です。幽霊君は最新型のジェットコースターに乗るために遊園地に行ったんだけどその帰り道に地獄へつながるジェットコースターもとい暴走バスにはねられ異空間に閉じ込められるという状態になっただけなんだよ」
優衣「全然良くないしっ！　てか幽霊一回死んでるのにもう一回死んじゃったよ？！」
作者「ようこそゾンビワールドへ」
優衣「ぎゃぁあああ意味分かんないけどぎゃ追っかけてきたぁ！」

～最終回ＥＮＤ～……（たぶん）

１６　太陽神の乙女・アルミス　後編　（上）

「――――？太陽神の乙女の証？とは、すなわち、この空間の中央部にある至宝のこと。
そこにたどり着けるのは、真のアルミスのみですわ」

（！）

凛とした少女の声。１００人の乙女候補たちと、祭壇には国王陛下がいた。
最初の場所だ。自分は最後尾にいるし、うしろには上級神官の青年も立っている。優衣は辺りを見渡した。

（ど、どうなってるの……？　まさか、あそこに迷い込んだのは私と彼だけ……？）

疑問に答えてくれる者など誰もいない。凛とした乙女の声は、試験二位のフェルシア・バイトンであった。

「国王陛下。後のお話はお任せしてもよろしいでしょうか」

祭壇の上に佇む国王陛下を彼女が見上げる。

「うむ。本来であらば、先代アルミスがそなたらに試練を与え、その合格者が当代のアルミスとなれる手はずであった。緊急時に備えてある【神の選定】を執り行う。これは古代魔術ゆえ、どのような

ことが起きてもおかしくはないが、みな異論はないな？」

全員が一世に首肯した。ここから出られるか出られないかがかかっているのだから、当たり前の反応であろう。

「【神の選定】ののち、真のアルミスにはその証を取りに行ってもらう。みな心して待たれよ」

静かになった。神官長が祭壇の上の中央に立ち、何も無い闇に向かって深い礼をとる。祈りを込めて、詠唱を言葉にした。

「――　太陽の神　いまここに
乙女とならん清き１０１人の少女は集えた
選定をしよ　神よ
このなかの　聖なる乙女は誰なのか　――――――――」

「っ！」

衝撃であった。右腕の、あの太陽の刻印が、熱く、熱を持っている。灼熱の炎に入れたように熱い。
少しずつ金色の光をまといながら、優衣の意思に反して太陽の刻印は熱を持つ。だんだんと大きなる金色の光をおさえようと、腕を隠して圧迫しようとする。が――――

「な……っ！」

その声は、優衣ではなかった。優衣の方が口を開けたまま固まっているというのに、青年が驚愕に目を見開く。緑の瞳に、一瞬だけ自己嫌悪が走った。

彼のその手で、優衣の右腕を掴みあげているというのに。

「……ユイ・ヒサキ。前に進み出よ」

国王が呼ぶ。行かなければならない。何はともあれ、国王が直々に自分を呼んでいるのだから。

でも。

何だと言うのだ。目が、離せなかった。緑の瞳が、どことなく、罪悪感が滲んでいて。

（……――――――！）

まさか、と優衣は唇だけでつぶやいていた。その時には、青年は優衣の手を離している。

罪悪感と憂いの混じった色の薄い目を、青年はゆっくり逸らした。

「！」

「ユイ・ヒサキ。前にでよ」

国王が再度呼ぶ。動けかせない思っていた足を無理やり動かし、青年を再度見つめてから、祭壇へ向かった。乙女たちの視線が、羨ましさと、憎悪などが含まれているのを、感じながら。

「――――腕を見せよ」

言われるままに腕を見せた。腕まで隠す手袋を外すと、金色に光る太陽の刻印が、自分の右腕にある。

国王は朗々と宣言した。

「【神の選定】により、太陽神の乙女の証との契約を行うまで、ユイ・ヒサキを暫定的に当代アルミスとして扱うことを、ここで事前に宣言する――――！」

「っ！」

美少女でも、ましてやこの世界の人間でもない優衣は、暫定アルミスだと。何かの間違いではないか。いまここでネタばらしという看板が出てきてもいいのではないか、と思った。

……チッ……ッ……

舌打ちが聞こえた。優衣はそれが誰なのか気付く――――――フェルシアだ。

彼女は自分とは違って、綺麗で、頭も良くて、家柄もあるお嬢様。だが、彼女は選ばれなかった。

憎々しげに自分を見つめる視線は、「あなたは相応しくない」と言っているよう。

ここで勝ち誇った顔をできたらどんなに気が楽になるだろうか。101人の乙女候補にはやる気満々でここまでやって来た優衣だが、アルミスになろうとはこれっぽっちも思っていなかった。ましてさすがのルカでさえ、そこまで頑張らなくていいと言ってくれたのだ。ここの場に見知った人間がいたら、少しは落ち着けるかもしれないのに。

「暫定アルミス、ユイ・ヒサキよ。証を見つけよ。さすれば、先代アルミスの言った通り、この《最聖域》から脱出も可能。「戍石（まもりいし）」は後で取り返せば良い」

国王と宰相の期待。１００人の乙女からの視線。上級神官の青年の苦悩。

（『証』って……！　そんなこと言われても、わかんないものはわかんないじゃん！）

心の中で叫ぶが、打開策は見つからない。魔法みたいに空から『証』が降ってきてはくれないだろうか。無理だ。その言葉が頭の中でぐるぐる回る。

「――――本物のアルミスは、このわたくしにこそ相応しいもの――――！」

フェルシアがこっちに来る。神官たちの制止をきかず、国王の御前なのに無視して通り過ぎ、優衣の目の前に現われた。

「祖母から母へ、そして母からわたくしへ。アルミスの代は我が家系で受け継いでいくはずだったのに……！　それを！」

（…まさか、先代アルミスは、あなたの、母親……？）

先代アルミスの顔と、自分の母親の顔とが重なって。

乙女たちの悲鳴と、誰かが駆け出す音が聞こえ、優衣の目の前で赤い鮮血が華をちらした。

……ぽた……

「ぁ……」

自分の右腕に――――金色に輝く太陽の刻印に、まるで胸元にあ

るルビーのように赤い血が包み込んでいく。腕を刺したナイフと、少量ながらも真っ赤な血が、優衣の視界に入った。

「ほら真っ赤。ふふふ。みじめね……、せっかくの綺麗なドレスが、台無しですの…」

少女の声も。

「神官！　この者を取り押さえるのじゃ！　暫定アルミスを傷つけたものとして、極刑の罪に値する！」

宰相の声も。

「……ぁ………。……ぁっ！」

優衣の耳には、届かない。
ただ衝撃だけで、言葉にならない声が発せられた。

「ぁぁ…………ぁぁあああああぁぁぁぁああああぁぁぁああああああああぁぁぁああぁぁああ！」

優衣の体を、上級神官であるあの青年が真っ先に支えるが、その感覚すら優衣にはない。彼は自身の衣服である神官の裾を口に銜えてちぎり、彼女の腕に止血を施す。暴れることは無かったが、目は虚ろで焦点が合っていなかった。

「ぁぁぁああぁぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあぁあああああああああぁぁぁあ！！」

頭の中に流れ込む感情と母の顔。死んだはずなのに、母は優衣を

苦しめ続ける。
克服しないと、と思っていた。忘れるなら、完全に忘れてしまおう、と。
――――でも、目の前にあるのは、……真っ赤なわたしの血……――――
死にたくない死にたくない。死にたくない死にたくない！
「いやっ！　いやいや、いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
一緒に死ぬとか、言わないで……！
「……貴女は」
小さな声だった。優衣の心の中に、ほんのちょっとだけ、彼の声が浸透する。叫びすぎて声帯を痛めてしまったのか、叫ぶの止めた途端のどに違和感を感じた。
「貴方の母上が、本当に憎んでいらしゃったのか、貴方はわかりますか――――？」
（……え――――？）
さっきまでの青年とまるで違う、若干高めで丁寧な美声。耳の奥まで注ぎこまれるその声に、なぜか優衣は耳を澄ませてしまった。

１６　太陽神の乙女・アルミス　後編　（上）（後書き）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0776x/

イーストタンプ

2011年11月17日17時36分発行